

平成十四年法律第二十二号

都市再生特別措置法

目次

- 第一章 総則(第一条・第二条)
- 第二章 都市再生本部(第三条―第十三条)
- 第三章 都市再生基本方針(第十四条)
- 第四章 都市再生緊急整備地域における特別の措置
 - 第一節 地域整備方針等(第十五条―第十九条)
 - 第二節 整備計画の作成等(第十九条の二―第十九条の十二)
 - 第三節 都市再生駐車施設配置計画の作成等(第十九条の十三・第十九条の十四)
 - 第四節 都市再生安全確保計画の作成等(第十九条の十五―第十九条の二十)
 - 第五節 民間都市再生事業計画の認定等(第二十条―第三十五条)
 - 第六節 都市計画等の特例
 - 第一款 都市再生特別地区等(第三十六条―第三十六条の五)
 - 第二款 都市計画の決定等の提案(第三十七条―第四十一条)
 - 第三款 都市再生事業等に係る認可等の特例(第四十二条―第四十五条)
 - 第七節 都市再生歩行者経路協定(第四十五条の二―第四十五条の十二)
 - 第八節 都市再生安全確保施設に関する協定
 - 第一款 回避経路協定(第四十五条の十三)
 - 第二款 回避施設協定(第四十五条の十四)
 - 第三款 管理協定(第四十五条の十五―第四十五条の二十)
 - 第四款 非常用電気等供給施設協定(第四十五条の二十一)
- 第五章 都市再生整備計画に係る特別の措置
 - 第一節 都市再生整備計画の作成等(第四十六条―第四十七条の八)
 - 第二節 交付金(第四十七条―第五十条)
 - 第三節 都市計画等の特例等
 - 第一款 都市計画の決定等に係る権限の移譲等(第五十一条―第五十三条)
 - 第二款 都市計画の決定等の要請及び提案(第五十四条―第五十七条の二)

- 第三款 道路整備に係る権限の移譲等(第五十八条―第六十一条)
- 第四款 道路の占用の許可基準の特例(第六十二条)
- 第五款 都市公園法の特例等(第六十二条の二―第六十二条の七)
- 第六款 都市再生推進法人を経由した道路又は都市公園の占用等の許可の申請手続(第六十二条の八)
- 第七款 駐車場法の特例等(第六十二条の九―第六十二条の十二)
- 第八款 普通財産の活用(第六十二条の十三)
- 第九款 景観計画の策定等の提案(第六十二条の十四)
- 第十款 歴史的風致維持向上計画の認定の申請手続の特例(第六十二条の十五)
- 第四節 民間都市再生整備事業計画の認定等(第六十三条―第七十二条)
- 第五節 都市再生整備歩行者経路協定(第七十三条)
- 第六節 都市利便増進協定(第七十四条―第七十八条の二)
- 第七節 低未利用土地利用促進協定(第七十八条の三―第八十条の九)
- 第六章 立地適正化計画に係る特別の措置
 - 第一節 立地適正化計画の作成等(第八十一条―第八十五条)
 - 第二節 居住誘導区域に係る特別の措置
 - 第一款 都市計画の決定等の提案(第八十六条―第八十七条)
 - 第一款の二 宅地造成等関係行政事務の処理に係る権限の移譲(第八十七条の二)
 - 第一款の三 土地区画整理法の特例(第八十七条の三―第八十七条の五)
- 第二款 建築等の届出等(第八十八条)
- 第三款 居住調整地域等(第八十九条―第九十四条)
- 第四款 居住環境向上用途誘導地区(第九十四条の二)
- 第三節 都市機能誘導区域に係る特別の措置
 - 第一款 民間誘導施設等整備事業計画の認定等(第九十五条―第一百四条)

- 第一款の二 都市再開発法の特例(第一百四条の二)
- 第二款 土地区画整理法の特例(第一百五十五条―第一百五十六条の四)
- 第三款 駐車場法の特例等(第一百六条・第一百七条)
- 第四款 建築等の届出等(第一百八条)
- 第五款 休廃止の届出等(第一百八条の二)
- 第六款 特定用途誘導地区(第一百九条)
- 第三節の二 都市計画法の特例(第一百九条の二・第一百九条の三)
- 第四節 立地誘導促進施設協定(第一百九条の四―第一百九条の六)
- 第四節の二 居住誘導区域等権利設定等促進計画等(第一百九条の七―第一百九条の十三)
- 第五節 低未利用土地権利設定等促進計画等(第一百九条の十四―第一百九条の二十一)
- 第六節 跡地等管理協定等(第一百十条―第一百十六条)
- 第七章 市町村都市再生協議会(第一百七十七条)
- 第八章 都市再生推進法人(第一百八条―第一百二十三条)
- 第九章 雑則(第二百二十四条―第二百二十八条)
- 第十章 罰則(第二百二十九条―第二百三十一条)

附則

第一章 総則

(目的)

第一条 この法律は、近年における急速な情報化、国際化、少子高齢化等の社会経済情勢の変化に我が国が十分に対応できなかったものとなっていないことに鑑み、これらの情勢の変化に対応した都市機能の高度化及び都市の居住環境の向上(以下「都市の再生」という。)を図り、併せて都市の防災に関する機能を確保するため、都市の再生の推進に関する基本方針等について定めるとともに、都市再生緊急整備地域における市街地の整備を推進するための民間都市再生事業計画の認定及び都市計画の特例、都市再生整備計画に基づく事業等に充てるための交付金の交付並びに立地適正化計画に基づく住宅及び都市機能増進施設の立地の適正化を図るための都市計画の特例等の措置を講じ、もつて社会経済構造の転換を円滑化し、国民経済の健全な発展及び国民生活の向上に寄与することを目的とする。

(定義)

第二条 この法律において「都市開発事業」とは、都市における土地の合理的かつ健全な利用及び都市機能の増進に寄与する建築物及びその敷地の整備に関する事業(これに附帯する事業を含む。)のうち公共施設の整備を伴うものをいう。

2 この法律において「公共施設」とは、道路、公園、広場その他政令で定める公共の用に供する施設をいう。

3 この法律において「都市再生緊急整備地域」とは、都市の再生の拠点として、都市開発事業等を通じて緊急かつ重点的に市街地の整備を推進すべき地域として政令で定める地域をいう。

4 この法律において「都市の国際競争力の強化」とは、都市において、外国会社、国際機関その他の者による国際的な活動に関連する居住者、来訪者又は滞在者を増加させるため、都市開発事業等を通じて、その活動の拠点の形成に資するよう、都市機能を高度化し、及び都市の居住環境を向上させることをいう。

5 この法律において「特定都市再生緊急整備地域」とは、都市再生緊急整備地域のうち、都市開発事業等の円滑かつ迅速な施行を通じて緊急かつ重点的に市街地の整備を推進することが都市の国際競争力の強化を図る上で特に有効な地域として政令で定める地域をいう。

第二章 都市再生本部

(設置)

第三条 都市の再生に関する施策を迅速かつ重点的に推進するため、内閣に、都市再生本部(以下「本部」という。)を置く。

第四条 本部は、次に掲げる事務をつかさどる。

一 第十四条第一項に規定する都市再生基本方針(次号及び次条第一項において単に「都市再生基本方針」という。)の案の作成に関すること。

二 都市再生基本方針の実施を推進すること。

三 都市再生緊急整備地域を指定する政令及び特定都市再生緊急整備地域を指定する政令の制定及び改廃の立案をすること。

四 都市再生緊急整備地域ごとに、第十五条第一項に規定する地域整備方針を作成し、及びその実施を推進すること。

五 前各号に掲げるもののほか、都市の再生に
関する施策で重要なものの企画及び立案並び
に総合調整に関する事。

(都市再生緊急整備地域を指定する政令等の制
定改廃の立案)

第五条 地方公共団体は、その区域内に都市再生
基本方針に定められた第十四条第二項第三号の
基準に適合し、又は適合しなくなった地域があ
ると認めるときは、都市再生緊急整備地域を指
定する政令又は特定都市再生緊急整備地域を指
定する政令の制定又は改廃の立案について、本
部に対し、その旨の申出をすることができ、

2 本部は、都市再生緊急整備地域を指定する政
令又は特定都市再生緊急整備地域を指定する政
令の制定又は改廃の立案をしようとするとき
は、あらかじめ、関係地方公共団体の意見を聴
き、その意見を尊重しなければならない。

(組織)

第六条 本部は、都市再生本部長、都市再生副本
部長及び都市再生本部長をもって組織する。
(都市再生本部長)

第七条 本部長は、都市再生本部長(以下「本
部長」という。)とし、内閣総理大臣をもって
充てる。
2 本部長は、本部の事務を総括し、所部の職員
を指揮監督する。

(都市再生副本部長)

第八条 本部に、都市再生副本部長(次項及び次
条第二項において「副本部長」という。)を置
き、国務大臣をもって充てる。

2 副本部長は、本部長の職務を助ける。
(都市再生本部長)

第九条 本部に、都市再生本部長(次項において
「本部長」という。)を置く。
2 本部長は、本部長及び副本部長以外のすべて
の国務大臣をもって充てる。

(資料の提出その他の協力)

第十条 本部は、その所掌事務を遂行するため必
要があると認めるときは、国の行政機関、地方
公共団体、独立行政法人(独立行政法人通則法
(平成十一年法律第三号)第二条第一項に規
定する独立行政法人をいう。以下同じ。)及び
地方独立行政法人(地方独立行政法人法(平成
十五年法律第十八号)第二条第一項に規定す
る地方独立行政法人をいう。以下同じ。)の長
並びに特殊法人(法律により直接に設立された
法人又は特別の法律により特別の設立行為をも

つて設立された法人であつて、総務省設置法
(平成十一年法律第九十一号)第四条第一項第
八号の規定の適用を受けるものをいう。以下同
じ。)の代表者に対して、資料の提出、意見の
開陳、説明その他必要な協力を求めることがで
きる。

2 本部は、その所掌事務を遂行するため特に必
要があると認めるときは、前項に規定する者以
外の者に対しても、必要な協力を依頼すること
ができる。

(事務)

第十一条 本部に関する事務は、内閣府において
処理する。
(主任の大臣)

第十二条 本部に係る事項については、内閣法
(昭和二十二年法律第五号)にいう主任の大臣
は、内閣総理大臣とする。

(政令への委任)

第十三条 この法律に定めるもののほか、本部に
関し必要な事項は、政令で定める。

第三章 都市再生基本方針

第十四条 内閣総理大臣は、都市の再生に関する
施策の重点的かつ計画的な推進を図るための基
本的な方針(以下「都市再生基本方針」とい
う。)の案を作成し、閣議の決定を求めなけれ
ばならない。

2 都市再生基本方針には、次に掲げる事項を定
めるものとする。

- 一 都市の再生の意義及び目標に関する事項
- 二 都市の再生のために政府が重点的に実施す
べき施策に関する基本的な方針
- 三 都市再生緊急整備地域を指定する政令及び
特定都市再生緊急整備地域を指定する政令の
立案に関する基準その他基本的な事項
- 四 第四十六条第一項に規定する都市再生整備
計画の作成に関する基本的な事項
- 五 第八十一条第一項に規定する立地適正化計
画の作成に関する基本的な事項

3 都市再生基本方針は、我が国の活力の源泉で
ある都市が、近年における急速な情報化、国際
化、少子高齢化等の社会経済情勢の変化に的確
に対応し、その魅力と国際競争力を高め、都市
の再生を実現し、併せて都市の防災に関する機
能を確保することができるものとなるよう定め
なければならない。

4 第二項第三号の特定都市再生緊急整備地域を
指定する政令の立案に関する基準は、特定都市

再生緊急整備地域として、国内外の主要都市と
の交通の利便性及び都市機能の集積の程度が高
く、並びに経済活動が活発に行われ、又は行わ
れると見込まれる地域が指定されるものとなる
よう定めなければならない。

5 内閣総理大臣は、第一項の規定による閣議の
決定があつたときは、遅滞なく、都市再生基本
方針を公表しなければならない。

6 第一項及び前項の規定は、都市再生基本方針
の変更について準用する。

第四章 都市再生緊急整備地域における特
別の措置

第一節 地域整備方針等
(地域整備方針)

第十五条 本部は、都市再生緊急整備地域(こ
に、都市再生基本方針に即して、当該都市再生
緊急整備地域の整備に関する方針(以下「地域
整備方針」という。)を定めなければならない。
2 地域整備方針には、次に掲げる事項を定める
ものとする。

- 一 都市再生緊急整備地域の整備の目標(特定
都市再生緊急整備地域が指定されている場合
にあつては、都市再生緊急整備地域の整備の
目標及び特定都市再生緊急整備地域の整備の
目標)
- 二 都市再生緊急整備地域において都市開発事
業を通じて増進すべき都市機能に関する事項
- 三 都市再生緊急整備地域における都市開発事
業の施行に關連して必要となる公共施設その
他の公益的施設(以下「公共公益施設」とい
う。)の整備及び管理に関する基本的な事項
- 四 前三号に掲げるもののほか、都市再生緊急
整備地域における緊急かつ重点的な市街地の
整備の推進に關し必要な事項

3 地域整備方針は、大規模な地震が発生した場
合における滞り、来訪者又は居住者(以下
「滞り者等」という。)の安全を確保することが
できるものとなるよう定めなければならない。

4 特定都市再生緊急整備地域が指定されている
都市再生緊急整備地域に係る地域整備方針(当
該特定都市再生緊急整備地域に係る部分に限
る。)は、外国会社、国際機関その他の者によ
る国際的な活動の拠点となるにふさわしい市街
地の形成を実現することができるものとなるよ
う定めなければならない。

5 関係地方公共団体は、必要があると認めると
きは、本部に対し、地域整備方針の案の内容と
するべき事項を申し出ることができる。

6 本部は、地域整備方針を定めようとするとき
は、あらかじめ、関係地方公共団体の意見を聴
き、その意見を尊重しなければならない。

7 本部は、地域整備方針を定めるときは、遅滞
なく、これを公表するとともに、関係地方公共
団体に送付しなければならない。

8 前三項の規定は、地域整備方針の変更につい
て準用する。

(都市開発事業についての配慮)

第十六条 国の行政機関及び関係地方公共団体の
長は、都市再生緊急整備地域における都市開発
事業の施行に關し、法令の規定による許可その
他の処分を求められたときは、当該都市開発事
業が円滑かつ迅速に施行されるよう、適切な配
慮をするものとする。

(公共公益施設の整備)

第十七条 国及び関係地方公共団体は、地域整備
方針に即して、都市再生緊急整備地域における
都市開発事業の施行に關連して必要となる公共
公益施設の整備の促進に努めるものとする。

(市街地の整備のために必要な施策の推進)

第十八条 前二条に定めるもののほか、国及び関
係地方公共団体は、地域整備方針に即して、都
市再生緊急整備地域における市街地の整備のた
めに必要な施策を重点的かつ効果的に推進す
るよう努めるものとする。

(産業の国際競争力の強化に関する施策との有
機的な連携)

第十八条の二 国及び関係地方公共団体は、特定
都市再生緊急整備地域における都市の国際競争
力の強化を図るために必要な施策を、産業の国
際競争力の強化に關する施策との有機的な連携
を図りつつ総合的かつ効果的に推進するよう努
めるものとする。

(都市再生緊急整備協議会)

第十九条 国の関係行政機関の長のうち本部長及
びその委嘱を受けたもの並びに関係地方公共団
体の長(以下「国の関係行政機関等の長」とい
う。)は、都市再生緊急整備地域(こ)に、当該
都市再生緊急整備地域における緊急かつ重点的
な市街地の整備に關し必要な協議(特定都市再
生緊急整備地域が指定されている都市再生緊急
整備地域にあつては、当該協議並びに次条第一
項に規定する整備計画の作成及び当該整備計画
の実施に係る連絡調整)を行うため、都市再生
緊急整備協議会(以下この章において「協議
会」という。)を組織することができる。

2 国の関係行政機関等の長は、必要と認めるときは、協議して、協議会に、独立行政法人の長、特殊法人の代表者、地方公共団体の長その他の執行機関（関係地方公共団体の長を除く）、地方独立行政法人の長、当該都市再生緊急整備地域内において都市開発事業を施行する民間事業者、当該都市再生緊急整備地域内の建築物の所有者、管理者若しくは占有者、鉄道事業法（昭和六十一年法律第九十二号）第七条第一項に規定する鉄道事業者又はこれらの者及び国の関係行政機関等の長以外の者であつて当該都市再生緊急整備地域内において公共施設施設の整備若しくは管理を行う者（第七項において「独立行政法人の長等」と総称する。）を加えることができる。

3 当該都市再生緊急整備地域において都市開発事業（当該都市開発事業を施行する土地（水面を含む。）の区域の面積が政令で定める規模以上のものに限る。）を施行する民間事業者及び協議会が組織されていないときは、本部長及び関係地方公共団体の長に対して、協議会を組織するよう要請することができる。

4 前項の規定による要請を受けた本部長及び関係地方公共団体の長は、正当な理由がある場合を除き、当該要請に応じなければならない。

5 第三項の民間事業者であつて協議会の構成員でないものは、第一項の規定により協議会を組織する国の関係行政機関等の長に対して、自己を協議会の構成員として加えることを申し出ることができる。

6 前項の規定による申出を受けた国の関係行政機関等の長は、正当な理由がある場合を除き、当該申出に応じなければならない。

7 第一項の協議を行うための会議（以下この条において単に「会議」という。）は、国の関係行政機関等の長並びに第二項及び前項の規定により加わつた独立行政法人の長等又はこれらの指名する職員をもって構成する。

8 協議会は、会議において協議を行うため必要があると認めるときは、国の行政機関の長、地方公共団体の長その他の執行機関、独立行政法人及び地方独立行政法人の長並びに特殊法人の代表者に対して、資料の提供、意見の開陳、説明その他必要な協力を求めることができる。

9 協議会は、会議において協議を行うため特に必要があると認めるときは、前項に規定する者以外の者に対しても、必要な協力を依頼することができる。

10 協議会は、当該都市再生緊急整備地域における都市開発事業及び公共施設施設の整備を通じて市街地の整備の状況を勘案し、当該都市再生緊急整備地域の都市機能を補充するため必要があると認めるときは、地理的、経済的又は社会的な観点からみて密接な関係を有する他の都市再生緊急整備地域に係る協議会に対し、その会議において、当該他の都市再生緊急整備地域における都市開発事業及びその施行に関連して必要となる公共施設施設の整備の実施に関し協議を行うよう求めることができる。

11 会議において協議が調つた事項については、協議会の構成員は、その協議の結果を尊重しなければならない。

12 協議会の庶務は、内閣府において処理する。

13 前各項に定めるもののほか、協議会の運営に関し必要な事項は、協議会が定める。

第二節 整備計画の作成等

第十九条の二 特定都市再生緊急整備地域が指定されている都市再生緊急整備地域に係る協議会は、地域整備方針に基づき、特定都市再生緊急整備地域について、都市の国際競争力の強化を図るために必要な都市開発事業及びその施行に関連して必要となる公共施設施設の整備等に関する計画（以下「整備計画」という。）を作成することができる。

2 整備計画には、次に掲げる事項を記載するものとする。

- 一 都市開発事業及びその施行に関連して必要となる公共施設施設の整備等を通じた都市の国際競争力の強化に関する基本的な方針
- 二 都市の国際競争力の強化を図るために必要な次に掲げる事業並びにその実施主体及び実施期間に関する事項
- イ 都市開発事業
- ロ イに掲げる事業の施行に関連して必要となる公共施設施設の整備に関する事業

三 前号イ又はロに掲げる事業により整備された公共施設施設の適切な管理のために必要な事項

四 前三号に掲げるもののほか、都市の国際競争力の強化のために必要な都市開発事業及びその施行に関連して必要となる公共施設施設の整備等の推進に関し必要な事項

3 整備計画は、国の関係行政機関等の長及び前項第二号イ又はロに掲げる事業の実施主体として記載された者の全員の合意により作成するものとする。

4 第二項第二号イ又はロに掲げる事業に関する事項には、都市施設等（都市計画法（昭和四十三年法律第百号）第四条第五項に規定する都市施設（以下「都市施設」という。）又は同条第七項に規定する市街地開発事業（以下「市街地開発事業」という。）をいう。以下同じ。）に関する都市計画に関する事項であつて、同号イ又はロに掲げる事業の実施のために必要なものがあるときは、当該事項を記載することができる。

5 協議会は、整備計画に前項の事項を記載しようとするときは、当該事項について、あらかじめ、同項の都市計画に係る都市計画決定権者（都市計画法第十五条第一項の都道府県若しくは市町村又は同法第八十七条の二第一項の指定都市をいい、同法第二十二条第一項の場合にあつては、同項の国土交通大臣（同法第八十五条の二の規定により同法第二十二条第一項に規定する国土交通大臣の権限が地方整備局長又は北海道開発局長に委任されている場合にあつては、当該地方整備局長又は北海道開発局長。第六節において同じ。）又は市町村をいう。以下この節において同じ。）に協議し、その同意を得なければならない。

6 第四項の規定により整備計画に都市施設等に関する都市計画に関する事項を記載するときには、併せて、当該都市計画の案を都道府県都市計画審議会（都市計画決定権者である市町村に市町村都市計画審議会が置かれているときは、当該市町村都市計画審議会。以下この節において同じ。）に付議する期限を記載するものとする。この場合においては、当該期限は、都道府県都市計画審議会への付議に要する期間を勘案して、相当なものとなるように定めるものとする。

7 第四項の規定により整備計画に都市施設等に関する都市計画に関する事項を記載するときには、併せて、当該都市計画に係る都市施設に関する都市計画事業（都市計画法第四十五条に規定する都市計画事業をいう。以下同じ。）又は当該都市計画に係る市街地開発事業の施行予定者（第二項第二号イ又はロに掲げる事業の実施主体として記載された者であるものに限る。）及び施行予定者である期間として都市計画に定めるべき事項を記載することができる。

8 第二項第二号イに掲げる事業に関する事項には、国際会議場施設その他の都市の国際競争力の強化に資するものとして国土交通省令で定める施設（第三十条において「国際競争力強化施設」という。）の整備に関する事項を記載することができる。

9 第二項第二号ロに掲げる事業に関する事項及び同項第三号に掲げる事項には、下水（下水道法（昭和三十三年法律第七十九号）第二条第一号に規定する下水をいう。第十九条の七において同じ。）を熱源とする熱を利用するための設備を有する熱供給施設（熱供給事業法（昭和四十七年法律第八十八号）第二条第四項に規定する熱供給施設をいう。）その他これに準ずる施設で政令で定めるものの整備及び管理に関する事業であつて第十九条の七第一項の許可に係るものに関する事項を記載することができる。

10 協議会は、整備計画に前項の事項を記載しようとするときは、当該事項について、あらかじめ、同項の許可の権限を有する公共下水道管理者（下水道法第四条第一項に規定する公共下水道管理者をいう。第十九条の七において同じ。）に協議し、その同意を得なければならない。

11 協議会は、整備計画を作成したときは、遅滞なく、これを公表しなければならない。

12 第二項から前項までの規定は、整備計画の変更について準用する。

第十九条の三 整備計画に記載された事業の実施主体は、当該整備計画に従い、事業を実施しなければならない。

第十九条の四 第十九条の二第四項の規定により整備計画に都市施設等に関する都市計画に関する事項が記載されているときは、都市計画決定権者は、当該整備計画に従つて当該都市計画の案を作成して、同条第六項の期限までに、都道府県都市計画審議会に付議するものとする。ただし、災害その他やむを得ない理由があると認められるときは、この限りでない。

第十九条の五 第十九条の二第七項の規定により整備計画に都市施設に関する都市計画事業又は市街地開発事業の施行予定者及び施行予定者である期間が記載されているときは、前条の規定により付議して定められる都市計画には、都市計画法第十一条第二項若しくは第三項又は第十二条第二項若しくは第三項に定める事項のほか、当

て記載された者の全員の合意により作成するものとする。

第二項第二号イ又はロに掲げる事業に関する事項には、都市施設等（都市計画法（昭和四十三年法律第百号）第四条第五項に規定する都市施設（以下「都市施設」という。）又は同条第七項に規定する市街地開発事業（以下「市街地開発事業」という。）をいう。以下同じ。）に関する都市計画に関する事項であつて、同号イ又はロに掲げる事業の実施のために必要なものがあるときは、当該事項を記載することができる。

協議会は、整備計画に前項の事項を記載しようとするときは、当該事項について、あらかじめ、同項の都市計画に係る都市計画決定権者（都市計画法第十五条第一項の都道府県若しくは市町村又は同法第八十七条の二第一項の指定都市をいい、同法第二十二条第一項の場合にあつては、同項の国土交通大臣（同法第八十五条の二の規定により同法第二十二条第一項に規定する国土交通大臣の権限が地方整備局長又は北海道開発局長に委任されている場合にあつては、当該地方整備局長又は北海道開発局長。第六節において同じ。）又は市町村をいう。以下この節において同じ。）に協議し、その同意を得なければならない。

第四項の規定により整備計画に都市施設等に関する都市計画に関する事項を記載するときには、併せて、当該都市計画の案を都道府県都市計画審議会（都市計画決定権者である市町村に市町村都市計画審議会が置かれているときは、当該市町村都市計画審議会。以下この節において同じ。）に付議する期限を記載するものとする。この場合においては、当該期限は、都道府県都市計画審議会への付議に要する期間を勘案して、相当なものとなるように定めるものとする。

第四項の規定により整備計画に都市施設等に関する都市計画に関する事項を記載するときには、併せて、当該都市計画に係る都市施設に関する都市計画事業（都市計画法第四十五条に規定する都市計画事業をいう。以下同じ。）又は当該都市計画に係る市街地開発事業の施行予定者（第二項第二号イ又はロに掲げる事業の実施主体として記載された者であるものに限る。）及び施行予定者である期間として都市計画に定めるべき事項を記載することができる。

べき駐車施設の種類並びに当該種類ごとの駐車施設の位置及び規模に関する事項

3 都市再生駐車施設配置計画においては、前項第二号の駐車施設の位置については計画区域における安全かつ円滑な交通が確保されるように、同号の駐車施設の規模については計画区域における駐車施設の種類の必要が適切に充足されるように定めるものとする。

4 都市再生駐車施設配置計画は、国の関係行政機関等の長の全員の合意により作成するものとする。

5 協議会は、都市再生駐車施設配置計画を作成したときは、遅滞なく、これを公表しなければならない。

6 第二項から前項までの規定は、都市再生駐車施設配置計画の変更について準用する。

第十九条の十四 都市再生駐車施設配置計画に記載された計画区域（駐車場法第二十条第一項の地区若しくは地域又は同条第二項の地区の区域内に限る。）内における同条第一項及び第二項並びに同法第二十条第二項の規定の適用については、同法第二十条第一項中「近隣商業地域内」とあるのは「近隣商業地域内の計画区域（都市再生特別措置法第十九条の十三第二項第一号に規定する計画区域をいう。以下同じ）の区域内」と、「その建築物又はその建築物の敷地内」とあるのは「都市再生駐車施設配置計画（同条第一項に規定する都市再生駐車施設配置計画をいう。以下同じ。）に記載された同条第二項第二号に掲げる事項の内容に即して」と、「駐車場整備地区内又は商業地域内若しくは近隣商業地域内」とあるのは「計画区域の区域内」と、同条第二項中「地区内」とあるのは「地区内の計画区域の区域内」と、同項及び同法第二十条第二項中「その建築物又はその建築物の敷地内」とあるのは「都市再生駐車施設配置計画に記載された都市再生特別措置法第十九条の十三第二項第二号に掲げる事項の内容に即して」と、同項中「前条第一項の地区若しくは地域内又は同条第二項の計画区域の区域内」と、「地区又は地域内」とあり、及び「地区内」とあるのは「計画区域の区域内」とする。

第四節 都市再生安全確保計画の作成等

第十九条の十五 協議会は、地域整備方針に基づき、都市再生緊急整備地域について、大規模な

地震が発生した場合における滞在者等の安全の確保を図るために必要な退避のために移動する経路（以下「退避経路」という。）、一定期間退避するための施設（以下「退避施設」という。）、備蓄倉庫、非常用電気等供給施設（非常用の電気又は熱の供給施設をいう。以下同じ。）その他の施設（以下「都市再生安全確保施設」という。）の整備等に関する計画（以下「都市再生安全確保計画」という。）を作成することができる。

2 都市再生安全確保計画には、次に掲げる事項を記載するものとする。

一 都市再生安全確保施設の整備等を通じた大規模な地震が発生した場合における滞在者等の安全の確保に関する基本的な方針

二 都市開発事業の施行に関連して必要となる都市再生安全確保施設の整備に関する事項並びにその実施主体及び実施期間に関する事項

三 前号に規定する事業により整備された都市再生安全確保施設の適切な管理のために必要な事項

四 都市再生安全確保施設を有する建築物の耐震改修（建築物の耐震改修の促進に関する法律（平成七年法律第二百二十三号）第二条第二項に規定する耐震改修をいう。第十九条の十八第一項において同じ。）その他の大規模な地震が発生した場合における滞在者等の安全の確保を図るために必要な事業及びその実施主体に関する事項

五 大規模な地震が発生した場合における滞在者等の誘導、滞在者等に対する情報提供その他の滞在者等の安全の確保を図るために必要な事業及びその実施主体に関する事項

六 前各号に掲げるもののほか、大規模な地震が発生した場合における滞在者等の安全の確保を図るために必要な事項

3 都市再生安全確保計画は、災害対策基本法（昭和三十六年法律第二百二十三号）第二条第九号に規定する防災業務計画及び同条第十号に規定する地域防災計画との調和が保たれたものでなければならない。

4 都市再生安全確保計画は、国の関係行政機関等の長及び第二項第二号、第四号又は第五号に規定する事業又は事務の実施主体として記載された者の全員の合意により作成するものとする。

5 協議会は、都市再生安全確保計画を作成したときは、遅滞なく、これを公表しなければならない。

6 第二項から前項までの規定は、都市再生安全確保計画の変更について準用する。

第十九条の十六 都市再生安全確保計画に記載された事業又は事務の実施主体は、当該都市再生安全確保計画に従い、事業又は事務を実施しなければならない。

第十九条の十七 協議会は、都市再生安全確保計画に第十九条の十五第二項第一号又は第四号に掲げる事項として建築物の建築等（建築基準法（昭和二十五年法律一百一十号）第二条第十三号に規定する建築、同条第十四号に規定する大規模の修繕、同条第十五号に規定する大規模の模様替又は用途の変更をいう。以下同じ。）に関する事項を記載しようとするとき（当該建築物の建築等について同法第六条第一項（同法第八十七条第一項において準用する場合を含む。）の認定又は同法第十八条第二項（同法第八十七条第一項において準用する場合を含む。）の規定による同一項に規定する場合を除く。）に限り、（次条第一項に規定する場合を除く。）に限り、は、国土交通省令で定めるところにより、あらかじめ、建築主事又は建築副主事に協議し、その同意を得ることができる。

2 建築基準法第九十三条の規定は建築主事又は建築副主事が同法第六条第一項の規定による確認又は同法第十八条第二項の規定による通知を要する建築物の建築等に関する事項について前項の同意をしようとする場合について、同法第九十三条の二の規定は建築主事又は建築副主事が同法第六条第一項の規定による確認を要する建築物の建築等に関する事項について前項の同意をしようとする場合について、それぞれ準用する。

3 協議会は、都市再生安全確保計画に第十九条の十五第二項第二号又は第四号に掲げる事項として建築物の建築等（当該建築物の敷地若しくは建築物の敷地以外の土地で二以上のものが一団地を形成している場合であつて当該一団地（その内に建築基準法第八十六条第八項の規定により現に公告されている他の対象区域（同条第六項に規定する対象区域をいう。以下この項において同じ。）があるときは、当該他の対象区域の全部を含むものに限る。）内に一若しくは

は二以上の構えを成す建築物（二以上の構えを成すものにあつては、総合的設計によつて建築されるものに限る。）が建築される場合又は同条第二項若しくは同法第八十六条の八第一項若しくは第八十七条の二第一項に規定する場合におけるものに限る。）に関する事項を記載しようとするときは、国土交通省令で定めるところにより、あらかじめ、特定行政庁（同法第二条第三十五号に規定する特定行政庁をいう。以下同じ。）に協議し、その同意を得ることができる。

4 第一項又は前項の同意を得た事項が記載された都市再生安全確保計画が第十九条の十五第五項の規定により公表されたときは、当該公表の日（第一項の同意を得た事項に係る事業の実施主体に対する建築基準法第六条第一項若しくは第十八条第三項（同法第八十七条第一項において準用する場合を含む。）の規定による確認済証の交付又は前項の同意を得た事項に係る建築物についての同法第八十六条第一項若しくは第二項、第八十六条の八第一項若しくは第八十七条の二第一項の規定による認定があつたものとみなす。）

第十九条の十八 協議会は、都市再生安全確保計画に第十九条の十五第二項第二号又は第四号に掲げる事項として建築物の耐震改修に関する事項を記載しようとするときは、国土交通省令で定めるところにより、あらかじめ、所管行政庁（建築物の耐震改修の促進に関する法律第二条第三項に規定する所管行政庁をいう。次項において同じ。）に協議し、その同意を得ることができる。

2 建築物の耐震改修の促進に関する法律第十七条第四項及び第五項の規定は、所管行政庁が前項の同意をしようとする場合について準用する。

3 第一項の同意を得た事項が記載された都市再生安全確保計画が第十九条の十五第五項の規定により公表されたときは、当該公表の日（当該事項に係る事業の実施主体に対する建築物の耐震改修の促進に関する法律第十七条第三項の規定による認定があつたものとみなす。）

第十九条の十九 都市再生安全確保計画に記載された第十九条の十五第二項第二号又は第四号に

掲げる事項に係る建築物については、都市再生安全確保施設である備蓄倉庫その他これに類する部分で、特定行政庁が交通上、安全上、防火上及び衛生上支障がないと認めるものの床面積は、建築基準法第五十二条第一項、第二項、第七項、第十二項及び第十四項、第五十七条の二第三項第二号、第五十七条の三第二項、第五十九条第一項及び第三項、第六十条の二第一項及び第四項、第六十八條の三第一項、第六十八條の四、第六十八條の五（第二号イを除く）、第六十八條の五の二（第二号イを除く）、第六十八條の五の三第一項（第一号ロを除く）、第六十八條の五の四（第一号ロを除く）、第六十八條の五の五第一項第一号ロ、第六十八條の八、第六十八條の九第一項、第八十六条第三項及び第四項、第八十六条の二第二項及び第三項、第八十六條の五第三項並びに第八十六條の六第一項に規定する建築物の容積率（同法第五十九條第一項、第六十条の二第一項及び第六十八條の九第一項に規定するものについては、これらの規定に規定する建築物の容積率の最高限度に係る場合に限り。）の算定の基礎となる延べ面積に算入しない。

2 協議会は、都市再生安全確保計画に第十九条の十五第二項第二号又は第四号に掲げる事項として建築物（都市再生安全確保施設である備蓄倉庫その他これに類する部分を有するものに限る。）の建築等に関する事項を記載しようとするときは、国土交通省令で定めるところにより、あらかじめ、特定行政庁に協議し、その同意を得ることができ。

3 前項の同意を得た事項が記載された都市再生安全確保計画が第十九条の十五第五項の規定により公表されたときは、当該公表の日当該事項に係る建築物についての第一項の規定による認定があったものとみなす。

（都市公園の占用の許可の特例）

第十九条の二十 協議会は、都市再生安全確保計画に第十九条の十五第二項第二号に掲げる事項として都市公園（都市公園法（昭和三十一年法律第七十九号）第二条第一項に規定する都市公園をいう。以下同じ。）に設けられる都市再生安全確保施設で政令で定めるものの整備に関する事業に関する事項を記載しようとするときは、国土交通省令で定めるところにより、あらかじめ、当該都市公園の公園管理者（同法第五

条第一項に規定する公園管理者をいう。以下同じ。）に協議し、その同意を得ることができる。前項の同意を得た事項が記載された都市再生安全確保計画が第十九条の十五第五項の規定により公表された日から二年以内当該都市再生安全確保計画に基づく都市公園の占用について都市公園法第六條第一項の許可の申請があった場合においては、公園管理者は、当該許可を与えるものとする。

第五節 民間都市再生事業計画の認定等（民間都市再生事業計画の認定）

第二十条 都市再生緊急整備地域内における都市開発事業であつて、当該都市再生緊急整備地域の地域整備方針に定められた都市機能の増進を主たる目的とし、当該都市開発事業を施行する土地（水面を含む。）の区域（以下この節において「事業区域」という。）の面積が政令で定める規模以上のもの（以下「都市再生事業」という。）を施行しようとする民間事業者は、国土交通省令で定めるところにより、当該都市再生事業に関する計画（以下「民間都市再生事業計画」という。）を作成し、国土交通大臣の認定を申請することができる。

2 民間都市再生事業計画には、次に掲げる事項を記載しなければならない。

- 一 事業区域の位置及び面積
- 二 建築物及びその敷地の整備に関する事業の概要
- 三 公共施設の整備に関する事業の概要及び当該公共施設の管理者又は管理者となるべき者
- 四 工事着手の時期及び事業施行期間
- 五 用地取得計画
- 六 資金計画
- 七 その他国土交通省令で定める事項

第二十一条 国土交通大臣は、前条第一項の認定（以下この節において「計画の認定」という。）の申請があつた場合において、当該申請に係る民間都市再生事業計画が次に掲げる基準に適合すると認めるときは、計画の認定をすることができる。

- 一 当該都市再生事業が、都市再生緊急整備地域における市街地の整備を緊急に推進する上で効果的であり、かつ、当該地域を含む都市の再生に著しく貢献するものであると認められること。
- 二 建築物及びその敷地並びに公共施設の整備に関する計画が、地域整備方針に適合するものであること。

- 三 工事着手の時期、事業施行期間及び用地取得計画が、当該都市再生事業を迅速かつ確実に遂行するために適切なものであること。
- 四 当該都市再生事業の施行に必要な経済的基礎及びこれを的確に遂行するために必要なその他の能力が十分であること。

2 国土交通大臣は、計画の認定をしようとするときは、あらかじめ、関係地方公共団体の意見を聴かなければならない。

3 国土交通大臣は、計画の認定をしようとするときは、あらかじめ、当該都市再生事業の施行により整備される公共施設の管理者又は管理者となるべき者（以下この節において「公共施設の管理者等」という。）の意見を聴かなければならない。

（計画の認定に関する処理期間）

第二十二条 国土交通大臣は、第二十条第一項の規定による申請を受理した日から二月以内（当該申請に係る都市再生事業の事業区域の全部が特定都市再生緊急整備地域内にあるときは、当該申請を受理した日から一月以内）において速やかに、計画の認定に関する処分を行わなければならない。

2 前条第二項又は第三項の規定により意見を聴かれた者は、国土交通大臣が前項の処理期間中に計画の認定に関する処分を行うことができるよう、速やかに意見の申出を行わなければならない。

（計画の認定の通知）

第二十三条 国土交通大臣は、計画の認定をしたときは、速やかに、その旨を関係地方公共団体、公共施設の管理者等及び民間都市開発の推進に関する特別措置法（昭和六十二年法律第六十二号）以下「民間都市開発法」という。）第三條第一項に規定する民間都市開発推進機構（以下「民間都市機構」という。）に通知するとともに、計画の認定を受けた者（以下「認定事業者」という。）の氏名又は名称、事業施行期間、事業区域その他国土交通省令で定める事項を公表しなければならない。

（民間都市再生事業計画の変更）

第二十四条 認定事業者は、計画の認定を受けた民間都市再生事業計画（以下「認定計画」という。）の変更（国土交通省令で定める軽微な変更を除く。）をしようとするときは、国土交通大臣の認定を受けなければならない。

2 前三条の規定は、前項の場合について準用する。

（報告の徴収）

第二十五条 国土交通大臣は、認定事業者に対し、認定計画（認定計画の変更があつたときは、その変更後のもの。以下同じ。）に係る都市再生事業（以下「認定事業」という。）の施行の状況について報告を求めることができる。

（地位の承継）

第二十六条 認定事業者の一般承継人又は認定事業者から認定計画に係る事業区域内の土地の所有権その他当該認定事業の施行に必要な権原を取得した者は、国土交通大臣の承認を受けて、当該認定事業者が有していた計画の認定に基づく地位を承継することができる。

（改善命令）

第二十七条 国土交通大臣は、認定事業者が認定計画に従つて認定事業を施行していないと認めるときは、当該認定事業者に対し、相当の期間を定めて、その改善に必要な措置を命ずることができる。

（計画の認定の取消し）

第二十八条 国土交通大臣は、認定事業者が前条の規定による処分違反したときは、計画の認定を取り消すことができる。

2 国土交通大臣は、前項の規定による取消しをしたときは、速やかに、その旨を、関係地方公共団体、公共施設の管理者等及び民間都市機構に通知するとともに、公表しなければならない。

（民間都市機構の行う都市再生事業支援業務）

第二十九条 民間都市機構は、民間都市開発法第四條第一項各号に掲げる業務及び民間都市開発法第十四條の八第一項の規定により国土交通大臣の指示を受けて行う業務のほか、民間事業者による都市再生事業を推進するため、国土交通大臣の承認を受けて、次に掲げる業務を行うことができる。

- 一 次に掲げる方法により、認定事業者の認定事業の施行に要する費用の一部（公共施設並びにこれに準ずる避難施設、駐車場その他の建築物の利用者及び都市の居住者等（以下「建築物の利用者等」という。）の利便の増進に寄与する施設（以下「公共施設等」という。）その他公益的施設で政令で定めるもの並びに建築物の利用者等）に有用な情報の収集、整理、分析及び提供を行うための設備で政令で定めるものの整備に要する費用の額の範囲内に限る。）について支援すること。

イ 認定事業者（株式会社、合同会社又は資産の流動化に関する法律（平成十年法律第五十五号）第二条第三項に規定する特定目的会社（以下「株式会社等」という。）であつて専ら認定事業の施行を目的とするものに限る。）に対する資金の貸付け又は認定事業者（専ら認定事業の施行を目的とする株式会社等に限る。）が発行する社債の取得

ロ 専ら、認定事業者から認定事業の施行により整備される建築物及びその敷地（以下このロにおいて「認定建築物等」という。）若しくは認定建築物等に係る信託の受益権を取得し、当該認定建築物等若しくは当該認定建築物等に係る信託の受益権の管理及び処分を行うことを目的とする株式会社等に対する資金の貸付け又は当該株式会社等が発行する社債の取得

ハ イ又はロに掲げる方法に準ずるものとして国土交通省令で定める方法

二 認定事業者に対し、必要な助言、あつせんその他の援助を行うこと。

三 前二号に掲げる業務に附帯する業務を行うこと。

2 前項の規定により、民間都市機構が同項各号に掲げる業務を行う場合には、民間都市開発法第十一条第一項及び第十二条中「第四条第一項各号」とあるのは「第四条第一項各号及び都市再生特別措置法第二十九条第一項各号」と、民間都市開発法第十四条中「第四条第一項第一号及び第二号」とあるのは「第四条第一項第一号及び第二号並びに都市再生特別措置法第二十九条第一項第一号」と、民間都市開発法第二十条中「第十二条」とあるのは「第十二条（都市再生特別措置法第二十九条第二項の規定により読み替えて適用する場合を含む。以下この号において同じ。）」と、「同項」とあるのは「第十一号」と、同条第二号中「第十二条」とあるのは「第十二条（都市再生特別措置法第二十九条第二項の規定により読み替えて適用する場合を含む。）」とする。

3 民間都市機構は、第一項第一号に掲げる業務を行う場合においては、国土交通省令で定める基準に従つて行わなければならない。

（民間都市開発法の特例）

第三十条 民間都市開発法第四条第一項第一号に規定する特定民間都市開発事業であつて認定事

業（整備計画に記載された第十九条の二第八項に規定する事項に係る国際競争力強化施設を有する建築物の整備に関するものに限る。）であるものについては同号の規定の適用については、同号中「という。」とあるのは、「という。」並びに都市再生特別措置法第十九条の二第八項に規定する整備計画に記載された同条第八項に規定する事項に係る国際競争力強化施設」とする。

第三十一条及び第三十二条 削除

（協議会における認定事業を円滑かつ迅速に施行するために必要な協議）

第三十三条 認定事業者は、協議会に対し、その認定事業を円滑かつ迅速に施行するために必要な協議を行うことを求めることができる。

2 前項の協議を行うことを求められた協議会に関する第十九条第八項の規定の適用については、同項中「並びに特殊法人の代表者」とあるのは、「特殊法人の代表者並びに第三十三条第一項の協議を行うことを求めた同項の認定事業者」とする。

3 協議会は、第一項の協議を行うことを求められた場合において、当該協議が調つたとき又は当該協議が調わないこととなつたときはその結果を、当該協議の結果を得るに至つていないときは当該協議を行うことを求められた日から三月を経過することによる経過を、速やかに、当該協議を行うことを求めた認定事業者に通知するものとする。

（資金の確保）

第三十四条 国及び関係地方公共団体は、認定事業者が認定事業を施行するのに必要な資金の確保に努めるものとする。

（国等の援助）

第三十五条 国及び関係地方公共団体は、認定事業者に対し、認定事業の施行に関し必要な指導、助言その他の援助を行うよう努めるものとする。

第六節 都市計画等の特例

第一款 都市再生特別地区等

（都市再生特別地区）

第三十六条 都市再生緊急整備地域のうち、都市の再生に貢献し、土地の合理的かつ健全な高度利用を図る特別の用途、容積、高さ、配列等の建築物の建築を誘導する必要があると認められる区域については、都市計画に、都市再生特別地区を定めることができる。

2 都市再生特別地区に関する都市計画には、都市計画法第八条第三項第一号及び第三号に掲げる事項のほか、建築物その他の工作物（以下「建築物等」という。）の誘導すべき用途（当該地区の指定の目的のために必要な場合に限る。）建築物の容積率（延べ面積の敷地面積に対する割合をいう。以下同じ。）の最高限度及び最低限度、建築物の建蔽率（建築面積の敷地面積に対する割合をいう。第九十四条の二第二項第二号において同じ。）の最高限度、建築物の建築面積の最低限度、建築物の高さの最高限度並びに壁面の位置の制限を定めるものとする。

3 前項の建築物の容積率の最高限度は、十分の四十以上の数値を定めておかなければならない。ただし、当該地区の区域を区分して同項の建築物の容積率の最高限度を定める場合にあつては、当該地区の区域を区分して定められた建築物の容積率の最高限度の数値にそれぞれの数値の定められた区域の面積を乗じたものの合計を当該地区の全体の面積で除して得た数値が十分の四十以上であることをもつて足りる。

4 第二項の建築物の高さの最高限度及び壁面の位置の制限は、当該地区にふさわしい高さ、配列等を備えた建築物の建築が誘導されること、建築物の敷地内に道路（都市計画において定められた計画道路を含む。次条第一項において同じ。）に接する有効な空地が確保されること等により、当該都市再生特別地区における防災、交通、衛生等に関する機能が確保されるように定めなければならない。

（道路の上空又は路面下における建築物等の建築又は建設）

第三十六条の二 都市再生特別地区に関する都市計画には、前条第二項に定めるもののほか、都市の再生に貢献し、土地の合理的かつ健全な高度利用を図るため、道路の上空又は路面下において建築物等の建築又は建設を行うことが適切であると認められるときは、当該道路の区域のうち、建築物等の敷地として併せて利用すべき区域（以下「重複利用区域」という。）を定めることができる。この場合においては、当該重複利用区域内における建築物等の建築又は建設の限界であつて空間又は地下について上下の範囲を定めるものをも定めなければならない。

2 都市計画法第十五条第一項の都道府県又は同法第八十七条の二第一項の指定都市（同法第二十二條第一項の場合にあつては、同項の国土交

通大臣）は、前項の規定により建築物等の建築又は建設の限界を定めようとするときは、あらかじめ、同項に規定する道路の管理者又は管理者となるべき者に協議しなければならない。

第三十六条の三 都市再生特別地区の区域のうち前条第一項の規定により重複利用区域として定められている区域内の道路（次項において「特定都市道路」という。）については、建築基準法第四十三条第一項第二号に掲げる道路とみなして、同法の規定を適用する。

2 特定都市道路の上空又は路面下に設ける建築物のうち、当該特定都市道路に係る都市再生特別地区に関する都市計画の内容に適合し、かつ、政令で定める基準に適合するものであつて特定行政庁が安全上、防火上及び衛生上支障がないと認めるものについては、建築基準法第四十四条第一項第三号に該当する建築物とみなして、同項の規定を適用する。

第三十六条の四 都市再生特別地区の区域のうち第三十六条の二第一項の規定により重複利用区域として定められている区域内における都市計画法第五十三条第一項の規定の適用については、「都市再生特別措置法第三十六条の二第一項」とする。

第三十六条の五 都市再生特別地区の区域のうち第三十六条の二第一項の規定により重複利用区域として定められている区域内における都市再生特別措置法による第一種市街地再開発事業又は同法による第二種市街地再開発事業については、それぞれ同法第九十九条の二第一項の地区計画の区域内における第一種市街地再開発事業又は同法第九十九条の二第二項の地区計画の区域内における第二種市街地再開発事業とみなして、同法の規定を適用する。

第二款 都市計画の決定等の提案

（都市再生事業等を行う者による都市計画の決定等の提案）

第三十七条 都市再生事業又は都市再生事業の施行に關連して必要となる公共公益施設の整備に関する事業（以下「都市再生事業等」という。）を行おうとする者は、都市計画法第十五条第一項の都道府県若しくは市町村若しくは同法第八十七条の二第一項の指定都市（同法第二十二條第一項の場合にあつては、同項の国土交通大臣又は市町村）又は第五十一条第一項の規定に基づき都市計画の決定若しくは変更をする市町村

2 都市再生特別地区に関する都市計画には、都市計画法第八条第三項第一号及び第三号に掲げる事項のほか、建築物その他の工作物（以下「建築物等」という。）の誘導すべき用途（当該地区の指定の目的のために必要な場合に限る。）建築物の容積率（延べ面積の敷地面積に対する割合をいう。以下同じ。）の最高限度及び最低限度、建築物の建蔽率（建築面積の敷地面積に対する割合をいう。第九十四条の二第二項第二号において同じ。）の最高限度、建築物の建築面積の最低限度、建築物の高さの最高限度並びに壁面の位置の制限を定めるものとする。

3 前項の建築物の容積率の最高限度は、十分の四十以上の数値を定めておかなければならない。ただし、当該地区の区域を区分して同項の建築物の容積率の最高限度を定める場合にあつては、当該地区の区域を区分して定められた建築物の容積率の最高限度の数値にそれぞれの数値の定められた区域の面積を乗じたものの合計を当該地区の全体の面積で除して得た数値が十分の四十以上であることをもつて足りる。

4 第二項の建築物の高さの最高限度及び壁面の位置の制限は、当該地区にふさわしい高さ、配列等を備えた建築物の建築が誘導されること、建築物の敷地内に道路（都市計画において定められた計画道路を含む。次条第一項において同じ。）に接する有効な空地が確保されること等により、当該都市再生特別地区における防災、交通、衛生等に関する機能が確保されるように定めなければならない。

（道路の上空又は路面下における建築物等の建築又は建設）

第三十六条の二 都市再生特別地区に関する都市計画には、前条第二項に定めるもののほか、都市の再生に貢献し、土地の合理的かつ健全な高度利用を図るため、道路の上空又は路面下において建築物等の建築又は建設を行うことが適切であると認められるときは、当該道路の区域のうち、建築物等の敷地として併せて利用すべき区域（以下「重複利用区域」という。）を定めることができる。この場合においては、当該重複利用区域内における建築物等の建築又は建設の限界であつて空間又は地下について上下の範囲を定めるものをも定めなければならない。

2 都市計画法第十五条第一項の都道府県又は同法第八十七条の二第一項の指定都市（同法第二十二條第一項の場合にあつては、同項の国土交

通大臣）は、前項の規定により建築物等の建築又は建設の限界を定めようとするときは、あらかじめ、同項に規定する道路の管理者又は管理者となるべき者に協議しなければならない。

第三十六条の三 都市再生特別地区の区域のうち前条第一項の規定により重複利用区域として定められている区域内の道路（次項において「特定都市道路」という。）については、建築基準法第四十三条第一項第二号に掲げる道路とみなして、同法の規定を適用する。

2 特定都市道路の上空又は路面下に設ける建築物のうち、当該特定都市道路に係る都市再生特別地区に関する都市計画の内容に適合し、かつ、政令で定める基準に適合するものであつて特定行政庁が安全上、防火上及び衛生上支障がないと認めるものについては、建築基準法第四十四条第一項第三号に該当する建築物とみなして、同項の規定を適用する。

第三十六条の四 都市再生特別地区の区域のうち第三十六条の二第一項の規定により重複利用区域として定められている区域内における都市計画法第五十三条第一項の規定の適用については、「都市再生特別措置法第三十六条の二第一項」とする。

第三十六条の五 都市再生特別地区の区域のうち第三十六条の二第一項の規定により重複利用区域として定められている区域内における都市再生特別措置法による第一種市街地再開発事業又は同法による第二種市街地再開発事業については、それぞれ同法第九十九条の二第一項の地区計画の区域内における第一種市街地再開発事業又は同法第九十九条の二第二項の地区計画の区域内における第二種市街地再開発事業とみなして、同法の規定を適用する。

第二款 都市計画の決定等の提案

（都市再生事業等を行う者による都市計画の決定等の提案）

第三十七条 都市再生事業又は都市再生事業の施行に關連して必要となる公共公益施設の整備に関する事業（以下「都市再生事業等」という。）を行おうとする者は、都市計画法第十五条第一項の都道府県若しくは市町村若しくは同法第八十七条の二第一項の指定都市（同法第二十二條第一項の場合にあつては、同項の国土交通大臣又は市町村）又は第五十一条第一項の規定に基づき都市計画の決定若しくは変更をする市町村

2 都市再生特別地区に関する都市計画には、都市計画法第八条第三項第一号及び第三号に掲げる事項のほか、建築物その他の工作物（以下「建築物等」という。）の誘導すべき用途（当該地区の指定の目的のために必要な場合に限る。）建築物の容積率（延べ面積の敷地面積に対する割合をいう。以下同じ。）の最高限度及び最低限度、建築物の建蔽率（建築面積の敷地面積に対する割合をいう。第九十四条の二第二項第二号において同じ。）の最高限度、建築物の建築面積の最低限度、建築物の高さの最高限度並びに壁面の位置の制限を定めるものとする。

3 前項の建築物の容積率の最高限度は、十分の四十以上の数値を定めておかなければならない。ただし、当該地区の区域を区分して同項の建築物の容積率の最高限度を定める場合にあつては、当該地区の区域を区分して定められた建築物の容積率の最高限度の数値にそれぞれの数値の定められた区域の面積を乗じたものの合計を当該地区の全体の面積で除して得た数値が十分の四十以上であることをもつて足りる。

4 第二項の建築物の高さの最高限度及び壁面の位置の制限は、当該地区にふさわしい高さ、配列等を備えた建築物の建築が誘導されること、建築物の敷地内に道路（都市計画において定められた計画道路を含む。次条第一項において同じ。）に接する有効な空地が確保されること等により、当該都市再生特別地区における防災、交通、衛生等に関する機能が確保されるように定めなければならない。

（道路の上空又は路面下における建築物等の建築又は建設）

第三十六条の二 都市再生特別地区に関する都市計画には、前条第二項に定めるもののほか、都市の再生に貢献し、土地の合理的かつ健全な高度利用を図るため、道路の上空又は路面下において建築物等の建築又は建設を行うことが適切であると認められるときは、当該道路の区域のうち、建築物等の敷地として併せて利用すべき区域（以下「重複利用区域」という。）を定めることができる。この場合においては、当該重複利用区域内における建築物等の建築又は建設の限界であつて空間又は地下について上下の範囲を定めるものをも定めなければならない。

2 都市計画法第十五条第一項の都道府県又は同法第八十七条の二第一項の指定都市（同法第二十二條第一項の場合にあつては、同項の国土交

通大臣）は、前項の規定により建築物等の建築又は建設の限界を定めようとするときは、あらかじめ、同項に規定する道路の管理者又は管理者となるべき者に協議しなければならない。

第三十六条の三 都市再生特別地区の区域のうち前条第一項の規定により重複利用区域として定められている区域内の道路（次項において「特定都市道路」という。）については、建築基準法第四十三条第一項第二号に掲げる道路とみなして、同法の規定を適用する。

2 特定都市道路の上空又は路面下に設ける建築物のうち、当該特定都市道路に係る都市再生特別地区に関する都市計画の内容に適合し、かつ、政令で定める基準に適合するものであつて特定行政庁が安全上、防火上及び衛生上支障がないと認めるものについては、建築基準法第四十四条第一項第三号に該当する建築物とみなして、同項の規定を適用する。

第三十六条の四 都市再生特別地区の区域のうち第三十六条の二第一項の規定により重複利用区域として定められている区域内における都市計画法第五十三条第一項の規定の適用については、「都市再生特別措置法第三十六条の二第一項」とする。

第三十六条の五 都市再生特別地区の区域のうち第三十六条の二第一項の規定により重複利用区域として定められている区域内における都市再生特別措置法による第一種市街地再開発事業又は同法による第二種市街地再開発事業については、それぞれ同法第九十九条の二第一項の地区計画の区域内における第一種市街地再開発事業又は同法第九十九条の二第二項の地区計画の区域内における第二種市街地再開発事業とみなして、同法の規定を適用する。

第二款 都市計画の決定等の提案

（都市再生事業等を行う者による都市計画の決定等の提案）

第三十七条 都市再生事業又は都市再生事業の施行に關連して必要となる公共公益施設の整備に関する事業（以下「都市再生事業等」という。）を行おうとする者は、都市計画法第十五条第一項の都道府県若しくは市町村若しくは同法第八十七条の二第一項の指定都市（同法第二十二條第一項の場合にあつては、同項の国土交通大臣又は市町村）又は第五十一条第一項の規定に基づき都市計画の決定若しくは変更をする市町村

2 都市再生特別地区に関する都市計画には、都市計画法第八条第三項第一号及び第三号に掲げる事項のほか、建築物その他の工作物（以下「建築物等」という。）の誘導すべき用途（当該地区の指定の目的のために必要な場合に限る。）建築物の容積率（延べ面積の敷地面積に対する割合をいう。以下同じ。）の最高限度及び最低限度、建築物の建蔽率（建築面積の敷地面積に対する割合をいう。第九十四条の二第二項第二号において同じ。）の最高限度、建築物の建築面積の最低限度、建築物の高さの最高限度並びに壁面の位置の制限を定めるものとする。

3 前項の建築物の容積率の最高限度は、十分の四十以上の数値を定めておかなければならない。ただし、当該地区の区域を区分して同項の建築物の容積率の最高限度を定める場合にあつては、当該地区の区域を区分して定められた建築物の容積率の最高限度の数値にそれぞれの数値の定められた区域の面積を乗じたものの合計を当該地区の全体の面積で除して得た数値が十分の四十以上であることをもつて足りる。

4 第二項の建築物の高さの最高限度及び壁面の位置の制限は、当該地区にふさわしい高さ、配列等を備えた建築物の建築が誘導されること、建築物の敷地内に道路（都市計画において定められた計画道路を含む。次条第一項において同じ。）に接する有効な空地が確保されること等により、当該都市再生特別地区における防災、交通、衛生等に関する機能が確保されるように定めなければならない。

（道路の上空又は路面下における建築物等の建築又は建設）

第三十六条の二 都市再生特別地区に関する都市計画には、前条第二項に定めるもののほか、都市の再生に貢献し、土地の合理的かつ健全な高度利用を図るため、道路の上空又は路面下において建築物等の建築又は建設を行うことが適切であると認められるときは、当該道路の区域のうち、建築物等の敷地として併せて利用すべき区域（以下「重複利用区域」という。）を定めることができる。この場合においては、当該重複利用区域内における建築物等の建築又は建設の限界であつて空間又は地下について上下の範囲を定めるものをも定めなければならない。

2 都市計画法第十五条第一項の都道府県又は同法第八十七条の二第一項の指定都市（同法第二十二條第一項の場合にあつては、同項の国土交

(以下「都市計画決定権者」と総称する。)に対し、当該都市再生事業等を行うために必要な次に掲げる都市計画の決定又は変更をすることを提案することができる。この場合においては、当該提案に係る都市計画の素案を添えなければならない。

一 第三十六条第一項の規定による都市再生特別地区に関する都市計画

二 都市計画法第八条第一項第一号に規定する用途地域又は同項第三号の高度利用地区に関する都市計画

三 密集市街地における防災街区の整備の促進に関する法律(平成九年法律第四十九号。以下「密集市街地整備法」という。)第三十一条第一項の規定による特定防災街区整備地区に関する都市計画

四 都市計画法第十二条の四第一項第一号の地区計画であつてその区域の全部に同法第十二条の五第三項に規定する再開発等促進区又は同条第四項に規定する開発整備促進区を定めるものに関する都市計画

五 都市再開発法による市街地再開発事業(以下「市街地再開発事業」という。)に関する都市計画

六 密集市街地整備法による防災街区整備事業(以下「防災街区整備事業」という。)に関する都市計画

七 土地区画整理法による土地区画整理事業(以下「土地区画整理事業」という。)に関する都市計画

八 都市施設で政令で定めるものに関する都市計画

九 その他政令で定める都市計画

二 前項の規定による提案(以下「計画提案」という。)は、当該都市再生事業等に係る土地の全部又は一部を含む一団の土地の区域について、次に掲げるところに従つて、国土交通省令で定めるところにより行うものとする。

一 当該計画提案に係る都市計画の素案の内容が、都市計画法第十三条その他の法令の規定に基づく都市計画に関する基準に適合するものであること。

二 当該計画提案に係る都市計画の素案の対象となる土地(国又は地方公共団体の所有している土地で公共施設の用に供されているものを除く。以下この条において同じ。)の区域内の土地について所有権又は建物の所有を目

的とする対抗要件を備えた地上権若しくは賃借権(臨時設備その他一時使用のため設定されたことが明らかなるものを除く。以下この条において「借地権」という。)を有する者の三分の二以上の同意(同意した者が所有するその区域内の土地の地積と同意した者が有する借地権の目的となつてその区域内の土地の地積の合計が、その区域内の土地の総地積と借地権の目的となつてその土地の総地積との合計の三分の二以上となる場合に限る。)を得ていること。

三 当該計画提案に係る都市計画の素案に係る事業が環境影響評価法(平成九年法律第八十一号)第二条第四項に規定する対象事業に該当するものであるときは、同法第二十七条に規定する公告を行つていふこと。

三 前項第二号の場合において、所有権又は借地権が数人の共有に属する土地があるときは、当該土地について所有権を有する者又は借地権を有する者の数をそれぞれとみなし、同意した所有権を有する者の共有持分の割合の合計又は同意した借地権を有する者の共有持分の割合の合計をそれぞれ当該土地について同意した者の数とみなし、当該土地の地積に同意した所有権を有する者の共有持分の割合の合計又は同意した借地権を有する者の共有持分の割合の合計を乗じて得た面積を当該土地について同意した者が所有する土地の地積又は同意した者が有する借地権の目的となつてその土地の地積とみなす。

(計画提案に対する都市計画決定権者の判断等)

第三十八条 都市計画決定権者は、計画提案が行われたときは、速やかに、計画提案を踏まえた都市計画(計画提案に係る都市計画の素案の内容の全部又は一部を実現することとなる都市計画をいう。以下同じ。)の決定又は変更を必要があるかどうかを判断し、当該都市計画の決定又は変更を必要があると認めるときは、その案を作成しなければならない。

(計画提案を踏まえた都市計画の案の都道府県都市計画審議会等への付議)

第三十九条 都市計画決定権者は、計画提案を踏まえた都市計画(当該計画提案に係る都市計画の素案の内容の全部を実現する場合を除く。)の決定又は変更をしようとする場合において、都市計画法第十八条第一項又は第十九条第一項(これらの規定を同法第二十一条第二項におい

て準用する場合を含む。)の規定により都市計画の案を都道府県都市計画審議会又は市町村都市計画審議会に付議しようとするときは、当該都市計画の案に併せて、当該計画提案に係る都市計画の素案を提出しなければならない。

(計画提案を踏まえた都市計画の決定等をしな

第四十条 都市計画決定権者は、計画提案を踏まえた都市計画の決定又は変更を必要がないと判断したときは、その旨及びその理由を、当該計画提案をした者(当該都市計画決定権者が第四十三条第二項の規定による通知を受けているときは、当該計画提案をした者及び当該通知をした行政庁。次条第二項において同じ。)に通知しなければならない。

二 都市計画決定権者は、前項の通知をしようとするときは、あらかじめ、都道府県都市計画審議会(都市計画決定権者である市町村に市町村都市計画審議会が置かれていないときは、当該市町村都市計画審議会)に当該計画提案に係る都市計画の素案を提出してその意見を聴かなければならない。

(計画提案を踏まえた都市計画の決定等に関する処理期間)

第四十一条 都市計画決定権者は、計画提案が行われた日から六月以内に、当該計画提案を踏まえた都市計画の決定若しくは変更又は前条第一項の規定による通知をするものとする。

二 都市計画決定権者は、やむを得ない理由により前項の処理期間中に同項の規定による処理を行うことができないときは、その理由が存続する間、当該処理期間を延長することができる。

この場合においては、同項の処理期間中に、当該計画提案をした者に対し、その旨、延長する期間及び延長する理由を通知しなければならない。

三 計画提案を踏まえた都市計画の決定又は変更については、都市計画法第十八条第一項又は第三項その他の法令の規定により意見を聴かれ、又は協議を受けた者は、都市計画決定権者が第一項の処理期間中に同項の規定による処理を行うことができるよう、速やかに意見の申出又は協議を行わなければならない。

第三款 都市再生事業等に係る認可等の特例

第四十二条 都市再生事業等を行うおととする者が国土交通省令で定めるところにより当該都市再

生事業等を実施するために必要な次に掲げる認可、認定又は承認(以下この節において「認可等」という。)の申請を行つた場合においては、当該認可等に関する処分を行う行政庁は、当該申請を受理した日から三月以内で認可等ごとに政令で定める期間において速やかに当該処分を行うものとする。

一 都市再開発法第七条の九第一項、第七條の十六第一項、第十一條第一項から第三項まで、第三十八條第一項、第五十條の二第一項、第五十條の九第一項、第五十一條第一項後段(同法第五十六條において準用する場合を含む。)、第五十八條第一項、第二百二十九條の二第一項又は第二百二十九條の五第一項の規定による認可又は認定

二 密集市街地整備法第二百二十二條第一項、第二百二十九條第一項、第三百六條第一項から第三項まで、第五百七十七條第一項、第六百六十五條第一項、第六百七十二條第一項、第六百七十九條第一項後段(密集市街地整備法第八十八條において準用する場合を含む。))又は第八十八條第一項の規定による認可

三 土地区画整理法第四條第一項前段、第十條第一項前段、第十四條第一項前段、第二項前段若しくは第三項前段、第三十九條第一項前段、第五十一條の二第一項前段、第五十一條の十第一項前段、第五十二條第一項後段、第五十五條第十二項、第七十一條の二第一項又は第七十一條の三第十四項の規定による認可

四 都市計画法第五十九條第一項から第四項まで又は第六十三條第一項の規定による認可又は承認

(計画提案を行つた場合における都市再生事業等に係る認可等の申請の特例)

第四十三条 都市再生事業等を行うおととする者は、その日以前に都市計画決定権者に計画提案を行つており、かつ、いまだ当該計画提案を踏まえた都市計画についての決定若しくは変更の告示又は第四十条第一項の通知(以下「計画提案を踏まえた都市計画決定告示等」という。)が行われていないときは、国土交通省令で定めるところにより、計画提案を行つていふ旨及び当該計画提案に係る都市計画の素案を示して認可等の申請を行うことができる。

二 前項の規定による申請を受けた行政庁は、当該計画提案を受けた都市計画決定権者に対し、

当該計画提案を受けた都市計画決定権者に対し、

当該申請があつたことを通知しなければならない。

3 第一項の規定による申請を受けた行政庁は、当該計画提案を踏まえた都市計画決定告示等が行われるまでは、当該申請が、法令に基づく認可等の基準のうち当該計画提案を踏まえた都市計画の決定又は変更が行われた場合において適合することとなる基準（以下「計画提案関連基準」という。）に適合していないことを理由に、認可等を拒否する処分をしてはならない。

4 第一項の規定により前条第四号に掲げる認可又は承認を申請する場合においては、都市計画法第六十条第一項第二号及び同条第二項第一号中「都市計画事業」とあるのは、「都市再生特別措置法第三十八条に規定する計画提案を踏まえた都市計画が定められた場合における都市施設の整備に関する事業又は市街地開発事業」とする。

（計画提案を行った場合における認可等に関する処理期間）

第四十四条 前条第一項の規定による申請を受けた行政庁は、当該申請が法令に基づく認可等の基準のうち計画提案関連基準以外の基準に適合しないことを理由に認可等を拒否する処分を行う場合を除き、第四十二条の規定にかかわらず、当該計画提案を踏まえた都市計画決定告示等が行われた日から一月を経過する日（その日が当該申請を受理した日から同条に規定する政令で定める期間を経過する日前である場合）あつては、当該政令で定める期間を経過する日）までに速やかに当該認可等に関する処分を行うものとする。

（都市再生事業等に係る認可等に関する意見の申出）

第四十五条 認可等に関する処分について、都市再生法第七條の九第三項その他の法令の規定により意見を聴かれた者は、行政庁が第四十二条又は前条の処理期間中に当該認可等に関する処分を行うことができるよう、速やかに意見の申出を行わなければならない。

第七節 都市再生歩行者経路協定

（都市再生歩行者経路協定の締結等）

第四十五条の二 都市再生緊急整備地域内の一団の土地の所有者及び建築物等の所有を目的とする地上権又は賃借権（臨時設備その他一時使用のため設定されたことが明らかなものを除く。以下「借地権等」という。）を有する者（土地

区画整理法第九十八条第一項（大都市地域における住宅及び住宅地の供給の促進に関する特別措置法（昭和五十年法律第六十七号。以下「大都市住宅等供給法」という。）第八十三条において準用する場合を含む。以下同じ。）の規定により仮換地として指定された土地にあつては、当該土地に対応する従前の土地の所有者及び借地権等を有する者。以下この章において「土地所有者等」と総称する。）は、その全員の合意により、当該都市再生緊急整備地域内における都市開発事業の施行に関連して必要となる歩行者の移動上の利便性及び安全性の向上のための経路（以下「都市再生歩行者経路」という。）の整備又は管理に関する協定（以下「都市再生歩行者経路協定」という。）を締結することができる。ただし、当該土地（土地区画整理法第九十八条第一項の規定により仮換地として指定された土地）にあつては、当該土地に対応する従前の土地の区域内に借地権等の目的となつて土地がある場合においては、当該借地権等の目的となつて土地の所有者の合意を要しない。

2 都市再生歩行者経路協定においては、次に掲げる事項を定めるものとする。

一 都市再生歩行者経路協定の目的となる土地の区域（以下この節において「協定区域」という。）及び都市再生歩行者経路の位置

二 次に掲げる都市再生歩行者経路の整備又は管理に関する事項のうち、必要なもの

イ 前号の都市再生歩行者経路を構成する道路の幅員又は路面の構造に関する基準

ロ 前号の都市再生歩行者経路を構成する施設（エレベーター、エスカレーターその他歩行者の移動上の利便性及び安全性の向上のために必要な設備を含む。）の整備又は管理に関する事項

ハ その他都市再生歩行者経路の整備又は管理に関する事項

三 都市再生歩行者経路協定の有効期間

四 都市再生歩行者経路協定に違反した場合の措置

3 都市再生歩行者経路協定においては、前項各号に掲げるもののほか、都市再生緊急整備地域内の土地のうち、協定区域に隣接した土地であつて、協定区域の一部とすることにより都市再生歩行者経路の整備又は管理に資するものとして協定区域の土地となることを当該協定区域内

の土地に係る土地所有者等が希望するもの（以下この節において「協定区域隣接地」という。）を定めることができる。

4 都市再生歩行者経路協定は、市町村長の認可を受けなければならない。（認可の申請に係る都市再生歩行者経路協定の縦覧等）

第四十五条の三 市町村長は、前条第四項の認可の申請があつたときは、国土交通省令で定めるところにより、その旨を公告し、当該都市再生歩行者経路協定を公告の日から二週間関係人の縦覧に供さなければならない。

2 前項の規定による公告があつたときは、関係人は、同項の縦覧期間満了の日までに、当該都市再生歩行者経路協定について、市町村長に意見を提出することができる。

（都市再生歩行者経路協定の認可）

第四十五条の四 市町村長は、第四十五条の二第四項の認可の申請が次の各号のいずれにも該当するときは、同項の認可をしなければならない。

一 申請手続が法令に違反しないこと。

二 土地又は建築物等の利用を不当に制限するものでないこと。

三 第四十五条の二第二項各号に掲げる事項（当該都市再生歩行者経路協定において協定区域隣接地を定める場合にあつては、当該協定区域隣接地に関する事項を含む。）について国土交通省令で定める基準に適合するものであること。

四 その他当該都市再生緊急整備地域の地域整備方針に適合するものであること。

2 市町村長は、第四十五条の二第四項の認可をしたときは、国土交通省令で定めるところにより、その旨を公告し、かつ、当該都市再生歩行者経路協定を当該市町村の事務所に備えて公表の縦覧に供するとともに、協定区域である旨を当該協定区域内に明示しなければならない。（都市再生歩行者経路協定の変更）

第四十五条の五 協定区域内の土地に係る土地所有者等（当該都市再生歩行者経路協定の効力が及ばない者を除く。）は、都市再生歩行者経路協定において定めた事項を変更しようとする場合においては、その全員の合意をもつてその旨を定め、市町村長の認可を受けなければならない。

2 前二条の規定は、前項の変更の認可について準用する。

（協定区域からの除外）

第四十五条の六 協定区域内の土地（土地区画整理法第九十八条第一項の規定により仮換地として指定された土地）にあつては、当該土地に対応する従前の土地）で当該都市再生歩行者経路協定の効力が及ばない者の所有するものの全部又は一部について借地権等が消滅した場合においては、当該借地権等の目的となつて指定された土地（同項の規定により仮換地として指定された土地）に対応する従前の土地にあつては、当該土地についての仮換地として指定された土地）は、当該協定区域から除外されるものとする。

2 協定区域内の土地で土地区画整理法第九十八条第一項の規定により仮換地として指定されたものが、同法第八十六条第一項の換地計画又は大都市住宅等供給法第七十二条第一項の換地計画において当該土地に対応する従前の土地についての換地として定められず、かつ、土地区画整理法第九十一条第三項（大都市住宅等供給法第八十二条第一項において準用する場合を含む。）の規定により当該土地に対応する従前の土地の所有者に対してその共有持分を与えようとして定められた土地としても定められなかったときは、当該土地は、土地区画整理法第九十一条第三項（大都市住宅等供給法第八十二条第一項において準用する場合を含む。）の規定により当該土地に対応する従前の土地の所有者等（当該都市再生歩行者経路協定の効力が及ばない者を除く。）は、遅滞なく、その旨を市町村長に届け出なければならない。

4 第四十五条の四第二項の規定は、前項の規定による届出があつた場合その他市町村長が第一項又は第二項の規定により協定区域内の土地が当該協定区域から除外されたことを知つた場合について準用する。

3 前二項の規定により協定区域内の土地が当該協定区域から除外された場合においては、当該借地権等を有していた者又は当該仮換地として指定されていた土地に対応する従前の土地に係る土地所有者等（当該都市再生歩行者経路協定の効力が及ばない者を除く。）は、遅滞なく、その旨を市町村長に届け出なければならない。

（都市再生歩行者経路協定の効力）

第四十五条の七 第四十五条の四第二項（第四十五条の五第二項において準用する場合を含む。）の規定による認可の公告のあつた後において当該協定区域内の土地に係る土地所有者等となつた者（当該都市再生歩行者経路協定について

当該協定区域内の土地に係る土地所有者等となつた者（当該都市再生歩行者経路協定について

当該協定区域内の土地に係る土地所有者等となつた者（当該都市再生歩行者経路協定について

当該協定区域内の土地に係る土地所有者等となつた者（当該都市再生歩行者経路協定について

当該協定区域内の土地に係る土地所有者等となつた者（当該都市再生歩行者経路協定について

当該協定区域内の土地に係る土地所有者等となつた者（当該都市再生歩行者経路協定について

当該協定区域内の土地に係る土地所有者等となつた者（当該都市再生歩行者経路協定について

項」とあるのは「第四十五条の十四第一項」と読み替えるものとする。

4 建築主事又は建築副主事を置かない市町村の市町村長は、退避施設協定について前項において準用する第四十五条の二第四項、第四十五条の五第一項又は第四十五条の十一第一項の認可をしようとするときは、都道府県知事に協議しおいて準用する第四十五条の二第四項又は第四十五条の五第一項の認可をしようとするときは、前項において準用する第四十五条の三第二項（前項において準用する第四十五条の五第二項において準用する場合を含む。）の規定により提出された意見書を添えて協議するものとする。

第三款 管理協定

（管理協定の締結等）

第四十五条の十五 地方公共団体は、都市再生安全確保計画に記載された第十九条の十五第二項第二号から第四号までに掲げる事項に係る備蓄倉庫を自ら管理する必要があると認めるときは、備蓄倉庫所有者等（当該備蓄倉庫若しくはその属する施設の所有者、これらの敷地である土地の所有者又は当該土地の使用及び収益を目的とする権利（臨時設備その他一時使用のために設定されたことが明らかなるものを除く。）を有する者をいう。以下同じ。）との間において、管理協定を締結して当該備蓄倉庫の管理を行うことができる。

2 前項の規定による管理協定については、備蓄倉庫所有者等の全員の合意がなければならぬ。

（管理協定の内容）

第四十五条の十六 前条第一項の規定による管理協定（以下「管理協定」という。）においては、次に掲げる事項を定めるものとする。

一 管理協定の目的となる備蓄倉庫（以下この条において「協定倉庫」という。）

二 協定倉庫の管理の方法に関する事項

三 管理協定の有効期間

四 管理協定の内容は、次に掲げる基準のいずれにも適合するものでなければならない。

一 協定施設（協定倉庫又はその属する施設をいう。以下同じ。）の利用を不当に制限するものでないこと。

二 前項第二号から第四号までに掲げる事項について国土交通省令で定める基準に適合するものであること。

（管理協定の縦覧等）

第四十五条の十七 地方公共団体は、管理協定を締結しようとするときは、国土交通省令で定めるところにより、その旨を公告し、当該管理協定を公告の日から二週間関係人の縦覧に供さなければならない。

2 前項の規定による公告があったときは、関係人は、同項の縦覧期間満了の日までに、当該管理協定について、地方公共団体に意見書を提出することができる。

（管理協定の公告等）

第四十五条の十八 地方公共団体は、管理協定を締結したときは、国土交通省令で定めるところにより、その旨を公告し、かつ、当該管理協定を当該地方公共団体の事務所に備えて公衆の縦覧に供するとともに、協定施設又はその敷地である土地の区域内の見やすい場所に、それぞれ協定施設である旨又は協定施設が当該区域内に存する旨を明示しなければならない。

（管理協定の変更）

第四十五条の十九 第四十五条の十五第二項、第四十五条の十六第二項及び前二条の規定は、管理協定において定めた事項の変更について準用する。

（管理協定の効力）

第四十五条の二十 第四十五条の十八（前条において準用する場合を含む。）の規定による公告のあった管理協定は、その公告のあった後において当該協定施設の備蓄倉庫所有者等となった者に対しても、その効力があるものとする。

第四款 非常用電気等供給施設協定

第四十五条の二十一 土地所有者等は、その全員の合意により、都市再生安全確保計画に記載された第十九条の十五第二項第二号から第四号までに掲げる事項に係る非常用電気等供給施設の整備又は管理に関する協定（以下この条において「非常用電気等供給施設協定」という。）を締結することができる。ただし、都市再生緊急整備地域内の一団の土地の区域内に借地権等の目的となつて土地がある場合においては、当該借地権等の目的となつて土地の所有者の合意を要しない。

2 非常用電気等供給施設協定においては、次に掲げる事項を定めるものとする。

一 非常用電気等供給施設協定の目的となる土地の区域及び非常用電気等供給施設の位置

二 前号の非常用電気等供給施設及びその属する施設の構造に関する基準

三 次に掲げる非常用電気等供給施設の整備又は管理に関する事項のうち、必要なものは、

イ 第一号の非常用電気等供給施設の規模

ロ 第一号の非常用電気等供給施設の制御及び作動状態の監視に関する事項

ハ その他非常用電気等供給施設の整備又は管理に関する事項

四 非常用電気等供給施設協定の有効期間

五 非常用電気等供給施設協定に違反した場合の措置

3 前節（第四十五条の二第一項及び第二項を除く。）の規定は、非常用電気等供給施設協定について準用する。この場合において、同条第三項中「前項各号」とあるのは「第四十五条の二第一第二項各号」と、「協定区域」とあるのは「協定区域（第四十五条の二十一第二項第一号の土地の区域をいう。以下この節において同じ。）」と、同項並びに第四十五条の十一第一項及び第二項中「都市再生歩行者経路」とあるのは「非常用電気等供給施設」と、第四十五条の四第一項第三号中「第四十五条の二第二項各号」とあるのは「第四十五条の二第二項各号」と、第四十五条の七及び第四十五条の十中「第四十五条の二第一項」とあるのは「第四十五条の二第一項」と読み替えるものとする。

4 建築主事又は建築副主事を置かない市町村の市町村長は、非常用電気等供給施設協定について前項において準用する第四十五条の二第四項、第四十五条の五第一項又は第四十五条の十一第一項の認可をしようとするときは、都道府県知事に協議しなければならない。この場合において、前項において準用する第四十五条の二第四項又は第四十五条の五第一項の認可をしようとするときは、前項において準用する第四十五条の三第二項（前項において準用する第四十五条の五第二項において準用する場合を含む。）の規定により提出された意見書を添えて協議するものとする。

第五章 都市再生整備計画に係る特別の措置

第一節 都市再生整備計画の作成等（都市再生整備計画）

第四十六条 市町村は、単独で又は共同して、都市の再生に必要な公共施設等の整備等を重点的に実施すべき土地の区域において、都市再生基本方針（当該区域が都市再生緊急整備地域内にあるときは、都市再生基本方針及び当該都市再生緊急整備地域の地域整備方針。第八十一条第一項及び第九十九条第一号イにおいて同じ。）に基づき、当該公共施設等の整備等に関する計画（以下「都市再生整備計画」という。）を作成することができる。

2 都市再生整備計画には、第一号から第六号までに掲げる事項を記載するものとする。ことに、第七号に掲げる事項を記載するよう努めるものとする。

一 都市再生整備計画の区域及びその面積

二 前号の区域内における都市の再生に必要な次に掲げる事業に関する事項

イ 公共施設等の整備に関する事業

ロ 市街地再開発事業

ハ 防災街区整備事業

ニ 土地区画整理事業

ホ 住宅施設の整備に関する事業

ヘ その他国土交通省令で定める事業

三 前号の事業と一体となつてその効果を増大させるために必要な事務又は事業に関する事項

四 前二号の事業により整備された公共施設等の適切な管理のために必要な事項

五 第一号の区域のうち、滞在者等の滞在及び交流の促進を図るため、円滑かつ快適な歩行の確保に資する歩道の拡幅その他の道路の整備、多様な滞在者等の交流の拠点の形成に資する都市公園の整備、良好な景観の形成に資する店舗その他の滞在者等の利便の増進に寄与する建築物の開放性を高めるための改築又は色彩の変更その他の滞在の快適性及び魅力の向上（以下この条において「滞在の快適性等の向上」という。）のために必要な公共施設等の整備又は管理を行う必要があると認められる区域（以下「滞在の快適性等の向上区域」という。）を定める場合にあつては、その区域

六 計画期間

七 都市の再生に必要な公共施設等の整備等に関する方針

次に掲げる事項には、市町村が実施する事業又は事務（以下「事業等」という。）に係るものを記載するほか、必要に応じ、当該号に定める事項を記載することができる。

一 前項第二号及び第三号に掲げる事項。まづづくりの推進を図る活動を行うことを目的と

にあるときは、都市再生基本方針及び当該都市再生緊急整備地域の地域整備方針。第八十一条第一項及び第九十九条第一号イにおいて同じ。）に基づき、当該公共施設等の整備等に関する計画（以下「都市再生整備計画」という。）を作成することができる。

2 都市再生整備計画には、第一号から第六号までに掲げる事項を記載するものとする。ことに、第七号に掲げる事項を記載するよう努めるものとする。

一 都市再生整備計画の区域及びその面積

二 前号の区域内における都市の再生に必要な次に掲げる事業に関する事項

イ 公共施設等の整備に関する事業

ロ 市街地再開発事業

ハ 防災街区整備事業

ニ 土地区画整理事業

ホ 住宅施設の整備に関する事業

ヘ その他国土交通省令で定める事業

三 前号の事業と一体となつてその効果を増大させるために必要な事務又は事業に関する事項

四 前二号の事業により整備された公共施設等の適切な管理のために必要な事項

五 第一号の区域のうち、滞在者等の滞在及び交流の促進を図るため、円滑かつ快適な歩行の確保に資する歩道の拡幅その他の道路の整備、多様な滞在者等の交流の拠点の形成に資する都市公園の整備、良好な景観の形成に資する店舗その他の滞在者等の利便の増進に寄与する建築物の開放性を高めるための改築又は色彩の変更その他の滞在の快適性及び魅力の向上（以下この条において「滞在の快適性等の向上」という。）のために必要な公共施設等の整備又は管理を行う必要があると認められる区域（以下「滞在の快適性等の向上区域」という。）を定める場合にあつては、その区域

六 計画期間

七 都市の再生に必要な公共施設等の整備等に関する方針

次に掲げる事項には、市町村が実施する事業又は事務（以下「事業等」という。）に係るものを記載するほか、必要に応じ、当該号に定める事項を記載することができる。

一 前項第二号及び第三号に掲げる事項。まづづくりの推進を図る活動を行うことを目的と

にあるときは、都市再生基本方針及び当該都市再生緊急整備地域の地域整備方針。第八十一条第一項及び第九十九条第一号イにおいて同じ。）に基づき、当該公共施設等の整備等に関する計画（以下「都市再生整備計画」という。）を作成することができる。

2 都市再生整備計画には、第一号から第六号までに掲げる事項を記載するものとする。ことに、第七号に掲げる事項を記載するよう努めるものとする。

一 都市再生整備計画の区域及びその面積

二 前号の区域内における都市の再生に必要な次に掲げる事業に関する事項

イ 公共施設等の整備に関する事業

ロ 市街地再開発事業

ハ 防災街区整備事業

ニ 土地区画整理事業

ホ 住宅施設の整備に関する事業

ヘ その他国土交通省令で定める事業

三 前号の事業と一体となつてその効果を増大させるために必要な事務又は事業に関する事項

四 前二号の事業により整備された公共施設等の適切な管理のために必要な事項

五 第一号の区域のうち、滞在者等の滞在及び交流の促進を図るため、円滑かつ快適な歩行の確保に資する歩道の拡幅その他の道路の整備、多様な滞在者等の交流の拠点の形成に資する都市公園の整備、良好な景観の形成に資する店舗その他の滞在者等の利便の増進に寄与する建築物の開放性を高めるための改築又は色彩の変更その他の滞在の快適性及び魅力の向上（以下この条において「滞在の快適性等の向上」という。）のために必要な公共施設等の整備又は管理を行う必要があると認められる区域（以下「滞在の快適性等の向上区域」という。）を定める場合にあつては、その区域

六 計画期間

七 都市の再生に必要な公共施設等の整備等に関する方針

次に掲げる事項には、市町村が実施する事業又は事務（以下「事業等」という。）に係るものを記載するほか、必要に応じ、当該号に定める事項を記載することができる。

一 前項第二号及び第三号に掲げる事項。まづづくりの推進を図る活動を行うことを目的と

にあるときは、都市再生基本方針及び当該都市再生緊急整備地域の地域整備方針。第八十一条第一項及び第九十九条第一号イにおいて同じ。）に基づき、当該公共施設等の整備等に関する計画（以下「都市再生整備計画」という。）を作成することができる。

2 都市再生整備計画には、第一号から第六号までに掲げる事項を記載するものとする。ことに、第七号に掲げる事項を記載するよう努めるものとする。

一 都市再生整備計画の区域及びその面積

二 前号の区域内における都市の再生に必要な次に掲げる事業に関する事項

イ 公共施設等の整備に関する事業

ロ 市街地再開発事業

ハ 防災街区整備事業

ニ 土地区画整理事業

ホ 住宅施設の整備に関する事業

ヘ その他国土交通省令で定める事業

三 前号の事業と一体となつてその効果を増大させるために必要な事務又は事業に関する事項

四 前二号の事業により整備された公共施設等の適切な管理のために必要な事項

五 第一号の区域のうち、滞在者等の滞在及び交流の促進を図るため、円滑かつ快適な歩行の確保に資する歩道の拡幅その他の道路の整備、多様な滞在者等の交流の拠点の形成に資する都市公園の整備、良好な景観の形成に資する店舗その他の滞在者等の利便の増進に寄与する建築物の開放性を高めるための改築又は色彩の変更その他の滞在の快適性及び魅力の向上（以下この条において「滞在の快適性等の向上」という。）のために必要な公共施設等の整備又は管理を行う必要があると認められる区域（以下「滞在の快適性等の向上区域」という。）を定める場合にあつては、その区域

六 計画期間

七 都市の再生に必要な公共施設等の整備等に関する方針

次に掲げる事項には、市町村が実施する事業又は事務（以下「事業等」という。）に係るものを記載するほか、必要に応じ、当該号に定める事項を記載することができる。

一 前項第二号及び第三号に掲げる事項。まづづくりの推進を図る活動を行うことを目的と

「滞在快適性等向上公園施設」という。)の設置又は管理に関する事項(次に掲げる事項を併せて記載するものに限る。)

- (1) 特定公園施設(第六十二条の三第一項に規定する公園施設設置管理協定に基づき公園管理者が一体型事業実施主体等に建設を行わせる園路、広場その他の国土交通省令で定める公園施設であつて、滞在快適性等向上公園施設の周辺に設置することが都市公園の利用者の利便の一層の向上に寄与すると認められるものをいう。以下同じ。)
- (2) 公園利便増進施設等(自転車駐車場、地域における催しに関する情報を提供するための看板その他の政令で定める施設等であつて、滞在快適性等向上公園施設の周辺に設置することが地域住民の利便の増進に寄与すると認められるものをいう。以下同じ。)

- (3) 都市公園の環境の維持及び向上を図るための清掃その他の措置であつて滞在快適性等向上公園施設の設置又は管理及び公園利便増進施設等の設置に伴い必要となるものに関する事項
- (4) その他国土交通省令で定める事項

三 第二項第三号に掲げる事項 次のイからハまでに掲げる事項

- イ 滞在快適性等向上区域内における路外駐車場(駐車場法第二条第二号に規定する路外駐車場をいう。以下同じ。)
- ロ 滞在快適性等向上区域内に存する道路(道路交通法(昭和三十五年法律第五号)第二条第一項第一号に規定する道路をいう。以下このロにおいて同じ。)

- ハ 滞在快適性等向上区域における駐車施設の機能を集約するために整備する駐車施設(以下「駐車場出入口制限道路」という。)に関する事項

(第六十二条の十二において「集約駐車施設」という。)の位置及び規模

- 四 第二項第三号に掲げる事項 一体型事業実施主体等が行う滞在快適性等向上区域における滞在の快適性等の向上に資する事業の円滑な実施のため、一体型事業実施主体等に対し普通財産(地方自治法(昭和二十二年法律第六十七号)第二百三十八条第四項に規定する普通財産をいい、市町村の所有に属するものに限る。以下同じ。)

- 15 市町村は、都市再生整備計画に前項第二号に掲げる事項を記載しようとするときは、国土交通省令で定めるところにより、あらかじめ、その旨を公告し、当該事項の案を、当該事項を都市再生整備計画に記載しようとする理由を記載した書面を添えて、当該公告の日から一月間公衆の縦覧に供しなければならない。
- 16 前項の規定による公告があつたときは、縦覧に供された事項の案における滞在快適性等向上公園施設の場所と同一の場所(飲食店等を開け、又は管理しようとする者は、飲食店の期間満了の日までに、当該事項の案について、市町村に意見書を提出することができる。この場合においては、当該飲食店等の設置又は管理を自らが行うこととした場合における第十四項第二号に掲げる事項と同様の事項の案を記載した書類を添付しなければならない。)

- 17 市町村は、次に掲げる場合には、都市再生整備計画に記載しようとする事項又はその案について、あらかじめ、当該事項又はその案に係る公園管理者(第三号に掲げる場合にあっては、公園管理者及び一体型事業実施主体等)に協議し、その同意を得なければならない。
- 一 都市再生整備計画に第十四項第一号に定める事項を記載しようとするとき
- 二 都市再生整備計画に第十四項第二号に掲げる事項を記載しようとするとき
- 三 第十五項の規定により第十四項第二号に掲げる事項の案を縦覧に供しようとするとき

- 四 前項の規定により意見書及びその添付書類(以下「の条において「意見書等」という。)の提出を受けた場合において都市再生整備計画に第十五項の規定により縦覧に供された事項の案のとおり

の案のとおり

- 18 公園管理者は、前項の協議(同項第二号に係るものに限る。)
- 19 公園管理者は、第十七項の協議(同項第三号に係るものに限る。)

- 20 市町村は、第十七項の協議(同項第四号に係るものに限る。)
- 21 公園管理者は、第十七項の協議を受けた場合において、第十五項の規定により縦覧に供された事項の案及び第十六項の規定により提出された意見書等の内容を審査し、当該事項の案が当該事項に基づき滞在快適性等向上公園施設の設置又は管理を行わせることとなる都市公園の機能を損なうことなくその利用者の利便の向上を図る上で最も適切であると認められるときは、同項の同意をしてはならない。

- 22 市町村は、都市再生整備計画に次の各号に掲げる事項を記載しようとするときは、当該事項について、あらかじめ、当該各号に定める者に協議しなければならない。
- 一 第二項第三号に掲げる事項として記載された事項でその実施に際し道路交通法第四条第一項の規定により公安委員会の交通規制が行われることとなる事務若しくは事業に関するもの又は第十四項第三号イからハまでに掲げる事項

- 公安委員会

二 第十四項第三号ロ又はハに掲げる事項 都道府県知事(駐車場法第二十条第一項若しくは第二項又は第二十条の二第一項の規定に基づき条例を定めている都道府県の知事に限る。)

- 23 第二項第二号イ若しくはハに掲げる事業に関する事項又は同項第三号に掲げる事項には、歴史的風致維持向上施設(地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律(平成二十二年法律第四十号。以下「地域歴史的風致法」という。)
- 24 第二項第四号に掲げる事項には、同項第一号の区域(都市再生緊急整備地域内にある土地の区域を除く。)

- 25 第二項第四号に掲げる事項には、同項第一号の区域のうち、広場、街灯、並木その他の都市の居住者その他の者の利便の増進に寄与する施設等であつて国土交通省令で定めるもの(以下「都市利便増進施設」という。)

- 26 第二項第四号に掲げる事項には、同項第一号の区域のうち、広場、街灯、並木その他の都市の居住者その他の者の利便の増進に寄与する施設等であつて国土交通省令で定めるもの(以下「都市利便増進施設」という。)

以下同じ。)が必要となると認められる区域及び当該都市利便増進施設の一体的な整備又は管理に関する事項を記載することができる。

26 第二項第四号に掲げる事項には、同項第一号の区域内にある低未利用土地(居住の用、業務の用その他の用途に供されておらず、又はその利用の程度がその周辺の地域における同一の用途若しくはこれに類する用途に供されている土地の利用の程度に比し著しく劣っている)と認められる土地をいう。以下同じ。)であつて、その有効かつ適切な利用の促進を図るために居住者等利用施設(緑地、広場、集会場その他の都市の居住者その他の利用に供する施設であつて国土交通省令で定めるものをいう。以下同じ。)の整備及び管理が必要となると認められるものの区域並びに当該居住者等利用施設の整備及び管理に関する事項を記載することができる。

27 都市再生整備計画は、都市計画法第六条の二の都市計画区域の整備、開発及び保全の方針、同法第七条の二の都市再開発方針等並びに同法第十八条の二の市町村の都市計画に関する基本的な方針との調和が保たれたものでなければならない。

28 市町村は、都市再生整備計画を作成したときは、遅滞なく、これを公表するとともに、都道府県に都市再生整備計画の写しを送付しなければならない。この場合において、当該都市再生整備計画に次の各号に掲げる事項を記載したときは、当該事項について、国土交通省令で定めるところにより、当該各号に定める措置をとらなければならない。

一 滞在快適性等向上区域 当該滞在快適性等向上区域内の土地に係る土地所有者等に対し、当該滞在快適性等向上区域を周知させること。

二 市町村決定計画及び計画決定期限 これらの事項を公告すること。

29 第二項から前項までの規定は、都市再生整備計画の変更について準用する。

(都市再生推進法人等による都市再生整備計画の作成等の提案)
第四十六条の二 第一百八条第一項の規定により指定された都市再生推進法人は、市町村に対し、国土交通省令で定めるところにより、その業務を行うために必要な都市再生整備計画の作成又は変更をすることを提案することができる。

る。この場合においては、当該提案に係る都市再生整備計画の素案を添えなければならない。

2 一体型滞在快適性等向上事業を実施し、又は実施しようとする者は、市町村に対し、国土交通省令で定めるところにより、当該一体型滞在快適性等向上事業を実施し、又はその効果を一層高めるために必要な都市再生整備計画の作成又は変更をすることを提案することができる。前項後段の規定は、この場合について準用する。

3 前二項の規定による提案(以下「都市再生整備計画提案」という。)に係る都市再生整備計画の素案の内容は、都市再生基本方針(当該都市再生整備計画提案に係る土地の区域が都市再生緊急整備地域内にあるときは、都市再生基本方針及び地域整備方針)に基づきものでなければならない。

(都市再生整備計画提案に対する市町村の判断等)

第四十六条の三 市町村は、都市再生整備計画提案が行われたときは、遅滞なく、都市再生整備計画提案を踏まえた都市再生整備計画(都市再生整備計画提案に係る都市再生整備計画の素案の内容の全部又は一部を実現することとなる都市再生整備計画をいう。次条において同じ。)の作成又は変更をすることがあるかどうかを判断し、当該都市再生整備計画の作成又は変更をすることがあると認めるときは、その案を作成しなければならない。

(都市再生整備計画提案を踏まえた都市再生整備計画の作成等)しない場合にとるべき措置)
第四十六条の四 市町村は、都市再生整備計画提案を踏まえた都市再生整備計画の作成又は変更をすることがあると判断したときは、遅滞なく、その旨及びその理由を、当該都市再生整備計画提案をした者に通知しなければならない。

(都市再生整備計画に記載された一体型滞在快適性等向上事業の実施)
第四十六条の五 都市再生整備計画に記載された一体型滞在快適性等向上事業の実施主体は、当該都市再生整備計画(一体型滞在快適性等向上事業に係る部分に限る。)に従い、一体型滞在快適性等向上事業を実施しなければならない。

(勧告)
第四十六条の六 市町村長は、都市再生整備計画に記載された一体型滞在快適性等向上事業の実施主体が当該都市再生整備計画に従って一体型

滞在快適性等向上事業を実施していないと認めるときは、当該実施主体に対し、当該都市再生整備計画に従って一体型滞在快適性等向上事業を実施すべきことを勧告することができる。

(報告の徴収)
第四十六条の七 市町村長は、都市再生整備計画に記載された一体型滞在快適性等向上事業の実施主体に対し、当該一体型滞在快適性等向上事業の実施の状況について報告を求めることができる。

(資料等の提供の要求等)
第四十六条の八 都市再生整備計画に記載された一体型滞在快適性等向上事業の実施主体は、当該一体型滞在快適性等向上事業の実施に關して必要があるときは、市町村に対し、資料又は情報の提供その他必要な協力を求めることができる。

第二節 交付金

(交付金の交付等)
第四十七条 市町村は、次項の交付金を充てて都市再生整備計画に基づく事業等の実施(特定非営利活動法人等が実施する事業等に要する費用の一部の負担を含む。次項において同じ。)をしようにするときは、当該都市再生整備計画を国土交通大臣に提出しなければならない。

2 国は、市町村に対し、前項の規定により提出された都市再生整備計画に基づく事業等の実施に要する経費に充てるため、当該事業等を通じて増進が図られる都市機能の内容、公共公益施設等の整備の状況その他の事項を勘案して国土交通省令で定めるところにより、予算の範囲内で、交付金を交付することができる。

3 前項の規定による交付金を充てて行う事業に要する費用については、道路法その他の法令の規定に基づく国の負担又は補助は、当該規定にかかわらず、行わないものとする。

4 前三項に定めるもののほか、交付金の交付に關し必要な事項は、国土交通省令で定める。

(住宅地区改良法の特例)
第四十八条 前条第二項の規定による交付金を充てて建設された住宅地区改良法(昭和三十五年法律第八十四号)第二条第六項に規定する改良住宅については、同法第二十九条の規定の適用については、同法第一項中「第二十七条第二項の規定により国の補助を受けて」とあるのは、「都市再生特別措置法第四十七条の規定による交付金を充てて」と、同法第三項中「第十三

条第三項」とあるのは、「第十二条第一項中「の補助」とあるのは、「の補助(都市再生特別措置法第四十七条第二項の規定による交付金(以下この項において「都市再生交付金」という。)を含む。）」と、「から補助」とあるのは、「から補助(都市再生交付金を含む。）」と、旧公営住宅法第十三条第三項」とする。

第四十九条 大都市住宅等供給法第一〇一条の五第一項に規定する認定事業者である市町村が第四十七條第二項の規定による交付金を充てて実施する都心共同住宅供給事業(同法第二條第五号に規定される住宅についての同法第一〇一条の十一及び第十三條の二の規定の適用については、同法第一〇一条の十一第一項及び第三項中「前条第一項又は第二項の規定による補助」とあるのは、「都市再生特別措置法第四十七條第二項の規定による交付金」とする。

(高齢者の居住の安定確保に関する法律の特例)
第五十条 市町村が第四十七條第二項の規定による交付金を充てて整備する高齢者の居住の安定確保に関する法律(平成十三年法律第二十六号)第四十五條第一項の賃貸住宅についての同法第五十條の規定の適用については、同法中「第四十五條、第四十七條第四項、第四十八條第一項若しくは前条又は第四十七條第一項の規定による費用の補助又は負担を受けて整備し、又は家賃を減額する」とあるのは、「都市再生特別措置法第四十七條第二項の規定による交付金を充てて整備し、又は第四十五條第二項の規定による補助を受けて家賃を減額する」とする。

第三節 都市計画等の特例等

第一款 都市計画の決定等に係る権限の移譲等

(都市計画の決定等に係る権限の移譲)
第五十一条 市町村は、都市計画法第十五條第一項及び第八十七條の二第一項の規定にかかわらず、第四十六條第二十八項後段(同法第二十九項において準用する場合を含む。)の規定による同法第二十八項第二号の公告の日から計画決

の道路の占用（同法第三十二条第二項第一号に規定する道路の占用をい、同法第三十三条第二項に規定するものを除く。）で次に掲げる要件のいずれにも該当するものについて、同法第三十二条第一項又は第三項の許可を与えることができる。

一 道路管理者が施設等の種類ごとに指定した道路の区域内に設けられる施設等（当該指定に係る種類のものに限る。）のためのものであること。

二 道路法第三十三条第一項の政令で定める基準に適合するものであること。

三 その他安全かつ円滑な交通を確保するために必要なものとして政令で定める基準に適合するものであること。

2 道路管理者は、前項第一号の道路の区域（以下この条において「特例道路占用区域」という。）を指定しようとするときは、あらかじめ、市町村の意見を聴くとともに、当該特例道路占用区域を管轄する警察署長に協議しなければならない。

3 道路管理者は、特例道路占用区域を指定するときは、その旨並びに指定の区域及び施設等の種類を公示しなければならない。

4 前二項の規定は、特例道路占用区域の指定の変更又は解除について準用する。

5 第一項の許可に係る道路法第三十二条第二項及び第八十七条第一項の規定の適用については、同法第三十二条第二項中「申請書」とあるのは、「申請書に、都市再生特別措置法第四十六条第十項の措置を記載した書面を添付して」と、同法第八十七条第一項中「円滑な交通を確保する」とあるのは、「円滑な交通を確保し、又は道路交通環境の維持及び向上を図る」とする。

第五款 都市公園法の特例等

第六十二条の二 第四十六条第二項に規定する事項又は同条第十四項第一号に定める事項が記載された都市再生整備計画が同条第二十八項前段（同条第二十九項において準用する場合を含む。）の規定により公表された日から二年以内に当該都市再生整備計画に基づく都市公園の占用について都市公園法第六条第一項又は第三項の許可の申請があった場合にかかわらず、当該管理者が第四十六条第二項又は第十四項第一号

の施設等の外観及び構造、占用に関する工事その他の事項に関し政令で定める技術的基準に適合する限り、当該許可を与えるものとする。

2 第四十六条第十四項第二号に掲げる事項が記載された都市再生整備計画が同条第二十八項前段（同条第二十九項において準用する場合を含む。）の規定により公表された日から二年以内に当該都市再生整備計画に基づく都市公園法第五十一条の許可の申請があった場合においては、公園管理者は、当該許可を与えるものとする。

（公園施設設置管理協定）

第六十二条の三 第四十六条第十四項第二号に掲げる事項に係る都市公園の公園管理者は、都市再生整備計画に基づき、一体型事業実施主体等と滞在快適性等向上公園施設の設置又は管理に関する協定（以下「公園施設設置管理協定」という。）を締結するものとする。

2 公園施設設置管理協定においては、次に掲げる事項を定めなければならない。

一 滞在快適性等向上公園施設の設置又は管理の目的

二 滞在快適性等向上公園施設の場所

三 滞在快適性等向上公園施設の設置又は管理の期間

四 滞在快適性等向上公園施設の構造

五 滞在快適性等向上公園施設の工事実施の方法

六 滞在快適性等向上公園施設の工事の時期

七 滞在快適性等向上公園施設の設置又は管理のための都市公園の使用の対価として一体型事業実施主体等が支払う使用料（第六十二条の五第三項において単に「使用料」という）の額

八 特定公園施設の建設に関する事項（当該特定公園施設の建設に要する費用の負担の方法を含む）

九 公園利便増進施設等の設置に関する事項

十 都市公園の環境の維持及び向上を図るための清掃その他の措置であつて滞在快適性等向上公園施設の設置又は管理及び公園利便増進施設等の設置に伴い講ずるもの（第六十二条の五第一項において「都市公園の環境の維持向上のための清掃等」という。）に関する事項

十一 公園施設設置管理協定の有効期間

十二 公園施設設置管理協定に違反した場合の措置

十三 その他国土交通省令で定める事項

3 前項第十一号の有効期間は、二十年を超えないものとする。

4 公園管理者は、一体型事業実施主体等と公園施設設置管理協定を締結しようとするときは、あらかじめ、次に掲げる事項を確認しなければならない。

一 当該一体型事業実施主体等が当該公園施設設置管理協定に基づき滞在快適性等向上公園施設の設置又は管理を行うため適切な資金計画及び収支計画を有する者であること。

二 当該公園施設設置管理協定の目的となる滞在快適性等向上公園施設が都市公園法第五十二条各号のいずれかに該当するものであること。

三 当該一体型事業実施主体等が不正又は不誠実な行為をするおそれが明らかでないこと。

5 公園管理者は、一体型事業実施主体等と公園施設設置管理協定を締結したときは、その締結の日並びに第二項第二号の場所及び同項第十一号の有効期間を公示しなければならない。

（公園施設設置管理協定の変更）

第六十二条の四 前条第四項及び第五項の規定は、公園施設設置管理協定において定めた事項の変更について準用する。この場合において、同条第四項中「次に掲げる事項」とあるのは、「第一号及び第二号に該当すること並びに当該公園施設設置管理協定の変更することについて都市公園の利用者の利便の一層の向上に寄与するものであると見込まれること又はやむを得ない事情があること」と読み替えるものとする。

（滞在快適性等向上公園施設の設置又は管理の許可等）

第六十二条の五 公園施設設置管理協定を締結した一体型事業実施主体等（以下「協定一体型事業実施主体等」という。）は、当該公園施設設置管理協定（変更があつたときは、その変更後のもので、以下同じ。）に従つて、滞在快適性等向上公園施設の設置又は管理、特定公園施設の建設、公園利便増進施設等の設置及び都市公園の環境の維持向上のための清掃等（第六十九条第六号において「滞在快適性等向上公園施設の設置等」という。）をしなければならない。

2 公園管理者は、協定一体型事業実施主体等から公園施設設置管理協定に基づき都市公園法第

五条第一項の許可の申請があつた場合においては、当該許可を与えなければならない。

3 公園管理者が前項の規定により都市公園法第五条第一項の許可を与えた場合においては、当該許可に係る使用料の額は、公園施設設置管理協定に記載された使用料の額（当該額が同法第十八条の規定に基づく条例（国の設置に係る都市公園にあつては、同条の規定に基づく政令）で定める額を下回る場合にあつては、当該条例又は当該政令で定める額）とする。

4 第六十二条の三第五項の規定による公示があつたときは、協定一体型事業実施主体等以外の者は、その公示に係る同条第二項第二号の場所（前条において準用する第六十二条の三第五項の規定による公示があつたときは、その公示に係る同号の場所）については、都市公園法第五条第一項の許可の申請をすることができない。

（地位の承継）

第六十二条の六 協定一体型事業実施主体等の一般承継人は、公園管理者の承認を受けて、当該協定一体型事業実施主体等が有していた公園施設設置管理協定に基づく地位を承継することができる。

（公園施設設置管理協定に係る滞在快適性等向上公園施設の設置基準の特例）

第六十二条の七 公園施設設置管理協定に基づき滞在快適性等向上公園施設を設ける場合における都市公園法第四十一条の規定の適用については、同項ただし書中「動物園を設ける場合」とあるのは、「動物園を設ける場合、都市再生特別措置法（平成十四年法律第二十二号）第六十二条の三第一項に規定する公園施設設置管理協定に基づき同法第四十六条第十四項第二号に規定する滞在快適性等向上公園施設を設ける場合」とする。

2 公園管理者は、協定一体型事業実施主体等から公園施設設置管理協定に基づき公園利便増進施設等のための都市公園の占用について都市公園法第六条第一項又は第三項の許可の申請があつた場合においては、同法第七條の規定にかかわらず、当該占用が第四十六条第十四項第二号ロ（2）の政令で定める施設等の外観及び構造、占用に関する工事その他の事項に関し政令で定める技術的基準に適合する限り、当該許可を与えなければならない。

第六款 都市再生推進法人を經由した道路又は都市公園の占用等の許可の申請手続

第六十二条の八 都市再生整備計画において滞在快適性等向上区域が定められた場合における当該滞在快適性等向上区域内の道路又は都市公園に係る次に掲げる申請書の提出は、第一百八条第一項の規定により指定された都市再生推進法人を經由して行うことができる。

- 一 道路法第三十二条第一項又は第三項の許可に係る同条第二項の申請書
二 都市公園法第六條第一項又は第三項の許可に係る同条第二項又は第三項の申請書
三 道路交通法第七十七条第一項の許可に係る同法第七十八条第一項の申請書

2 前項の規定により次の各号に掲げる申請書の提出を受けた都市再生推進法人は、速やかに当該申請書を当該各号に定める者に送付しなければならない。

- 一 前項第一号に掲げる申請書 当該申請書に係る道路の道路管理者
二 前項第二号に掲げる申請書 当該申請書に係る都市公園の公園管理者
三 前項第三号に掲げる申請書 当該申請書に係る場所を管轄する警察署長

3 第一百八条第一項の規定により指定された都市再生推進法人は、第一項の規定による理由に係る事務を行うときは、前項各号に定める者との密接な連携の下にこれを行うとともに、滞在快適性等向上区域内において道路若しくは都市公園を占用し、又は道路を使用しようとする者に対し、第一項各号に規定する許可に係る申請の手續に関する情報の提供、相談、助言その他の援助を行うものとする。

4 第二項各号に定める者は、第一項の規定による理由に係る事務の適正かつ確実な実施を確保するため必要があると認めるときは、市町村長に対し、当該事務を行う都市再生推進法人に対して第二百一十一条第一項から第三項までの規定により必要な措置を講ずることを要請することができる。

第七款 駐車場法の特例等

(特定路外駐車場の設置の届出等)
第六十二条の九 都市再生整備計画に記載された路外駐車場配置等基準に係る滞在快適性等向上区域内において、路外駐車場が自動車の駐車のために供する部分の面積が当該滞在快適性等向上

区域内の土地利用及び交通の現状及び将来の見通しを勘案して市町村の条例で定める規模以上のもので(以下この項において「特定路外駐車場」という。)を設置しようとする者は、当該特定路外駐車場の設置に着手する日の三十日前までに、国土交通省令で定めるところにより、当該特定路外駐車場の位置、規模その他国土交通省令で定める事項を市町村長に届け出なければならない。

2 前項の規定による届出をした者は、当該届出に係る事項のうち国土交通省令で定める事項を変更しようとするときは、当該事項の変更に係る行為に着手する日の三十日前までに、国土交通省令で定めるところにより、その旨を市町村長に届け出なければならない。

3 市町村長は、前二項の規定による届出があつた場合において、当該届出に係る事項が路外駐車場配置等基準に適合せず、歩行者の移動上の利便性及び安全性の向上のため必要があると認めるときは、当該届出をした者に対して、必要な勧告をすることができる。

4 市町村長は、前項の規定による勧告をした場合において、必要があると認めるときは、その勧告を受けた者に対し、土地の取得についてのあつせんその他の必要な措置を講ずよう努めなければならない。

(出入口制限対象駐車場の自動車の出入口の設置の制限等)
第六十二条の十 都市再生整備計画に記載された駐車場出入口制限道路に面する土地の出入口制限対象駐車場(路外駐車場であつて、自動車の駐車のために供する部分の面積が駐車場出入口制限道路の交通の現状及び滞在快適性等向上区域における催しの実施その他の活動の実施の状況の出入りによる歩行者の安全及び滞在の快適性に及ぼす影響が大きいものとして市町村の条例で定める規模以上のものをいう。以下同じ。)

を設置し、又は当該土地に設置された出入口制限対象駐車場の自動車の出入口の位置の変更をしようとする者は、当該出入口制限対象駐車場の自動車の出入口を当該駐車場出入口制限道路に接して設けてはならない。ただし、当該駐車場出入口制限道路に接して当該出入口制限対象駐車場の自動車の出入口を設けることがやむを得ないと認められる場合として市町村の条例で定める場合にあつては、この限りでない。

2 都市再生整備計画に記載された駐車場出入口制限道路に面する土地に出入口制限対象駐車場を設置しようとする者は、当該出入口制限対象駐車場の設置に着手する日の三十日前までに、国土交通省令で定めるところにより、当該出入口制限対象駐車場の自動車の出入口の位置その他国土交通省令で定める事項を市町村長に届け出なければならない。

3 都市再生整備計画に記載された駐車場出入口制限道路に面する土地に設置された出入口制限対象駐車場の自動車の出入口の位置の変更をしようとする者は、当該出入口制限対象駐車場の自動車の出入口の位置の変更に係る行為に着手する日の三十日前までに、国土交通省令で定めるところにより、その変更後の当該出入口制限対象駐車場の自動車の出入口の位置その他国土交通省令で定める事項を市町村長に届け出なければならない。

4 市町村長は、前二項の規定による届出があつた場合において、当該届出に係る事項が第一項の規定に適合しないと認めるときは、当該届出をした者に対し、期限を定めて、当該届出に係る出入口制限対象駐車場の自動車の出入口の位置に関し設計の変更その他の必要な措置をとるべきことを勧告することができる。

5 市町村長は、前項の規定による勧告を受けた者が正当な理由がなくその勧告に係る措置をとらなかつた場合において、安全かつ円滑な歩行者の確保に特に支障を及ぼすおそれがあると認めるときは、当該勧告を受けた者に対し、期限を定めて、当該勧告に係る措置をとるべきことを命ずることができる。

(歩行者の安全の確保等についての配慮)
第六十二条の十一 前条第一項に規定する条例の規定の施行若しくは適用の際駐車場出入口制限道路に面する土地の出入口制限対象駐車場(当該駐車場出入口制限道路に接して自動車の出入口を設けているものに限り。)を現に設置している者又は当該条例の規定の施行若しくは適用の後に同項ただし書の適用を受けて駐車場出入口制限道路に面する土地に出入口制限対象駐車場を設置し、若しくは当該土地に設置された出入口制限対象駐車場の自動車の出入口の位置の変更をした者は、当該駐車場出入口制限道路における安全かつ円滑な歩行者の確保及び滞在の快適性等向上区域における催しの実施その他の活動の円滑な実施についての適正な配慮をして当該

出入口制限対象駐車場を運営しなければならない。
(駐車施設の附置に係る駐車場法の特例)
第六十二条の十二 都市再生整備計画に滞在快適性等向上区域(駐車場法第二十条第一項の地区若しくは地域又は同条第二項の地区の区域内に限る。)について集約駐車施設の位置及び規模又は駐車場出入口制限道路に関する事項が記載された場合における同条第一項及び第二項並びに同法第二十条の第二項の規定の適用については、同法第二十条第一項中「近隣商業地域内」とあるのは「近隣商業地域内の滞在快適性等向上区域(都市再生特別措置法(平成十四年法律第二十二号)第四十六条第二項第五号に規定する滞在快適性等向上区域をいう。以下同じ。の区域内)」と、同項及び同条第二項並びに同法第二十条の第二項中「建築物又は」とあるのは「建築物若しくは」と、同法第二十条第一項中「旨を」とあるのは「旨、その建築物の敷地内若しくは集約駐車施設内に駐車施設を設けなければならない旨若しくは集約駐車施設内に駐車施設を設けなければならない旨又は当該条例の規定により設けなければならない旨」とされた駐車施設であつて条例で定める規模以上のものの自動車の出入口は、駐車場出入口制

限道路に接して設けることを制限する旨（当該駐車場出入口制限道路に接して当該駐車施設の自動車の出入口を設けることがやむを得ないと認められる場合として条例で定める場合においては当該制限を適用しない旨を含む。）を」と同項中「前条第一項の地区若しくは地域内又は同条第二項の地区内」とあるのは「前条第一項又は第二項の滞在快適性等向上区域の区域内」と、「地区又は地域内の」とあり、及び「地区内の」とあるのは「滞在快適性等向上区域の区域内の」とする。

第八款 普通財産の活用

第六十二条の十三 一体型事業実施主体等は、都市再生整備計画の期間内に限り、都市再生整備計画に記載された第四十六条第十四項第四号に定める事項に基づき普通財産を使用することができる。この場合において、一体型事業実施主体等は、当該普通財産の存する地域の環境の維持及び向上を図るための清掃その他の措置であつて当該普通財産の使用に伴い必要となるものを併せて講ずるものとする。

第九款 景観計画の策定等の提案

第六十二条の十四 都市再生整備計画において滞在快適性等向上区域が定められたときは、一体型事業実施主体等は、景観法（平成十六年法律第百十号）第七條第一項に規定する景観行政団体に對し、当該滞在快適性等向上区域における良好な景観の形成を促進するために必要と認められる景観計画（以下同。）の策定又は変更を提案することができる。この場合においては、当該提案に係る景観計画の素案を添えなければならない。

2 景観法第十一条第三項及び第十二条から第十四条までの規定は、前項の規定による提案について準用する。この場合において、同法第十一条第三項中「当該計画提案」とあるのは、「第八条第一項に規定する土地の区域のうち、一体として良好な景観を形成すべき土地の区域としてふさわしい一団の土地の区域であつて都市再生特別措置法第四十六条第二項第五号に規定する滞在快適性等向上区域内の土地の全部又は一部を含むものについて、当該計画提案」と読み替えるものとする。

第十款 歴史的風致維持向上計画の認定の申請手続の特例

第六十二条の十五 国土交通大臣は、第四十七条第一項の規定による都市再生整備計画（第四十

六条第二十三項に規定する事項が記載されたものに限る。）の提出（第三項において「都市再生整備計画の提出」という。）に併せて地域歴史的風致法第五条第一項の規定による歴史的風致維持向上計画（同条第二項第三号に掲げる事項として歴史的風致維持向上施設整備事項（第四十六条第二十三項に規定する事項に係る歴史的風致維持向上施設の整備に関する事項をいう。第三項において同じ。）が記載されたものに限る。）の認定の申請があつた場合においては、遅滞なく、当該歴史的風致維持向上計画の写しを文部科学大臣及び農林水産大臣に送付するものとする。

2 文部科学大臣及び農林水産大臣が前項の規定による歴史的風致維持向上計画の写しの送付を受けたときは、当該歴史的風致維持向上計画について、文部科学大臣及び農林水産大臣に対する地域歴史的風致法第五条第一項の規定による認定の申請があつたものとみなす。

3 前二項の規定は、都市再生整備計画の提出に併せて地域歴史的風致法第七条第一項の規定による歴史的風致維持向上計画の変更の申請（地域歴史的風致法第五条第二項第三号に掲げる事項として歴史的風致維持向上施設整備事項を記載する変更に係るものに限る。）があつた場合について準用する。この場合において、前項中「第五条第一項の規定による認定の申請」とあるのは、「第七条第一項の規定による変更の認定の申請」と読み替えるものとする。

第四節 民間都市再生整備事業計画の認定等

第六十三条 民間都市再生整備事業計画の認定

都市再生整備事業計画の区域内における都市開発事業であつて、当該都市開発事業を施行する土地（水面を含む。）の区域（以下「整備事業区域」という。）の面積が政令で定める規模以上のもの（以下「都市再生整備事業」という。）を都市再生整備計画に記載された事業と一体的に施行しようとする民間事業者は、国土交通省令で定めるところにより、当該都市再生整備事業に関する計画（以下「民間都市再生整備事業計画」という。）を作成し、国土交通大臣の認定を申請することができる。

2 民間都市再生整備事業計画には、次に掲げる事項を記載しなければならない。
一 整備事業区域の位置及び面積

二 建築物及びその敷地の整備に関する事業の概要

三 公共施設の整備に関する事業の概要及び当該公共施設の管理者又は管理者となるべき者

四 工事着手の時期及び事業施行期間

五 用地取得計画

六 資金計画

七 その他国土交通省令で定める事項

第六十四条 国土交通大臣は、前条第一項の認定（以下「整備事業計画の認定」という。）の申請があつた場合において、当該申請に係る民間都市再生整備事業計画が次に掲げる基準に適合すると認めるときは、整備事業計画の認定をすることができる。

一 当該都市再生整備事業が、都市再生整備計画に記載された事業と一体的に施行されることによりその事業の効果を一層高めるものであり、かつ、当該都市再生整備計画の区域を含む都市の再生に著しく貢献するものであることと認められること。

二 整備事業区域が都市再生緊急整備地域内にあるときは、建築物及びその敷地並びに公共施設の整備に関する計画が、地域整備方針に適合するものであること。

三 工事着手の時期、事業施行期間及び用地取得計画が、当該都市再生整備事業を都市再生整備計画に記載された事業と一体的かつ確実に遂行するために適切なものであること。

四 当該都市再生整備事業の施行に必要な経済的基礎及びこれを的確に遂行するために必要なその他の能力が十分であること。

2 国土交通大臣は、整備事業計画の認定をしようとするときは、あらかじめ、関係市町村の意見を聴かなければならない。

3 国土交通大臣は、整備事業計画の認定をしようとするときは、あらかじめ、当該都市再生整備事業の施行により整備される公共施設の管理者又は管理者となるべき者（以下この節において「公共施設の管理者等」という。）の意見を聴かなければならない。

第六十五条 国土交通大臣は、整備事業計画の認定をしたときは、速やかに、その旨を関係市町村、公共施設の管理者等及び民間都市機構に通知するとともに、整備事業計画の認定を受けた者（以下「認定整備事業者」という。）の氏名

又は名称、事業施行期間、整備事業区域その他国土交通省令で定める事項を公表しなければならない。

（民間都市再生整備事業計画の変更）

第六十六条 認定整備事業者は、整備事業計画の認定を受けた民間都市再生整備事業計画（以下「認定整備事業計画」という。）の変更（国土交通省令で定める軽微な変更を除く。）をしようとするときは、国土交通大臣の認定を受けなければならない。

2 前二条の規定は、前項の場合について準用する。

（報告の徴収）

第六十七条 国土交通大臣は、認定整備事業者に對し、認定整備事業計画（認定整備事業計画の変更があつたときは、その変更後のもの。以下同じ。）に係る都市再生整備事業（以下「認定整備事業」という。）の施行の状況について報告を求めることができる。

（地位の承継）

第六十八条 認定整備事業者の一般承継人又は認定整備事業者から認定整備事業計画に係る整備事業区域内の土地の所有権その他当該認定整備事業の施行に必要な権原を取得した者は、国土交通大臣の承認を受けて、当該認定整備事業者が有していた整備事業計画の認定に基づく地位を承継することができる。

2 国土交通大臣は、前項の規定による承認をしようとするときは、あらかじめ、関係市町村の意見を聴かなければならない。

（改善命令）

第六十九条 国土交通大臣は、認定整備事業者が認定整備事業計画に従つて認定整備事業を施行していないと認めるときは、当該認定整備事業者に對し、相当の期間を定めて、その改善に必要な措置を命ずることができる。

（整備事業計画の認定の取消し）

第七十条 国土交通大臣は、認定整備事業者が前条の規定による処分違反したときは、整備事業計画の認定を取り消すことができる。

2 国土交通大臣は、前項の規定による取消しをしたときは、速やかに、その旨を、関係市町村、公共施設の管理者等及び民間都市機構に通知するとともに、公表しなければならない。

（民間都市機構の行う都市再生整備事業支援業務）

第七十一条 民間都市機構は、第二十九条第一項に規定する業務のほか、民間事業者による都市

再生整備事業を推進するため、国土交通大臣の承認を受けて、次に掲げる業務を行うことができる。

一 次に掲げる方法により、認定整備事業者の認定整備事業の施行に要する費用の一部（公共施設等その他公益的施設で政令で定めるもの並びに建築物の利用者等に有用な情報の収集、整理、分析及び提供を行うための設備で政令で定めるものの整備に要する費用の額の範囲内に限る。）について支援すること。

イ 認定整備事業者（専ら認定整備事業の施行を目的とする株式会社等に限る。）に対する出資若しくは資金の貸付け又は認定整備事業者（専ら認定整備事業の施行を目的とする株式会社等に限る。）が発行する社債の取得

ロ 専ら、認定整備事業者から認定整備事業の施行により整備される建築物及びその敷地（以下この号において「認定整備建築物等」という。）若しくは認定整備建築物等に係る信託の受益権を取得し、当該認定整備建築物等若しくは当該認定整備建築物等に係る信託の受益権の管理及び処分を行うことを目的とする株式会社等に対する出資若しくは資金の貸付け又は当該株式会社が発行する社債の取得

ハ 不動産特定共同事業法（平成六年法律第七十七号）第二条第二項に規定する不動産取引（認定整備建築物等を整備し、又は整備された認定整備建築物等を取得し、当該認定整備建築物等の管理及び処分を行うことを内容とするものに限る。）を対象とする同条第三項に規定する不動産特定共同事業契約に基づく出資

ニ 信託（受託した土地に認定整備建築物等を整備し、当該認定整備建築物等の管理及び処分を行うことを内容とするものに限る。）の受益権の取得

ホ イからニまでに掲げる方法に準ずるものとして国土交通省令で定める方法

二 認定整備事業者に対し、必要な助言、あっせんその他の援助を行うこと。

三 前二号に掲げる業務に附帯する業務を行うこと。

2 前項の規定により、民間都市機構が同項各号に掲げる業務を行う場合には、民間都市開発法第十一条第一項及び第十二条中「第四条第一項

各号」とあるのは「第四条第一項各号及び都市再生特別措置法第七十一条第一項各号」と、民間都市開発法第十四条中「第四条第一項第一号及び第二号」とあるのは「第四条第一項第一号及び第二号並びに都市再生特別措置法第七十一条第一項第一号」と、民間都市開発法第二十条

第一号中「第十一条第一項」とあるのは「第十一条第一項（都市再生特別措置法第七十一条第二項の規定により読み替えて適用する場合を含む。以下この号において同じ。）」と、「同項」とあるのは「第十一条第一項」と、同条第二号中「第十二条」とあるのは「第十二条（都市再生特別措置法第七十一条第二項の規定により読み替えて適用する場合を含む。）」とする。

3 民間都市機構は、第一項第一号に掲げる業務を行う場合においては、国土交通省令で定める基準に従って行わなければならない。

（市町村協議会における認定整備事業を円滑かつ確実に施行するために必要な協議）

第七十二条 認定整備事業者は、第七十七条第一項の市町村都市再生協議会（以下この条において「市町村協議会」という。）に対し、その認定整備事業を円滑かつ確実に施行するために必要な協議を行うことを求めることができる。

2 前項の協議を行うことを求められた市町村協議会に関する第七十七条第五項の規定の適用については、同項中「管理者」とあるのは、「管理者」、第七十二条第一項の協議を行うことを求めた同項の認定整備事業者」とする。

3 市町村協議会は、第一項の協議を行うことを求められた場合において、当該協議が調ったとき又は当該協議が調わないこととなったときはその結果を、当該協議の結果を得るに至っていないときは当該協議を行うことを求められた日から六月を経過することと其間の経過を、速やかに、当該協議を行うことを求めた認定整備事業者）に通知するものとする。

第五節 都市再生整備歩行者経路協定

第七十三条 都市再生整備計画に記載された第四十六條第二十四項に規定する区域内の一団の土地の所有者及び借地権等を有する者（土地区画整理法第九十八條第一項の規定により仮換地として指定された土地にあつては、当該土地に対する従前の土地の所有者及び借地権等を有する者）は、その全員の合意により、当該区域内における都市開発事業の施行に関連して必要となる歩行者の移動上の利便性及び安全性の向上

のための経路の整備又は管理に関する協定（次項において「都市再生整備歩行者経路協定」という。）を締結することができる。ただし、当該土地（同法第九十八條第一項の規定により仮換地として指定された土地にあつては、当該土地に対応する従前の土地）の区域内に借地権等の目的となつてゐる土地がある場合においては、当該借地権等の目的となつてゐる土地の所有者の合意を要しない。

2 前章第七節（第四十五条の二第一項を除く。）の規定は、都市再生整備歩行者経路協定について準用する。この場合において、同条第二項第一号中「都市再生歩行者経路」とあるのは「都市再生整備歩行者経路（第七十三条第一項の経路をいう。以下同じ。）の」と、同項第二号中「都市再生歩行者経路」とあるのは「都市再生整備歩行者経路」と、同条第三項及び第四十五條の十一第一項中「都市再生緊急整備地域」とあるのは「第四十六條第二十四項の規定により都市再生整備計画に記載された区域」と、第四十五條の二第三項並びに第四十五條の十一第一項及び第二項中「都市再生歩行者経路」とあるのは「都市再生整備歩行者経路」と、第四十五條の二第三項中「土地所有者等」とあるのは「土地所有者等（第七十三条第一項本文に規定する者をいう。以下この節において同じ。）」と、第四十五條の四第一項第四号中「都市再生緊急整備地域の地域整備方針」とあるのは「第四十六條第二十四項の規定により都市再生整備計画に記載された経路の整備又は管理に関する事項」と、第四十五條の七及び第四十五條の十中「第四十五條の二第一項」とあるのは「第七十三条第一項」と読み替へるものとする。

第六節 都市利便増進協定

第七十四条 都市再生整備計画に記載された第四十六條第二十五項に規定する区域内の一団の土地の所有者若しくは借地権等を有する者（土地区画整理法第九十八條第一項の規定により仮換地として指定された土地にあつては、当該土地に対応する従前の土地の所有者又は借地権等を有する者）若しくは当該区域内の建築物の所有者（以下この節において「土地所有者等」という。）又は第九十八條第一項の規定により指定された都市再生推進法人は、都市利便増進施設

の一体的な整備又は管理に関する協定（以下「都市利便増進協定」という。）を締結し、市町村長の認定を申請することができる。

2 都市利便増進協定においては、次に掲げる事項を定めるものとする。

一 都市利便増進協定の目的となる都市利便増進施設の種類及び位置

二 前号の都市利便増進施設の一体的な整備又は管理の方法

三 第一号の都市利便増進施設の一体的な整備又は管理に要する費用の負担の方法

四 都市利便増進協定を変更し、又は廃止する場合の手續

五 都市利便増進協定の有効期間

六 その他必要な事項

第七十五条 市町村長は、前条第一項の認定（以下「協定の認定」という。）の申請があつた場合において、当該申請に係る都市利便増進協定が次に掲げる基準に適合すると認めるときは、協定の認定をすることができる。

一 土地所有者等の相当部分が都市利便増進協定に参加していること。

二 都市利便増進協定において定める前条第二項第二号及び第三号に掲げる事項の内容が適切であり、かつ、第四十六條第二十五項の規定により都市再生整備計画に記載された事項に適合するものであること。

三 都市利便増進協定において定める前条第二項第四号から第六号までに掲げる事項の内容が適切なものであること。

四 都市利便増進協定の内容が法令に違反するものでないこと。

（都市利便増進協定の変更）

第七十六条 土地所有者等又は第九十八條第一項の規定により指定された都市再生推進法人は、協定の認定を受けた都市利便増進協定（以下「認定都市利便増進協定」という。）の変更（国土交通省令で定める軽微な変更を除く。）をしようとするときは、市町村長の認定を受けなければならない。

2 前条の規定は、前項の場合について準用する。

（協定の認定の取消し）

第七十七条 市町村長は、次の各号のいずれかに該当するときは、協定の認定を取り消すことができる。

一 認定都市利便増進協定の内容が第七十五条各号に掲げる基準に適合しなくなつたと認めるとき。

二 認定都市利便増進協定の目的となる都市利便増進施設の一体的な整備又は管理が当該認定都市利便増進協定の定めるところに従い行われていないと認めるとき。

(民間都市機構の行う都市利便増進協定推進支援業務)

第七十八条 民間都市機構は、第二十九条第一項及び第七十一条第一項に規定する業務のほか、認定都市利便増進協定に基づく都市利便増進施設(民間事業者による都市開発事業に関連して整備されるものに限る。)の一体的な整備又は管理を支援するため、国土交通大臣の承認を受けて、当該認定都市利便増進協定を締結している土地所有者等に対し、当該一体的な整備又は管理に関し必要な情報の提供、助言又はあっせんその他の援助を行うことができる。

2 前項の規定により、民間都市機構が同項に規定する業務を行う場合には、民間都市開発法第十一條第一項及び第十二條中「第四条第一項各号に掲げる業務」とあるのは「第四条第一項各号に掲げる業務及び都市再生特別措置法第七十八條第一項に規定する業務」と、民間都市開発法第二十条第一号中「第十一条第一項」とあるのは「第十一条第一項(都市再生特別措置法第七十八條第二項の規定により読み替えて適用する場合を含む。以下この号において同じ。)」と、「同項」とあるのは「第十一条第一項」と、同条第二号中「第十二條」とあるのは「第十二條(都市再生特別措置法第七十八條第二項の規定により読み替えて適用する場合を含む。)」とする。

(都市の美観風致を維持するための樹木の保存に関する法律の特例)

第七十九条 第一百八条第一項の規定により指定された都市再生推進法人が認定都市利便増進協定に基づき管理する樹木又は樹木の集団で都市の美観風致を維持するための樹木の保存に関する法律(昭和三十七年法律第四十二号)第二條第一項の規定に基づき保存樹木又は保存樹林として指定されたものについての同法の規定の適用については、同法第五條第一項中「所有者」とあるのは「所有者及び推進法人(都市再生特別措置法第一百八条第一項の規定により指定された都市再生推進法人をいう。以下同じ。)」

と、同法第六條第二項及び第八條中「所有者」とあるのは「推進法人」と、同法第九條中「所有者」とあるのは「所有者又は推進法人」とする。

(国等の援助)

第八十条 国及び関係地方公共団体は、都市利便増進協定を締結し、又は締結しようとする土地所有者等に対し、都市利便増進協定の締結及び円滑な実施に関し必要な情報の提供、指導、助言その他の援助を行うよう努めるものとする。

(都市利便増進協定の認定の特例)

第八十条の二 都市再生整備計画に記載された一体型滞在快適性等向上事業の実施主体は、土地所有者等又は第八十条第一項の規定により指定された都市再生推進法人でない場合であっても、当該一体型滞在快適性等向上事業の実施のため都市利便増進協定の一体的な整備又は管理を行う必要があるときは、都市利便増進協定を締結し、市町村長の認定を申請することができる。この場合における第七十五条から第七十八条まで及び前条の規定の適用については、第七十五条第一号、第七十八條第一項及び前条中「土地所有者等」とあり、並びに第七十六條第一項中「土地所有者等又は第八十条第一項の規定により指定された都市再生推進法人」とあるのは「都市再生整備計画に記載された一体型滞在快適性等向上事業の実施主体」と、第七十五条第二号中「第四十六條第二十五項の規定により都市再生整備計画に記載された事項」とあるのは「都市再生整備計画に記載された一体型滞在快適性等向上事業の内容」と、第七十七条第一号中「第七十五条各号」とあるのは「第八十条の二の規定により読み替えて適用する第七十五条各号」と、第七十八條第二項中「第七十八條第一項」とあるのは「第七十八條第一項(同法第八十条の二の規定により読み替えて適用する場合を含む。)」とする。

第七節 低未利用土地利用促進協定

(低未利用土地利用促進協定の締結等)

第八十条の三 市町村又は都市再生推進法人等(第八十条第一項の規定により指定された都市再生推進法人、都市緑地法(昭和四十八年法律第七十二号)第六十九條第一項の規定により指定された緑地保全・緑化推進法人(第八十条の七第一項に規定する業務を行うものに限る。以下この項において「緑地保全・緑化推進法人」という。))又は景観法第九十二條第一項の

規定により指定された景観整備機構(第八十条の八第一項に規定する業務を行うものに限る。以下この項において「景観整備機構」という。))をいう。以下この節において同じ。))は、都市再生整備計画に記載された第四十六條第二十六項に規定する事項に係る居住者等利用施設(緑地保全・緑化推進法人にあつては緑地その他の国土交通省令で定める施設に、景観整備機構にあつては景観計画区域(景観法第八條第二項第一号に規定する景観計画区域をいう。第二百一条第一項において同じ。))内において整備される良好な景観を形成する広場その他の国土交通省令で定める施設に限る。)の整備及び管理を行うため、当該事項に係る低未利用土地の所有者又は使用及び収益を目的とする権利(一時使用のため設定されたことが明らかなるものを除く。)を有する者(以下「所有者等」という。))と次に掲げる事項を定めた協定(以下「低未利用土地利用促進協定」という。))を締結して、当該居住者等利用施設の整備及び管理を行うことができる。

一 低未利用土地利用促進協定の目的となる低未利用土地及び居住者等利用施設

二 前号の居住者等利用施設の整備及び管理の方法に関する事項

三 低未利用土地利用促進協定の有効期間

四 低未利用土地利用促進協定に違反した場合の措置

2 低未利用土地利用促進協定については、前項第一号の低未利用土地の所有者等の全員の合意がなければならぬ。

3 低未利用土地利用促進協定の内容は、次に掲げる基準のいずれにも適合するものでなければならない。

一 都市再生整備計画に記載された第四十六條第二十六項に規定する事項に適合するものであること。

二 第一項第一号の低未利用土地の利用を不当に制限するものでないこと。

三 第一項各号に掲げる事項について国土交通省令で定める基準に適合するものであること。

4 都市再生推進法人等が低未利用土地利用促進協定を締結しようとするときは、あらかじめ、市町村長の認可を受けなければならない。

(低未利用土地利用促進協定の認可)

第八十条の四 市町村長は、前条第四項の認可の申請が、次の各号のいずれにも該当するとき

は、同項の認可をしなければならない。

一 申請手続が法令に違反しないこと。

二 低未利用土地利用促進協定の内容が、前条第三項各号に掲げる基準のいずれにも適合するものであること。

(低未利用土地利用促進協定の変更)

第八十条の五 第八十条の三第二項から第四項まで及び前条の規定は、低未利用土地利用促進協定において定めた事項を変更しようとする場合について準用する。

(都市の美観風致を維持するための樹木の保存に関する法律の特例)

第八十条の六 都市再生推進法人等が低未利用土地利用促進協定に基づき管理する樹木又は樹木の集団で都市の美観風致を維持するための樹木の保存に関する法律第二條第一項の規定に基づき保存樹木又は保存樹林として指定されたものについて同法の規定の適用については、同法第五條第一項中「所有者」とあるのは「所有者及び都市再生特別措置法(平成十四年法律第二十二号)第八十条の三第一項に規定する都市再生推進法人等(以下「都市再生推進法人等」という。))と、同法第六條第二項及び第八條中「所有者」とあるのは「都市再生推進法人等」と、同法第九條中「所有者」とあるのは「所有者又は都市再生推進法人等」とする。

(緑地保全・緑化推進法人の業務の特例)

第八十条の七 都市緑地法第六十九條第一項の規定により指定された緑地保全・緑化推進法人(同法第七十條第一号ロに掲げる業務を行うものに限る。))は、同法第七十條各号に掲げる業務のほか、次に掲げる業務を行うことができる。

一 低未利用土地利用促進協定に基づく居住者等利用施設の整備及び管理を行うこと。

二 前号に掲げる業務に附帯する業務を行うこと。

2 前項の場合においては、都市緑地法第七十一条中「前条第一号」とあるのは、「前条第一号又は都市再生特別措置法(平成十四年法律第二十二号)第八十条の七第一項第一号」とする。

(景観整備機構の業務の特例)

第八十条の八 景観法第九十二條第一項の規定により指定された景観整備機構は、同法第九十三條各号に掲げる業務のほか、低未利用土地利用促進協定に基づく居住者等利用施設の整備及び管理を行うことができる。

2 前項の場合においては、景観法第九十五條第一項及び第二項中「掲げる業務」とあるのは、

「掲げる業務及び都市再生特別措置法（平成十四年法律第二十二号）第八十条の八第一項に規定する業務」とする。

第八十条の九 国及び関係地方公共団体は、低未

利用土地利用促進協定を締結しようとする低未
利用土地の所有者等に対し、低未土地利用
促進協定の締結に必要情報提供、指導、助言その他の援助を行うよう努めるものと
する。

第六章 立地適正化計画に係る特別の措置

第一節 立地適正化計画の作成等

(立地適正化計画)

第八十一条 市町村は、単独で又は共同して、都
市計画法第四条第二項に規定する都市計画区域
内の区域について、都市再生基本方針に基づ
き、住宅及び都市機能増進施設（医療施設、福
祉施設、商業施設その他の都市の居住者の共同
の福祉又は利便のため必要な施設であつて、都
市機能の増進に著しく寄与するものをいう。以
下同じ。）の立地の適正化を図るための計画
（以下「立地適正化計画」という。）を作成する
ことができる。

2 立地適正化計画には、その区域を記載するほ
か、おおむね次に掲げる事項を記載するものと
する。

一 住宅及び都市機能増進施設の立地の適正化
に関する基本的な方針

二 都市の居住者の居住を誘導すべき区域（以
下「居住誘導区域」という。）及び居住環境
の向上、公共交通の確保その他の当該居住誘
導区域に都市の居住者の居住を誘導するた
めに市町村が講ずべき施策に関する事項

三 都市機能増進施設の立地を誘導すべき区域
（以下「都市機能誘導区域」という。）及び当
該都市機能誘導区域ごとにその立地を誘導す
べき都市機能増進施設（以下「誘導施設」と
いう。）並びに必要な土地の確保、費用の補
助その他の当該都市機能誘導区域に当該誘導
施設の立地を誘導するために市町村が講ずべ
き施策に関する事項（次号に掲げるものを除
く。）

四 都市機能誘導区域に誘導施設の立地を図る
ために必要な次に掲げる事業等に関する事項
イ 誘導施設の整備に関する事業
ロ イに掲げる事業の施行に関連して必要と
なる公共施設整備の整備に関する事業、市

街地再開発事業、土地区画整理事業その他
国土交通省令で定める事業
ハ イ又はロに掲げる事業と一体となつてそ
の効果を増大させるために必要な事務又は
事業

五 居住誘導区域にあつては住宅の、都市機能
誘導区域にあつては誘導施設の立地及び立地
の誘導を図るための都市の防災に関する機能
の確保に関する指針（以下この条において
「防災指針」という。）に関する事項

六 第二号若しくは第三号の施策、第四号の事
業等又は防災指針に基づく取組の推進に関連
して必要な事項

七 前各号に掲げるもののほか、住宅及び都市
機能増進施設の立地の適正化を図るために必
要な事項

3 前項第四号に掲げる事項には、市町村が実施
する事業等に係るものを記載するほか、必要に
応じ、当該市町村以外の者が実施する事業等
に係るものを記載することができる。

4 市町村は、立地適正化計画に当該市町村以外
の者が実施する事業等に係る事項を記載しよ
うとするときは、当該事項について、あらかじ
め、その者の同意を得なければならない。

5 第二項第六号に掲げる事項には、居住誘導区
域ごとにその立地を誘導すべき居住環境向上施
設（病院、店舗その他の都市の居住者の日常生
活に必要な施設であつて、居住環境の向上に資
するものをいう。以下同じ。）及び必要と土地
の確保その他の当該居住誘導区域に当該居住環
境向上施設の立地を誘導するために市町村が講
ずべき施策に関する事項を記載することができ
る。

6 第二項第六号に掲げる事項には、次に掲げる
事項を記載することができる。

一 都市機能誘導区域内の区域であつて、歩行
者の移動上の利便性及び安全性の向上のため
の駐車場の配置の適正化を図るべき区域（以
下「駐車場配置適正化区域」という。）

二 駐車場配置適正化区域における路外停車場
の配置及び規模の基準（第百六条において
「路外駐車場配置等基準」という。）

三 駐車場配置適正化区域における駐車施設の
機能を集約するために整備する駐車施設（第
百七条において「集約駐車施設」という。）
の位置及び規模

7 市町村は、立地適正化計画に前項各号に掲げ
る事項を記載しようとするときは、当該事項に
ついて、あらかじめ、公安委員会に協議しな
ければならない。

8 市町村は、立地適正化計画に第六項第三号に
掲げる事項を記載しようとするときは、当該事
項について、あらかじめ、都道府県知事（駐車
場法第二十条第一項若しくは第二項又は第二十
条の二第一項の規定に基づき条例を定めている
都道府県の知事に限る。）に協議しなければな
らない。

9 第二項第六号に掲げる事項には、居住誘導区
域にあつては住宅の、都市機能誘導区域にあつ
ては誘導施設の立地の誘導の促進に資する老朽
化した都市計画法第四条第六項に規定する都市
計画施設の改修に関する事項に関する事項を記
載することができる。

10 第二項第六号に掲げる事項には、居住誘導区
域又は都市機能誘導区域のうち、レクリエーシ
ョンの用に供する広場、地域における催しに関
する情報を提供するための広告塔、良好な景観
の形成又は風致の維持に寄与する並木その他の
これらの区域における居住者、来訪者又は滞在
者の利便の増進に寄与する施設等であつて、居
住誘導区域にあつては住宅の、都市機能誘導区
域にあつては誘導施設の立地の誘導の促進に資
するもの（以下「立地誘導促進施設」という。）
の配置及び利用の状況その他の状況からみて、
これらの区域内の一団の土地の所有者及び借地
権等を有する者（土地区画整理法第九十八条第
一項の規定により仮換地として指定された土地
にあっては、当該土地に対応する従前の土地の
所有者及び借地権等を有する者）による立地誘
導促進施設の一体的な整備又は管理が必要とな
ると認められる区域並びに当該立地誘導促進施
設の一体的な整備又は管理に関する事項を記載
することができる。

11 第二項第六号に掲げる事項には、居住誘導区
域内の区域であつて、防災指針に即した宅地
（宅地造成及び特定盛土等規制法（昭和三十六
年法律第九十一号）第二条第一号に規定する
宅地をいう。）における地盤の滑動、崩落又は
液状化による被害の防止を促進する事業（以下
この項において「宅地被害防止事業」という。）
を行う必要があると認められるもの及び当該宅
地被害防止事業に関する事項を記載することが
できる。

12 第二項第六号に掲げる事項には、溢水、湛
水、津波、高潮その他による災害の発生のおそ
れが著しく、かつ、当該災害を防止し、又は軽
減する必要性が高いと認められる区域内の土地
を含む土地（居住誘導区域内にあるものに限
る。）の区域において溢水、湛水、津波、高潮
その他による災害を防止し、又は軽減すること
を目的とする防災指針に即した土地区画整理事
業に関する事項を記載することができる。

13 第二項第六号に掲げる事項には、居住誘導区
域又は都市機能誘導区域内の区域（溢水、湛
水、津波、高潮その他による災害の防止又は軽
減を図るための措置が講じられた、又は講じら
れる土地の区域に限る。）であつて、次の各号
に掲げる建物の区分に応じ当該各号に定める移
転を促進するために、防災指針に即した土地及
び当該土地に存する建物についての権利設定等
（地上権、賃借権若しくは使用貸借による権利
の設定若しくは移転又は所有権の移転をいう。
以下同じ。）を促進する事業（以下「居住誘導
区域等権利設定等促進事業」という。）を行う
必要があると認められる区域（以下「居住誘導
区域等権利設定等促進事業区域」という。）並
びに当該居住誘導区域等権利設定等促進事業に
関する事項を記載することができる。

14 一 住宅、居住誘導区域外の区域（溢水、湛
水、津波、高潮その他による災害の発生のお
それのある土地の区域に限る。）から当該居
住誘導区域への当該住宅の移転
二 誘導施設 都市機能誘導区域外の区域（溢
水、湛水、津波、高潮その他による災害の発
生のおそれのある土地の区域に限る。）から
当該都市機能誘導区域への当該誘導施設の
移転

15 第二項第六号に掲げる事項には、居住誘導区
域にあつては住宅の、都市機能誘導区域にあつ
ては誘導施設の立地及び立地の誘導を図るた
めの低未利用土地の利用及び管理に関する指針
（以下「低未利用土地利用等指針」という。）に
関する事項を記載することができる。

前項の規定により立地適正化計画に低未利用
土地利用等指針に関する事項を記載するとき
は、併せて、居住誘導区域又は都市機能誘導区
域のうち、低未利用土地が相当程度存在する区
域で、当該低未利用土地利用等指針に即した住
宅又は誘導施設の立地又は立地の誘導を図るた
めの土地（国又は地方公共団体が所有する土地
で公共施設の用に供されているもの、農地その
他の国土交通省令で定める土地を除く。第五節

において同じ。)及び当該土地に存する建物に
 ついての権利設定等を促進する事業(以下「低
 未利用土地権利設定等促進事業」という。)を
 行う必要があると認められる区域(以下「低未
 利用土地権利設定等促進事業区域」という。)
 並びに当該低未利用土地権利設定等促進事業に
 関する事項を記載することができる。

16 第二項第六号に掲げる事項には、居住誘導区
 域外の区域のうち、住宅が相当数存在し、跡地
 (建築物の敷地であった土地で現に建築物が存
 しないものをいう。以下同じ。)の面積が現に
 増加しつつある区域(以下この項において「跡
 地区域」という。)で、良好な生活環境の確保
 及び美観風致の維持のために次に掲げる行為
 (以下「跡地等の管理等」という。)が必要とな
 ると認められる区域(以下「跡地等管理等区
 域」という。)並びに当該跡地等管理等区域に
 おける跡地等の管理等を図るための指針(以下
 「跡地等管理等指針」という。)に関する事項を
 記載することができる。

一 跡地区域内の跡地及び跡地に存する樹木
 (以下「跡地等」という。)の適正な管理
 二 跡地区域内の跡地における緑地、広場その
 他の都市の居住者その他の者の利用に供する
 施設であつて国土交通省令で定めるものの整
 備及び管理(第百十一条第一項において「緑
 地等の整備等」という。)

17 立地適正化計画は、議会の議決を経て定めら
 れた市町村の建設に関する基本構想並びに都市
 計画法第六条の二の都市計画区域の整備、開発
 及び保全の方針に即するとともに、同法第十八
 条の二の市町村の都市計画に関する基本的な方
 針との調和が保たれたものでなければならな
 い。

18 立地適正化計画は、都市計画法第六条第一項
 の規定による都市計画に関する基礎調査の結果
 に基づき、かつ、政府が法律に基づき行う人
 口、産業、住宅、建築、交通、工場立地その他
 の調査の結果を勘案したものでなければならな
 い。

19 第二項第二号の居住誘導区域は、立地適正化
 計画の区域における人口、土地利用及び交通の
 現状及び将来の見通しを勘案して、良好な居住
 環境が確保され、公共投資その他の行政運営が
 効率的に行われるように定めるものとし、都市
 計画法第七條第一項に規定する市街化調整区域
 (以下「市街化調整区域」という。)、建築基準

法第三十九條第一項に規定する災害危険区域
 (同条第二項の規定に基づく条例により住居の
 用に供する建築物の建築が禁止されているもの
 に限る。)その他政令で定める区域については
 定めのないものとする。

20 第二項第三号の都市機能誘導区域及び誘導施
 設は、立地適正化計画の区域における人口、土
 地利用及び交通の現状及び将来の見通しを勘案
 して、適切な都市機能増進施設の立地を必要な
 区域に誘導することにより、住宅の立地の適正
 化が効果的に図られるように定めるものとし
 る。

21 市町村は、立地適正化計画の作成に当たつて
 は、第二項第二号及び第三号の施策並びに同項
 第四号及び第九号の事業等において市町村の所
 有する土地又は建築物が有効に活用されること
 となるよう努めるものとする。

22 市町村は、立地適正化計画を作成しようとし
 るときは、あらかじめ、公聴会の開催その他の
 住民の意見を反映させるために必要な措置を講
 ずるとともに、市町村都市計画審議会(当該市
 町村に市町村都市計画審議会が置かれていない
 ときは、都道府県都市計画審議会。第八十四条
 において同じ。)の意見を聴かなければならな
 い。

23 市町村は、立地適正化計画を作成したとき
 は、遅滞なく、これを公表するとともに、都道
 府県に立地適正化計画の写しを送付しなければ
 ならない。

24 第二項から前項までの規定は、立地適正化計
 画の変更(第二十二項の規定については、国土
 交通省令で定める軽微な変更を除く。)につい
 て準用する。

(都市計画法の特例)
 第八十二条 前条第二項第一号に掲げる事項が記
 載された立地適正化計画が同条第二十三項(同
 条第二十四項において準用する場合を含む。)
 の規定により公表されたときは、当該事項は、
 都市計画法第十八条の二第一項の規定により定
 められた市町村の都市計画に関する基本的な方
 針の一部とみなす。

(都市再生整備計画に係る交付金の特例)
 第八十三条 市町村は、国土交通省令で定めると
 ころにより、第八十一条第二項第四号に掲げる
 事項又は同条第九項に規定する事項(第四十六
 条第一項の土地の区域における同条第二項第二
 号又は第三号に掲げる事業等であつて当該市町

村又は特定非営利活動法人等が実施するものに
 係るものに限る。)を記載した立地適正化計画
 を国土交通大臣に提出することができる。
 2 前項の規定により立地適正化計画が提出され
 たときは、第四十七条第一項の規定による都市
 再生整備計画の提出があつたものとみなして、
 同条第二項から第四項まで及び第四十八条から
 第五十条までの規定を適用する。この場合にお
 いて、第四十七条第二項中「事業等の実施」と
 あるのは、「第八十三条第一項に規定する事業
 等の実施(特定非営利活動法人等が実施する同
 項に規定する事業等に要する費用の一部の負担
 を含む。)」とする。

(立地適正化計画の評価等)
 第八十四条 市町村は、立地適正化計画を作成し
 た場合においては、おおむね五年ごとに、当該
 立地適正化計画の区域における住宅及び都市機
 能増進施設の立地の適正化に関する施策の実施
 の状況についての調査、分析及び評価を行うよ
 う努めるとともに、必要があると認めるとき
 は、立地適正化計画及びこれに関連する都市計
 画を変更するものとする。

2 市町村は、前項の調査、分析及び評価を行つ
 たときは、速やかに、その結果を市町村都市計
 画審議会に報告しなければならない。
 3 市町村都市計画審議会は、必要に応じ、市町
 村に対し、立地適正化計画の進捗状況について
 報告を求めることができる。

4 市町村都市計画審議会は、第二項又は前項の
 規定による報告を受けたときは、その報告に係
 る事項について、市町村に対し、意見を述べ
 ることができる。

(都市計画における配慮)
 第八十五条 都市計画決定権者は、都市計画の見
 直しについての検討その他の都市計画について
 の検討、都市計画の案の作成その他の都市計画
 の策定の過程において、立地適正化計画が円滑
 に実施されるよう配慮するものとする。

第二節 居住誘導区域に係る特別の措置
 第一款 都市計画の決定等の提案
 (特定住宅整備事業を行う者による都
 市計画の決定等の提案)
 第八十六条 立地適正化計画に記載された居住誘
 導区域内における政令で定める戸数以上の住宅
 の整備に関する事業(以下「特定住宅整備事
 業」という。)を行うとする者は、都市計画
 決定権者に対し、当該特定住宅整備事業を行う

ために必要な次に掲げる都市計画の決定又は変
 更をすることを提案することができる。この場
 合においては、当該提案に係る都市計画の素案
 を添えなければならない。
 一 第三十七条第一項第二号、第三号及び第五
 号から第七号までに掲げる都市計画

二 都市計画法第十二条の四第一項第一号から
 第四号までに掲げる計画に関する都市計画
 三 その他政令で定める都市計画

2 第三十七條第二項及び第三項並びに第三十八
 条から第四十条までの規定は、前項の規定によ
 る提案について準用する。この場合において、
 第三十七條第二項中「都市再生事業等」とある
 のは、「第八十六条第一項に規定する特定住宅整
 備事業」と、第四十条第一項中「者(当該都市
 計画決定権者が第四十三條第二項の規定による
 通知を受けているときは、当該計画提案をした
 者及び当該通知をした行政庁。次条第二項にお
 いて同じ。)」とあるのは「者」と読み替えるも
 のとする。

(特定住宅整備事業を行う者による景
 観計画の策定等の提案)
 第八十七条 特定住宅整備事業を行うとする者
 は、景観法第七條第一項に規定する景観行政団
 体に対し、当該特定住宅整備事業を行うために
 必要な景観計画の策定又は変更を提案すること
 ができる。この場合においては、当該提案に係
 る景観計画の素案を添えなければならない。
 2 景観法第十一條第三項及び第十二條から第十
 四條までの規定は、前項の規定による提案につ
 いて準用する。この場合において、同法第十一
 條第三項中「当該計画提案」とあるのは、「第
 八条第一項に規定する土地の区域のうち、一体
 として良好な景観を形成すべき土地の区域とし
 てふさわしい一団の土地の区域であつて都市再
 生特別措置法第八十六条第一項に規定する特定
 住宅整備事業に係る土地の全部又は一部を含む
 ものについて、当該計画提案」と読み替えるも
 のとする。

第一款の二 宅地造成等関係行政事務
 の処理に係る権限の移譲
 第八十七条の二 地方自治法第二百五十二条の十
 九第一項に規定する指定都市及び同法第二百五
 十二条の二十二第一項に規定する中核市以外の
 市町村が第八十一条第二十三項(同条第二十四
 項において準用する場合を含む。)の規定によ
 り同条第十一項に規定する事項が記載された立

地適正化計画を公表したときは、当該市町村の長は、当該市町村の区域内において、都道府県知事に代わって宅地造成及び特定盛土等規制法第二章から第四章まで、第七章及び第八章の規定に基づく事務（以下この条において「宅地造成等関係行政事務」という。）を処理することができる。この場合においては、これらの規定中、都道府県知事に関する規定は、市町村長に関する規定として当該市町村長に適用があるものとする。

2 前項の規定により宅地造成等関係行政事務を処理しようとする市町村長は、あらかじめ、これを処理することについて、都道府県知事と協議しなければならない。

3 第一項の規定により宅地造成等関係行政事務を処理しようとする市町村長は、その処理を開始する日の三十日前までに、国土交通省令で定めるところにより、その旨を公示しなければならない。

4 第一項の規定によりその長が宅地造成等関係行政事務を処理する市町村は、宅地造成及び特定盛土等規制法第四条、第八条、第九条、第十三条、第十五条第一項、第十八条第四項及び第十九条第二項の規定の適用については、これらの規定に規定する都道府県とみなす。この場合において、同法第十五条第一項中「宅地造成等工事規制区域内において」とあるのは、「宅地造成等工事規制区域において都市再生特別措置法（平成十四年法律第二十二号）第八十一条第十一項に規定する宅地被害防止事業として」とする。

第一款の三 土地区画整理法の特例（防災住宅建設区）

第八十七条の三 立地適正化計画に記載された土地区画整理事業（第八十一条第十二項の規定により記載されたものに限る。）の事業計画においては、国土交通省令で定めるところにより、施行地区（土地区画整理法第二条第四項に規定する施行地区をいう。以下同じ。）内の溢水、湛水、津波、高潮その他による災害の防止又は軽減を図るための措置が講じられた又は講じられる土地（居住誘導区域内にあるものに限る。）の区域において特に住宅の建設を促進する必要があると認められる土地の区域（以下「防災住宅建設区」という。）を定めることができる。

2 防災住宅建設区は、施行地区において住宅の建設を促進する上で効果的であると認められる

位置に定め、その面積は、住宅が建設される見込みを考慮して相当と認められる規模としなければならない。

第八十七条の四 前条の規定により事業計画において防災住宅建設区が定められたときは、施行地区内の住宅の用に供する宅地（土地区画整理法第二条第六項に規定する宅地をいう。以下この款及び次節第二款において同じ。）の所有者が当該宅地についての換地に住宅を建設しようとするものは、施行者（同法第二条第三項に規定する施行者をいう。以下この款及び次節第二款において同じ。）に対し、国土交通省令で定めるところにより、同法第八十六条第一項の換地計画（以下「換地計画」という。）において当該宅地についての換地を防災住宅建設区内に定めるべき旨の申出をすることができる。

2 前項の規定による申出に係る宅地について住宅の所有を目的とする借地権を有する者があるときは、当該申出についてその者の同意がなければならぬ。

3 第一項の規定による申出は、次の各号に掲げる場合の区分に応じ、当該各号に定める公告があった日から起算して六十日以内に行わなければならない。

一 事業計画が定められた場合 土地区画整理法第七十六条第一項各号に掲げる公告（事業計画の変更の公告又は事業計画の変更についての認可の公告を除く。）

二 事業計画の変更により新たに防災住宅建設区が定められた場合 当該事業計画の変更の公告又は当該事業計画の変更についての認可の公告

三 事業計画の変更により従前の施行地区外の土地が新たに施行地区に編入されたことに伴い防災住宅建設区の面積が拡張された場合 当該事業計画の変更の公告又は当該事業計画の変更についての認可の公告

4 施行者（第一項の規定による申出があった場合には、遅滞なく、当該申出が次に掲げる要件に該当すると認めるときは、当該申出に係る宅地を、換地計画においてその宅地についての換地を防災住宅建設区内に定められるべき宅地として指定し、当該申出が次に掲げる要件に該当しないと認めるときは、当該申出に応じない旨を決定しなければならない。）

一 当該申出に係る宅地に建築物その他の工作物（住宅及び容易に移転し、又は除却すること

ができる工作物で国土交通省令で定めるものを除く。）が存しないこと。

二 当該申出に係る宅地に地上権、永小作権、賃借権その他の当該宅地を使用し、又は収益することができ権利（住宅の所有を目的とする借地権及び地役権を除く。）が存しないこと。

5 施行者は、前項の規定による指定又は決定をしたときは、遅滞なく、第一項の規定による申出をした者に対し、その旨を通知しなければならない。

6 施行者は、第四項の規定による指定をしたときは、遅滞なく、その旨を公告しなければならない。

7 施行者が土地区画整理法第十四条第一項の規定により設立された土地区画整理組合である場合においては、最初の役員が選挙され、又は選任されるまでの間は、第一項の規定による申出は、同条第一項の規定による認可を受けた者が受理するものとする。

（防災住宅建設区への換地）

第八十七条の五 前条第四項の規定により指定された宅地については、換地計画において換地を防災住宅建設区内に定めなければならない。

第二款 建築等の届出等

第八十八条 立地適正化計画の区域のうち当該立地適正化計画に記載された居住誘導区域外の区域内において、都市計画法第四条第十二項に規定する開発行為（以下「開発行為」という。）であつて住宅その他の人の居住の用に供する建築物のうち市町村の条例で定めるもの（以下この条において「住宅等」という。）の建築の用に供する目的で行うもの（政令で定める戸数未満の住宅の建築の用に供する目的で行うものにあつては、その規模が政令で定める規模以上のものに限る。）又は住宅等を新築し、若しくは建築物を改築し、若しくはその用途を変更して住宅等とする行為（当該政令で定める戸数未満の住宅に係るものを除く。）を行おうとする者は、これらの行為に着手する日の三十日前までに、国土交通省令で定めるところにより、行為の種類、場所、設計又は施行方法、着手予定日その他国土交通省令で定める事項を市町村長に届けなければならない。ただし、次に掲げる行為については、この限りでない。

一 軽易な行為その他の行為で政令で定める

二 非常災害のため必要な応急措置として行う行為

三 都市計画事業の施行として行う行為又はこれに準ずる行為として政令で定める行為

四 その他市町村の条例で定める行為

2 前項の規定による届出をした者は、当該届出に係る事項のうち国土交通省令で定める事項を変更しようとするときは、当該事項の変更に係る行為に着手する日の三十日前までに、国土交通省令で定めるところにより、その旨を市町村長に届けなければならない。

3 市町村長は、第一項又は前項の規定による届出があつた場合において、当該届出に係る行為が居住誘導区域内における住宅等の立地の誘導を図る上で支障があると認めるときは、当該届出をした者に対して、当該届出に係る事項に關し、住宅等の立地を適正なものとするために必要な勧告をすることができる。

4 市町村長は、前項の規定による勧告をした場合において、必要があると認めるときは、その勧告を受けた者に対し、居住誘導区域内の土地の取得についてあつせんその他の必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

5 市町村長は、第三項の規定による勧告をした場合において、その勧告を受けた者（建築基準法第三十九条第一項の災害危険区域、地すべり等防止法（昭和三十三年法律第三十号）第三条第一項の地すべり防止区域、土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律（平成十二年法律第五十七号）第九条第一項の土砂災害特別警戒区域、特定都市河川浸水被害対策法（平成十五年法律第七十七号）第五十六条第一項の浸水被害防止区域その他政令で定める区域に係る第一項又は第二項の規定による届出をした者であつて、当該届出に係る行為を業として行うものに限る。）がこれに従わなかつたときは、その旨を公表することができる。

第三款 居住調整地域等（居住調整地域）

第八十九条 立地適正化計画の区域（市街化調整区域を除く。）のうち、当該立地適正化計画に記載された居住誘導区域外の区域で、住宅地化を抑制すべき区域については、都市計画に、居住調整地域を定めることができる。

（開発行為等の許可等の特例）

第九十条 居住調整地域に係る特定開発行為（住宅その他の人の居住の用に供する建築物のうち市

町村の条例で定めるもの（以下この条において「住宅等」という。）の建築の用に供する目的で行う開発行為（政令で定める戸数未満の住宅の建築の用に供する目的で行うものにあつては、その規模が政令で定める規模以上のものに限る。）をいう。以下同じ。）については、都市計画法第二十九条第一項第一号の規定は適用せず、特定開発行為及び特定建築等行為（住宅等を新築し、又は建築物を改築し、若しくはその用途を変更して住宅等とする行為（当該政令で定める戸数未満の住宅に係るものを除く。）をいう。第九十二条において同じ。）については、居住調整地域を市街化調整区域とみなして、同法第三十四条及び第四十三条の規定（同条第一項の規定に係る罰則を含む。）を適用する。この場合において、同法第三十四条中「開発行為（主として第二種特定工作物の建設の用に供する目的で行う開発行為を除く。）」とあるのは「都市再生特別措置法第九十条に規定する特定開発行為」と、同法第三十四条中「一次の各号」とあるのは「第八号の二、第十号又は第十二号から第十四号まで」と、同法第四十三条第一項中「第二十九号第一項第二号若しくは第三号に規定する建築物以外の建築物を新築し、又は第一種特定工作物を新設しては」とあるのは「都市再生特別措置法第九十条に規定する住宅等（同条の政令で定める戸数未満の住宅を除く。以下この項において「住宅等」という。）を新築しては」と、「同項第二号若しくは第三号に規定する建築物以外の建築物」とあるのは「住宅等」と、同条第二項中「第三十四条」とあるのは「都市再生特別措置法第九十条の規定により読み替えて適用する第三十四条」とするほか、必要な技術的読替えは、政令で定める。

第九十一条 特定開発行為については、居住調整地域を市街化調整区域とみなして、土地区画整理法第九條第二項、第二十一條第二項及び第五十一條の九第二項の規定を適用する。この場合において、これらの規定中「土地区画整理事業」とあるのは「土地区画整理事業（施行区域の土地について施行するものを除く。）」と、「同法第四條第十二項に規定する開発行為が同法第三十四條各号」とあるのは「都市再生特別措置法第九十条に規定する特定開発行為が同条の規定により読み替えて適用する都市計画法第三十四條各号の二、第十号又は第十二号から第十四号まで」とする。

第九十二条 特定開発行為及び特定建築等行為については、居住調整地域を市街化調整区域とみなして、大規模災害からの復興に関する法律（平成二十五年法律第五十五号）第十三條第十項から第十二項までの規定を適用する。この場合において、同条第十項中「開発行為（同法第四條第十二項に規定する開発行為をいう。）」とあるのは「都市再生特別措置法第九十条に規定する特定開発行為」と、同法第十項中「都市計画法」とあるのは「同法第十條第一項中「第三十四條」とあるのは「都市再生特別措置法第九十条の規定により読み替えて適用する都市計画法第三十四條」とする。

第九十三条 地方自治法第二百五十二條の十九第一項に規定する指定都市及び同法第二百五十二條の二十二第一項に規定する中核市以外の市町村が居住調整地域に関する都市計画を定めたときは、当該市町村の長は、当該市町村の区域内において、都道府県知事に代わつて都市計画法第三章第一節の規定に基づき事務（以下「開発許可関係事務」という。）を処理することができる。この場合においては、当該規定中都道府県知事に関する規定は、市町村長に関する規定として当該市町村長に適用があるものとする。

第九十四条 前項の規定により開発許可関係事務を処理しようとする市町村長は、あらかじめ、これを処理することについて、都道府県知事と協議しなければならない。この場合において、町村の長にあつては都道府県知事の同意を得なければならない。

4 第一項の規定によりその長が開発許可関係事務を処理する市町村は、都市計画法第三十三條第六項、第三十四條第十一号及び第十二号、第三十四條の二、第三十五條の二第四項、第四十三條第三項並びに第七十八條第一項、第三項、第五項、第六項及び第八項の規定の適用については、同法第二十九條第一項に規定する指定都市等とみなす。この場合において、同法第七十八條第一項中「置く」とあるのは、「置くことができる」とする。

第九十四条 前条第一項の規定により開発許可関係事務を処理する市町村長は、幹線道路の沿道の整備に関する法律（昭和五十五年法律第三十四号）第十条の七第二項、地域再生法（平成十七年法律第二十四号）第十二條の二十二第二項、地域歴史的風致法第二十八條第二項並びに地域資源を活用した農林漁業者等による新事業の創出等及び地域の農林水産物の利用促進に関する法律（平成二十二年法律第六十七号）第五條第八項、第十四條第二項及び第四十二條第二項の規定の適用については、これらの規定に規定する都道府県知事とみなす。

2 前条第一項の規定によりその長が開発許可関係事務を処理する市町村は、幹線道路の沿道の整備に関する法律第十条の二第四項及び第七條の七第一項、地域再生法第十七條の十七第七項並びに大規模災害からの復興に関する法律第十三條第九項の規定の適用についてはこれらの規定に規定する指定都市等と、地域歴史的風致法第五條第四項の規定の適用については同項に規定する指定都市とみなす。

第四款 居住環境向上用途誘導地区
第九十四条の二 立地適正化計画に記載された居住誘導区域のうち、当該居住誘導区域に係る居住環境向上施設を有する建築物の建築を誘導する必要があると認められる区域（都市計画法第八條第一項第一号に規定する用途地域（同法に掲げる工業専用地域を除く。第百九條第一項において同じ。）が定められている区域に限る。）については、都市計画に、居住環境向上用途誘導地区を定めることができる。

2 居住環境向上用途誘導地区に関する都市計画には、都市計画法第八條第三項第一号及び第三号に掲げる事項のほか、次に掲げる事項を定めるものとする。

- 一 建築物等の誘導すべき用途及びその全部又は一部を当該用途に供する建築物の容積率の最高限度
- 二 当該地区における市街地の環境を確保するため必要な場合にあつては、建築物の建蔽率の最高限度、壁面の位置の制限及び建築物の高さの最高限度

第三節 都市機能誘導区域に係る特別の措置
第一款 民間誘導施設等整備事業計画の認定等
第九十五条 立地適正化計画に記載された都市機能誘導区域内における都市開発事業（当該都市

機能誘導区域に係る誘導施設又は当該誘導施設の利用者の利便の増進に寄与する施設を有する建築物の整備に関するものに限る。）であつて、当該都市開発事業を施行する土地（水面を含む。）の区域（以下「誘導事業区域」という。）の面積が政令で定める規模以上のもの（以下「誘導施設等整備事業」という。）を施行しようとする民間事業者は、国土交通省令で定めるところにより、当該誘導施設等整備事業に関する計画（以下「民間誘導施設等整備事業計画」という。）を作成し、国土交通大臣の認定を申請することができる。

2 前項の認定（以下「誘導事業計画の認定」という。）の申請は、当該申請に係る誘導施設等整備事業に係る立地適正化計画を作成した市町村（以下「計画作成市町村」という。）を経由して行わなければならない。この場合において、計画作成市町村は、当該民間誘導施設等整備事業計画を検討し、意見があるときは当該意見を付して、国土交通大臣に送付するものとする。

3 民間誘導施設等整備事業計画には、次に掲げる事項を記載しなければならない。

- 一 誘導事業区域の位置及び面積
- 二 誘導施設の概要
- 三 建築物及びその敷地の整備に関する事業の概要
- 四 公共施設の整備に関する事業の概要及び当該公共施設の管理者又は管理者となるべき者
- 五 工事着手の時期及び事業施行期間
- 六 用地取得計画
- 七 資金計画
- 八 その他国土交通省令で定める事項

第九十六条 国土交通大臣は、誘導事業計画の認定の申請があつた場合において、当該申請に係る民間誘導施設等整備事業計画が次に掲げる基準に適合すると認めるときは、誘導事業計画の認定をすることができる。

- 一 当該誘導施設等整備事業が、住宅及び都市機能増進施設の立地の適正化を図る上で効果的であり、かつ、立地適正化計画に記載された都市機能誘導区域を含む都市の再生に著しく貢献するものであると認められること。
- 二 当該誘導施設等整備事業が、立地適正化計画に記載された第八十一條第二項第三号に掲げる事項に照らして適切なものであること。

三 誘導事業区域が都市再生緊急整備地域内に
あるときは、建築物及びその敷地並びに公共
施設の整備に関する計画が、地域整備方針に
適合するものであること。

四 工事着手の時期、事業施行期間及び用地取
得計画が、当該誘導施設等整備事業を確実に
遂行するために適切なものであること。

五 当該誘導施設等整備事業の施行に必要な経
済的基礎及びこれを的確に遂行するために必
要なその他の能力が十分であること。

2 国土交通大臣は、誘導事業計画の認定をしよ
うとするときは、あらかじめ、当該誘導施設等
整備事業の施行により整備される公共施設の管
理者又は管理者となるべき者（計画作成市町村
であるものを除く。以下「公共施設の管理者
等」という。）の意見を聴かなければならない。
（誘導事業計画の認定の通知）

第九十七条 国土交通大臣は、誘導事業計画の認
定をしたときは、速やかに、その旨を計画作成
市町村、公共施設の管理者等及び民間都市機構
に通知するとともに、誘導事業計画の認定を受
けた者（以下「認定誘導事業者」という。）の
氏名又は名称、事業施行期間、誘導事業区域そ
の他国土交通省令で定める事項を公表しなけれ
ばならない。

第九十八条 認定誘導事業者は、誘導事業計画の
認定を受けた民間誘導施設等整備事業計画（以
下「認定誘導事業計画」という。）の変更（国
土交通省令で定める軽微な変更を除く。）をし
ようとするときは、国土交通大臣の認定を受け
なければならない。

第九十九条 認定誘導事業者は、認定誘導事業計
画の変更があったときは、その変更後のもの（以
下「認定誘導事業計画」という。）の施行の状況について
報告を求めることができる。

（地位の承継）
第一百条 認定誘導事業者の一般承継人又は認定誘
導事業者から認定誘導事業計画に係る誘導事業
区域内の土地の所有権その他当該認定誘導事業
の施行に必要な権原を取得した者は、国土交通
大臣の承認を受けて、当該認定誘導事業者が有

していた誘導事業計画の認定に基づく地位を承
継することができる。
2 国土交通大臣は、前項の規定による承認をし
ようとするときは、あらかじめ、計画作成市町
村の意見を聴かなければならない。
（改善命令）

第一百一条 国土交通大臣は、認定誘導事業者が認
定誘導事業計画に従って認定誘導事業を施行し
ていないと認めるときは、当該認定誘導事業者
に対し、相当の期間を定めて、その改善に必要
な措置を命ずることができる。
（誘導事業計画の認定の取消し）

第一百二条 国土交通大臣は、認定誘導事業者が前
条の規定による処分を違反したときは、誘導事
業計画の認定を取り消すことができる。

2 国土交通大臣は、前項の規定による取消しを
したときは、速やかに、その旨を、計画作成市
町村、公共施設の管理者等及び民間都市機構に
通知するとともに、公表しなければならない。
（民間都市機構の行う誘導施設等整備事業支
援業務）

第一百三十三条 民間都市機構は、第二十九条第一項及
び第七十一条第一項に規定する業務のほか、民
間事業者による誘導施設等整備事業を推進す
るため、国土交通大臣の承認を受けて、次に掲げ
る業務を行うことができる。

一 次に掲げる方法により、認定誘導事業者の
認定誘導事業の施行に要する費用の一部（公
共施設等その他公益的施設で政令で定めるも
のの整備に要する費用の額の範囲内に限る。）
について支援すること。

イ 認定誘導事業者（専ら認定誘導事業の施
行を目的とする株式会社等に限る。）に対
する出資

ロ 専ら、認定誘導事業者から認定誘導事業
の施行により整備される建築物及びその敷
地（以下この号において「認定誘導建築物
等」という。）又は認定誘導建築物等に係
る信託の受益権を取得し、当該認定誘導建
築物等又は当該認定誘導建築物等に係る信
託の受益権の管理及び処分を行うことを目
的とする株式会社等に対する出資

ハ 不動産特定共同事業法第二条第二項に規
定する不動産取引（認定誘導建築物等を整
備し、又は整備された認定誘導建築物等を
取得し、又は当該認定誘導建築物等の管理及び
処分を行うことを内容とするものに限る。）

を対象とする同条第三項に規定する不動産
特定共同事業契約に基づく出資
二 信託（受託した土地に認定誘導建築物等
を整備し、当該認定誘導建築物等の管理及び
処分を行うことを内容とするものに限
る。）の受益権の取得

ホ イからニまでに掲げる方法に準ずるもの
として国土交通省令で定める方法
二 認定誘導事業者に対し、必要な助言、あ
つせんその他の援助を行うこと

三 前二号に掲げる業務に附帯する業務を行う
こと。

2 前項の規定により、民間都市機構が同項各号
に掲げる業務を行う場合には、民間都市開発法
第十一条第一項及び第十二条中「第四条第一
各号」とあるのは「第四条第一項各号及び都市
再生特別措置法第三十三条第一項各号」と、民間
都市開発法第十四条中「第四条第一項第一号及
び第二号」とあるのは「第四条第一項第一号及
び第二号並びに都市再生特別措置法第三十三
条第一項第一号」と、民間都市開発法第二十
一条第一号中「第十一条第一項」とあるのは「第
十一項（都市再生特別措置法第三十三条第二
項の規定により読み替えて適用する場合を含む。
以下この号において同じ。）」と、「同項」とある
のは「第十一項第一項」と、同条第二号中「第
十二条」とあるのは「第十二条（都市再生特別
措置法第三十三条第二項の規定により読み替えて
適用する場合を含む。）とする。

3 民間都市機構は、第一項第一号に掲げる業務
を行う場合においては、国土交通省令で定める
基準に従って行わなければならない。
（民間都市開発法の特例）

第一百四十二条 民間都市開発法第四条第一項第一号に
規定する特定民間都市開発事業であつて認定誘
導事業（誘導施設を有する建築物の整備に関す
るものに限る。）であるものについての同号の
規定の適用については、同号中「という」と
あるのは、「という。」並びに都市再生特別措
置法第三十三条第一項第一号の政令で定める公益
的施設」とする。

第一款の二 都市再開発法の特例
第一百四十三条の二 立地適正化計画に記載された市街
地再開発事業の施行者（都市再開発法第二条第
二号に規定する施行者をいう。以下この条にお
いて同じ。）は、当該立地適正化計画に記載さ
れた誘導施設の整備に関する事業（第十八条

第一項の規定により指定された都市再生推進法
人が実施するものに限る。）の用に供するため
特に必要があると認めるときは、同法第八十
八条第一項（同法第八十八条の二十四の第二項に
おいて準用する場合を含む。）の規定にかかわ
らず、同法による第一種市街地再開発事業によ
り当該施行者が取得した同法第二条第九号に規
定する施設建築物の一部等若しくは同法第七
条の十一第二項に規定する個別利用区内の宅地又
は同法による第二種市街地再開発事業により当
該施行者が取得した同法第二条第十号に規定す
る建築施設の一部を、公募をしないで賃貸し、
又は譲渡することができる。

第二款 土地区画整理法の特例
第一百四十四条の二 土地区画整理法（施行地区内の権利者の全ての同意を得た場合
における換地の決定）

第一百五十二条 立地適正化計画に記載された土地区画
整理事業の施行者は、換地計画の内容について
施行地区内の土地又は物件に関し権利を有する
者（施行者が土地区画整理組合である場合に
あつては、参加組合員を含む。）の全ての同意を
得たときは、土地区画整理法第八十九条の規定
によらないで、換地計画において換地を定める
ことができる。この場合においては、同法第八
十八条第二項から第七項までの規定は、適用し
ない。
（誘導施設整備区）

第一百五十三条の二 立地適正化計画に記載された土地
区画整理事業であつて都市機能誘導区域をその
施行地区に含むものうち、建築物等の敷地と
して利用されていない宅地又はこれに準ずる宅
地が相当程度存在する区域内において施行され
るものの事業計画においては、当該施行地区内
の宅地のうち次条第一項の申出が見込まれるも
のについての換地の地積の合計が、当該都市機
能誘導区域に係る誘導施設を有する建築物を整
備するのに必要な地積とおおむね等しいか又は
これを超えること認められる場合に限り、国土交
通省令で定めるところにより、当該都市機能誘
導区域内の土地の区域であつて、当該建築物の
用に供すべきもの（以下「誘導施設整備区」と
いう。）を定めることができる。

第一百五十四条の三 前条の規定により事業計画にお
いて誘導施設整備区が定められたときは、施行地
区内の宅地の所有者は、施行者に対し、国土交
通省令で定めるところにより、換地計画にお

て当該宅地についての換地を誘導施設整備区内に定めるべき旨の申出をすることができるとする。前項の申出は、次に掲げる要件のいずれにも該当するものでなければならぬ。

一 当該申出に係る宅地が建築物等の敷地として利用されていないものであること又はこれに準ずるものとして規準、規約、定款若しくは施行規程で定めるものであること。

二 当該申出に係る宅地に地上権、永小作権、賃借権その他の当該宅地を使用し、又は収益することができる権利（誘導施設を有する建築物の所有を目的とする地上権及び賃借権並びに地役権を除く。）が存しないこと。

三 当該申出に係る宅地について誘導施設を有する建築物の所有を目的とする地上権又は賃借権を有する者がいるときは、その者の同意が得られていること。

3 第一項の申出は、次の各号に掲げる場合の区分に応じ、当該各号に定める公告があった日から起算して六十日以内に行わなければならない。

一 事業計画が定められた場合 土地区画整理法第七十六条第一項各号に掲げる公告（事業計画の変更の公告又は事業計画の変更についての認可の公告を除く。）

二 事業計画の変更により新たに誘導施設整備区が定められた場合 当該事業計画の変更の公告又は当該事業計画の変更についての認可の公告

三 事業計画の変更により従前の施行地区外の土地が新たに施行地区に編入されたことに伴い誘導施設整備区の面積が拡張された場合 当該事業計画の変更の公告又は当該事業計画の変更についての認可の公告

4 施行者は、第一項の申出があった場合において、前項の期間の経過後遅滞なく、第一号に該当すると認めるときは当該申出に係る宅地の全部を換地計画においてその宅地についての換地を誘導施設整備区内に定めらるべき宅地として指定し、第二号に該当すると認めるときは当該申出に係る宅地の一部を換地計画においてその宅地についての換地を誘導施設整備区内に定めらるべき宅地として指定し、他の宅地について申出に応じない旨を決定し、第三号に該当すると認めるときは当該申出に係る宅地の全部について申出に応じない旨を決定しなければならない。

一 換地計画において、当該申出に係る宅地の全部についての換地の地積が誘導施設整備区（面積と等しいこととなる場合）

二 換地計画において、当該申出に係る宅地の全部についての換地の地積が誘導施設整備区（面積を超えることとなる場合）

三 換地計画において、当該申出に係る宅地の全部についての換地の地積が誘導施設整備区（面積に満たないこととなる場合）

5 施行者は、前項の規定による指定又は決定をしたときは、遅滞なく、第一項の申出をした者に対し、その旨を通知しなければならない。

6 施行者は、第四項の規定による指定をしたときは、遅滞なく、その旨を公告しなければならない。

7 施行者が土地区画整理法第十四条第一項の規定により設立された土地区画整理組合である場合においては、最初の役員が選挙され、又は選任されるまでの間は、第一項の申出は、同条第一項の認可を受けた者が受理するものとする。

（誘導施設整備区（の換地））
第五十五条の四 前条第四項の規定により指定された宅地については、換地計画において換地を誘導施設整備区内に定めなければならない。

第三款 駐車場の特例等
 （駐車場配置適正化区域への準用）
第六十二条 第六十二条の九の規定は、立地適正化計画に記載された路外駐車場配置等基準に係る駐車場配置適正化区域について準用する。

第七十七条 立地適正化計画に記載された集約駐車施設の位置及び規模に係る駐車場配置適正化区域（駐車場法第二十条第一項の地区若しくは地域又は同条第二項の地区の区域内に限る。）内における同条第二項及び第二項並びに同法第二十条の二第一項の規定の適用については、同法第二十条第一項中「近隣商業地域内」とあるのは、「近隣商業地域内の駐車場配置適正化区域（都市再生特別措置法（平成十四年法律第二十二号）第八十一条第六項第一号に規定する駐車場配置適正化区域をいう。以下同じ。）の区域内」と、同項及び同条第二項並びに同法第二十条の二第二項中「建築物又は」とあるのは「建築物若しくは」と、同法第二十条第一項中「旨を」とあるのは「旨、その建築物若しくはその建築物の敷地内若しくは集約駐車施設（同項第三号に規定する集約駐車施設をいう。以下

同じ。）内に駐車施設を設けなければならない旨又は集約駐車施設内に駐車施設を設けなければならない旨を」と、「駐車場整備地区内又は商業地域内若しくは近隣商業地域内の」とあるのは「駐車場配置適正化区域の区域内の」と、同条第二項中「地区内」とあるのは「地区内の駐車場配置適正化区域の区域内」と、同項及び同法第二十条の二第二項中「旨を」とあるのは「旨、その建築物若しくはその建築物の敷地内若しくは集約駐車施設内に駐車施設を設けなければならない旨又は集約駐車施設内に駐車施設を設けなければならない旨を」と、同項中「前条第一項の地区若しくは地域内又は同条第二項の地区内」とあるのは「前条第一項又は第二項の駐車場配置適正化区域の区域内」と、「地区又は地域内の」とあり、及び「地区内の」とあるのは「駐車場配置適正化区域の区域内の」とする。

第四款 建築等の届出等
第八十条 立地適正化計画の区域において、当該立地適正化計画に記載された誘導施設を有する建築物の建築の用に供する目的で行う開発行為又は当該誘導施設を有する建築物を新築し、若しくは建築物を改築し、若しくはその用途を変更して当該誘導施設を有する建築物とする行為を行おうとする者（当該誘導施設の立地を誘導するものとして当該立地適正化計画に記載された都市機能誘導区域内においてこれらの行為を行おうとする者を除く。）は、これらの行為を行おうとする日の三十日前までに、国土交通省令で定めるところにより、行為の種類、場所、設計又は施行方法、着手予定日その他国土交通省令で定める事項を市町村長に届け出なければならない。ただし、次に掲げる行為については、この限りでない。

一 軽易な行為その他の行為で政令で定めるもの
 二 非常災害のため必要な応急措置として行う行為
 三 都市計画事業の施行として行う行為又はこれに準ずる行為として政令で定める行為
 四 その他市町村の条例で定める行為

2 前項の規定による届出をした者は、当該届出に係る事項のうち国土交通省令で定める事項を変更しようとするときは、当該事項の変更に係る行為で着手する日の三十日前までに、国土交通省令で定めるところにより、その旨を市町村長に届け出なければならない。

3 市町村長は、第一項又は前項の規定による届出があった場合において、当該届出に係る行為が都市機能誘導区域内における誘導施設の立地の誘導を図る上で支障があると認めるときは、当該届出をした者に対して、当該届出に係る事項に關し、誘導施設の立地を適正なものとするために必要な勧告をすることができるとする。

4 市町村長は、前項の規定による勧告をした場合において、必要があると認めるときは、その勧告を受けた者に対し、当該誘導施設に係る都市機能誘導区域内の土地の取得についてのあつせんその他の必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

第五款 休廃止の届出等
第八十一条 立地適正化計画に記載された都市機能誘導区域内において、当該都市機能誘導区域に係る誘導施設を休止し、又は廃止しようとする者は、休止し、又は廃止しようとする日の三十日前までに、国土交通省令で定めるところにより、その旨を市町村長に届け出なければならない。

2 市町村長は、前項の規定による届出があった場合において、新たな誘導施設の立地又は立地の誘導を図るため、当該休止し、又は廃止しようとする誘導施設を有する建築物を有効に活用する必要があると認めるときは、当該届出をした者に対して、当該建築物の存置その他の必要な助言又は勧告をすることができるとする。

第六款 特定用途誘導地区
第九十条 立地適正化計画に記載された都市機能誘導区域のうち、当該都市機能誘導区域に係る誘導施設を有する建築物の建築を誘導する必要があると認められる区域（都市計画法第八十一条第一項第一号に規定する用途地域が定められている区域に限る。）については、都市計画に、特定用途誘導地区を定めることができる。

2 特定用途誘導地区に関する都市計画には、都市計画法第八十一条第三項第一号及び第三号に掲げる事項のほか、次に掲げる事項を定めるものとする。

一 建築物等の誘導すべき用途及びその全部又は一部を当該用途に供する建築物の容積率の最高限度
 二 当該地区における土地の合理的かつ健全な高度利用を図るため必要な場合にあつては、建築物の容積率の最低限度及び建築物の建築面積の最低限度

3 市町村長は、第一項又は前項の規定による届出があった場合において、当該届出に係る行為が都市機能誘導区域内における誘導施設の立地の誘導を図る上で支障があると認めるときは、当該届出をした者に対して、当該届出に係る事項に關し、誘導施設の立地を適正なものとするために必要な勧告をすることができるとする。

4 市町村長は、前項の規定による勧告をした場合において、必要があると認めるときは、その勧告を受けた者に対し、当該誘導施設に係る都市機能誘導区域内の土地の取得についてのあつせんその他の必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

第五款 休廃止の届出等
第八十一条 立地適正化計画に記載された都市機能誘導区域内において、当該都市機能誘導区域に係る誘導施設を休止し、又は廃止しようとする者は、休止し、又は廃止しようとする日の三十日前までに、国土交通省令で定めるところにより、その旨を市町村長に届け出なければならない。

2 市町村長は、前項の規定による届出があった場合において、新たな誘導施設の立地又は立地の誘導を図るため、当該休止し、又は廃止しようとする誘導施設を有する建築物を有効に活用する必要があると認めるときは、当該届出をした者に対して、当該建築物の存置その他の必要な助言又は勧告をすることができるとする。

第六款 特定用途誘導地区
第九十条 立地適正化計画に記載された都市機能誘導区域のうち、当該都市機能誘導区域に係る誘導施設を有する建築物の建築を誘導する必要があると認められる区域（都市計画法第八十一条第一項第一号に規定する用途地域が定められている区域に限る。）については、都市計画に、特定用途誘導地区を定めることができる。

2 特定用途誘導地区に関する都市計画には、都市計画法第八十一条第三項第一号及び第三号に掲げる事項のほか、次に掲げる事項を定めるものとする。

一 建築物等の誘導すべき用途及びその全部又は一部を当該用途に供する建築物の容積率の最高限度
 二 当該地区における土地の合理的かつ健全な高度利用を図るため必要な場合にあつては、建築物の容積率の最低限度及び建築物の建築面積の最低限度

3 市町村長は、第一項又は前項の規定による届出があった場合において、当該届出に係る行為が都市機能誘導区域内における誘導施設の立地の誘導を図る上で支障があると認めるときは、当該届出をした者に対して、当該届出に係る事項に關し、誘導施設の立地を適正なものとするために必要な勧告をすることができるとする。

4 市町村長は、前項の規定による勧告をした場合において、必要があると認めるときは、その勧告を受けた者に対し、当該誘導施設に係る都市機能誘導区域内の土地の取得についてのあつせんその他の必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

第五款 休廃止の届出等
第八十一条 立地適正化計画に記載された都市機能誘導区域内において、当該都市機能誘導区域に係る誘導施設を休止し、又は廃止しようとする者は、休止し、又は廃止しようとする日の三十日前までに、国土交通省令で定めるところにより、その旨を市町村長に届け出なければならない。

2 市町村長は、前項の規定による届出があった場合において、新たな誘導施設の立地又は立地の誘導を図るため、当該休止し、又は廃止しようとする誘導施設を有する建築物を有効に活用する必要があると認めるときは、当該届出をした者に対して、当該建築物の存置その他の必要な助言又は勧告をすることができるとする。

第六款 特定用途誘導地区
第九十条 立地適正化計画に記載された都市機能誘導区域のうち、当該都市機能誘導区域に係る誘導施設を有する建築物の建築を誘導する必要があると認められる区域（都市計画法第八十一条第一項第一号に規定する用途地域が定められている区域に限る。）については、都市計画に、特定用途誘導地区を定めることができる。

三 当該地区における市街地の環境を確保するため必要な場合にあつては、建築物の高さの最高限度

第三節の二 都市計画法の特例

第九十九条の二 第八十一条第九項に規定する事項には、同項に規定する事業の実施に係る都市計画法第五十九条第一項の認可に関する事項を記載することができる。

二 市町村長は、立地適正化計画に前項に規定する事項を記載しようとするときは、当該事項について、国土交通省令で定めるところにより、あらかじめ、都道府県知事（次の各号に掲げる事項にあつては、都道府県知事及びそれぞれ当該各号に定める者）に協議をし、都道府県知事の同意を得なければならない。

一 都市計画法第五十九条第六項に規定する公共の用に供する施設を管理する者の意見の聴取を要する場合における同条第一項の認可に関する事項 当該公共の用に供する施設を管理する者

二 都市計画法第五十九条第六項に規定する土地改良事業計画による事業を行う者の意見の聴取を要する場合における同条第一項の認可に関する事項 当該土地改良事業計画による事業を行う者

第九十九条の三 前条第一項に規定する事項が記載された立地適正化計画が第八十一条第二十三項（同条第二十四項において準用する場合を含む。）の規定により公表されたときは、当該公表の日当該事項に係る同条第九項に規定する事業を実施する市町村に対する都市計画法第五十九条第一項の認可があつたものとみなす。

第四節 立地誘導促進施設協定

（立地誘導促進施設協定の締結等）

第九十九条の四 立地適正化計画に記載された第八十一条第十項に規定する区域内の一団の土地の所有者及び借地権等を有する者（土地区画整理法第九十八条第一項の規定により仮換地として指定された土地にあつては、当該土地に対応する従前の土地の所有者及び借地権等を有する者。以下「土地所有者等」という。）は、その全員の合意により、立地誘導促進施設の一體的な整備又は管理に関する協定（以下「立地誘導促進施設協定」という。）を締結することができる。ただし、当該土地（同法第九十八条第一項の規定により仮換地として指定された土地）にあつては、当該土地に対応する従前の土地の

区域内に借地権等の目的となつてゐる土地がある場合においては、当該借地権等の目的となつてゐる土地の所有者の合意を要しない。

二 立地誘導促進施設協定においては、次に掲げる事項を定めるものとする。

一 立地誘導促進施設協定の目的となる土地の区域（以下この節において「協定区域」という。）並びに立地誘導促進施設の種類及び位置

二 次に掲げる立地誘導促進施設の一體的な整備又は管理に関する事項のうち、必要なものイ 前号の立地誘導促進施設の概要及び規模ロ 前号の立地誘導促進施設の一體的な整備又は管理の方法

ハ その他立地誘導促進施設の一體的な整備又は管理に関する事項

三 立地誘導促進施設協定の有効期間

四 立地誘導促進施設協定に違反した場合の措置

三 第四章第七節（第四十五条の二第一項及び第二項を除く。）の規定は、立地誘導促進施設協定について準用する。この場合において、同条第三項中「前項各号」とあるのは「第九十九条の四第二項各号」と、同項及び第四十五条の十一第一項中「都市再生緊急整備地域」とあるのは「第八十一条第十項の規定により立地適正化計画に記載された区域」と、第四十五条の二第三項中「協定区域」とあるのは「協定区域（第九十九条の四第二項第一号に規定する協定区域をいう。以下この節において同じ。）」と、「都市再生歩行者経路」とあるのは「立地誘導促進施設（第八十一条第十項に規定する立地誘導促進施設をいう。以下この節において同じ。）の一體的な」と、「土地所有者等」とあるのは「土地所有者等（第九十九条の四第一項に規定する土地所有者等をいう。以下この節において同じ。）」と、第四十五条の四第一項第三号中「第九十九条の四第二項各号」と、同項第四号中「都市再生緊急整備地域の地域整備方針」とあるのは「第八十一条第十項の規定により立地適正化計画に記載された立地誘導促進施設の一體的な整備又は管理に関する事項」と、第四十五条の七及び第四十五条の十中「第四十五条の二第一項」とあるのは「第九十九条の四第一項」と、第四十五条の十一第一項及び第二項中「都市再生歩行者経路」とあるのは「立地誘導促進施設の一體的な」と読み替へるものとする。

（立地誘導促進施設協定への参加のあつせん）

第九十九条の五 協定区域内の土地に係る土地所有者等（当該立地誘導促進施設協定の効力が及ばない者を除く。）は、前条第三項において準用する第四十五条の二第三項に規定する協定区域隣接地の区域内の土地に係る土地所有者等に對し当該立地誘導促進施設協定への参加を求めた場合においてその参加を承諾しない者があるときは、当該協定区域内の土地に係る土地所有者等の全員の合意により、市町村長に對し、その者の承諾を得るために必要なあつせんを行うべき旨を申請することができる。

二 市町村長は、前項の規定による申請があつた場合において、当該協定区域隣接地の区域内の土地に係る土地所有者等の当該立地誘導促進施設協定への参加が前条第三項において準用する第四十五条の四第一項各号（第一号を除く。次条第一項において同じ。）に掲げる要件に照らして相当であり、かつ、当該立地誘導促進施設協定の内容からみてその者に対し参加を求めることが特に必要であると認めるときは、あつせんを行うことができる。

（立地誘導促進施設協定の認可の取消し）

第九十九条の六 市町村長は、第九十九条の四第三項において準用する第四十五条の二第四項、第四十五条の五第一項又は第四十五条の十一第一項の認可をした後において、当該認可に係る立地誘導促進施設協定の内容及び第九十九条の四第三項において準用する第四十五条の四第一項各号に掲げる要件のいずれかに該当しなくなつたときは、当該立地誘導促進施設協定の認可を取り消すものとする。

二 市町村長は、前項の規定による取消しをしたときは、速やかに、その旨を、協定区域内の土地に係る土地所有者等（当該立地誘導促進施設協定の効力が及ばない者を除く。）に通知するとともに、公告しなければならない。

（居住誘導区域等権利設定等促進計画の作成）

第九十九条の七 市町村長は、立地適正化計画に記載された居住誘導区域等権利設定等促進事業区域内の土地及び当該土地に存する建物を対象として居住誘導区域等権利設定等促進事業を行うおとすときは、当該居住誘導区域等権利設定等促進事業に関する計画（以下「居住誘導区域等権利設定等促進計画」という。）を作成することができる。

二 居住誘導区域等権利設定等促進計画においては、第一号から第五号までに掲げる事項を記載するものとする。第六号に掲げる事項を記載することができる。

一 権利設定等を受ける者の氏名又は名称及び住所

二 前号に規定する者が権利設定等を受ける土地の所在、地番、地目及び面積又は建物の所在、家屋番号、種類、構造及び床面積

三 第一号に規定する者に前号に規定する土地又は建物について権利設定等を行う者の氏名又は名称及び住所

四 第一号に規定する者が設定又は移転を受ける地上権、賃借権又は使用貸借による権利の種類、内容（土地又は建物の利用目的を含む）、始期又は移転の時期及び存続期間又は残存期間並びに当該設定又は移転を受ける権利が地上権又は賃借権である場合にあつては地代又は借賃及びその支払の方法

五 第一号に規定する者が移転を受ける所有権の移転の後における土地又は建物の利用目的並びに当該所有権の移転の時期並びに移転の対価及びその支払の方法

六 その他権利設定等に係る法律関係に関する事項として国土交通省令で定める事項

二 居住誘導区域等権利設定等促進計画において、居住誘導区域にあつては住宅の、都市機能誘導区域にあつては誘導施設の整備を図るため行う権利設定等又はこれと併せて行う当該権利設定等を円滑に推進するために必要な権利設定等が記載されていること。

三 前項第二号に規定する土地ごとに、同項第一号に規定する者並びに当該土地について所有権、地上権、賃借権、貸借権、使用貸借による権利又はその他の使用及び収益を目的とする権利を有する者の全ての同意が得られていること。

四 前項第二号に規定する建物ごとに、同項第一号に規定する者、当該建物について所有

権、質権、賃借権、使用貸借による権利又はその他の使用及び収益を目的とする権利を有する者並びに当該建物について先取特権若しくは抵当権の登記、仮登記、買戻しの特約その他権利の消滅に関する事項の定め、登記又は処分制限の登記に係る権利を有する者の全ての同意が得られていること。

五 前項第二号に規定する土地に定着する物件（同号に規定する建物を除く。）ごとに、当該物件について所有権、質権、賃借権、使用貸借による権利又はその他の使用及び収益を目的とする権利を有する者並びに当該物件について先取特権若しくは抵当権の登記、仮登記、買戻しの特約その他権利の消滅に関する事項の定め、登記又は処分制限の登記に係る権利を有する者の全ての同意が得られていること。

六 前項第一号に規定する者が、権利設定等が行われた後において、同項第二号に規定する土地又は建物を同項第四号又は第五号に規定する土地又は建物の利用目的に即して適正かつ確実に利用することができることと認められること。

（居住誘導区域等権利設定等促進計画の作成の要請）

第九九条の八 立地適正化計画に記載された居住誘導区域等権利設定等促進事業区域内の土地又は当該土地に存する建物について地上権、賃借権、使用貸借による権利又は所有権を有する者及び当該土地又は建物について権利設定等を受けようとする者は、その全員の合意により、前条第二項各号に掲げる事項を内容とする協定を締結した場合において、同条第三項第三号から第五号までに規定する者の全ての同意を得たときは、国土交通省令で定めるところにより、その協定の目的となつて土地又は建物につき、居住誘導区域等権利設定等促進計画を作成すべきことを市町村に対し要請することができる。

（居住誘導区域等権利設定等促進計画の公告）
第九九条の九 市町村は、居住誘導区域等権利設定等促進計画を作成したときは、国土交通省令で定めるところにより、遅滞なく、その旨を公告しなければならない。

（公告の効果）
第九九条の十 前条の規定による公告があつたときは、その公告があつた居住誘導区域等権利設定等促進計画の定めるところによつて地上権、賃借権若しくは使用貸借による権利が設定され、若しくは移転し、又は所有権が移転する。（登記の特例）

第九九条の十一 第九九条の九の規定による公告があつた居住誘導区域等権利設定等促進計画に係る土地又は建物の登記については、政令で、不動産登記法（平成十六年法律第二百二十三号）の特例を定めることができる。

（勧告）
第九九条の十二 市町村長は、権利設定等を受けた者が居住誘導区域等権利設定等促進計画に記載された土地又は建物の利用目的に従つて土地又は建物を利用していないと認めるときは、当該権利設定等を受けた者に対し、相当の期限を定めて、当該利用目的に従つて土地又は建物を利用すべきことを勧告することができる。

（居住誘導区域又は都市機能誘導区域内の土地等に関する情報の利用等）
第九九条の十三 市町村長は、この節の規定の施行に必要な限度で、その保有する居住誘導区域又は都市機能誘導区域内の土地（溢水、湛水、津波、高潮その他による災害の防止又は軽減を図るための措置が講じられた、又は講じられるものに限る。次項において同じ。）及び当該土地に存する建物に関する情報を、その保有に当たつて特定された利用目的以外の目的のために内部で利用することができる。

2 市町村長は、この節の規定の施行のため必要と認めるときは、関係地方公共団体の長に対して、居住誘導区域又は都市機能誘導区域内の土地及び当該土地に存する建物に関する情報の提供を求めることができる。
第五節 低未利用土地権利設定等促進計画等
（低未利用土地の利用及び管理に関する市町村の援助等）
第九九条の十四 第八十一条第十四項の規定により立地適正化計画に低未利用土地利用等指針に関する事項が記載されているときは、市町村は、当該低未利用土地利用等指針に即し、居住誘導区域又は都市機能誘導区域内の低未利用土地の所有者等に対し、住宅又は誘導施設の立地及び立地の誘導を図るために必要な低未利用土地の利用及び管理に関する情報の提供、指導、助言その他の援助を行うものとする。

2 市町村は、前項の援助として低未利用土地の利用の方法に関する提案又はその方法に関する知識を有する者の派遣を行うため必要があると認めるときは、都市計画法第七十五条の五第一項の規定により指定した都市計画協力団体に必要な協力を要請することができる。

3 市町村長は、立地適正化計画に記載された居住誘導区域又は都市機能誘導区域内の低未利用土地の所有者等が当該低未利用土地利用等指針に即した低未利用土地の管理を行わないため、悪臭の発生、堆積した廃棄物（廃棄物の処理及び清掃に関する法律（昭和四十五年法律第二百三十七号）第二条第一項に規定する廃棄物という。）の飛散その他の事由により当該低未利用土地の周辺の地域における住宅又は誘導施設の立地又は立地の誘導を図る上で著しい支障が生じていると認めるときは、当該所有者等に対し、当該低未利用土地利用等指針に即した低未利用土地の管理を行うよう勧告することができる。

（低未利用土地権利設定等促進計画の作成）
第九九条の十五 市町村は、立地適正化計画に記載された低未利用土地権利設定等促進事業区域内の土地及び当該土地に存する建物を対象として低未利用土地権利設定等促進事業を行うとするときは、当該低未利用土地権利設定等促進事業に関する計画（以下「低未利用土地権利設定等促進計画」という。）を作成することができる。

2 低未利用土地権利設定等促進計画において、第一号から第五号までに掲げる事項を記載するものとするとき、第六号に掲げる事項を記載することができる。
一 権利設定等を受ける者の氏名又は名称及び住所
二 前号に規定する者が権利設定等を受ける土地の所在、地番、地目及び面積又は建物の所在、家屋番号、種類、構造及び床面積
三 第一号に規定する者に前号に規定する土地又は建物について権利設定等を行う者の氏名又は名称及び住所
四 第一号に規定する者が設定又は移転を受け地上権、賃借権又は使用貸借による権利の種類、内容（土地又は建物の利用目的を含む。）、始期又は移転の時期及び存続期間又は残存期間並びに当該設定又は移転を受ける権利が地上権又は賃借権である場合にあつては、代位又は借賃及びその支払の方法
五 第一号に規定する者が移転を受ける所有権の移転の後における土地又は建物の利用目的

並びに当該所有権の移転の時期並びに移転の対価及びその支払の方法
六 その他権利設定等に係る法律関係に関する事項として国土交通省令で定める事項
3 低未利用土地権利設定等促進計画は、次に掲げる要件に該当するものでなければならない。
一 低未利用土地権利設定等促進計画の内容が立地適正化計画に記載された第八十一条第十五項に規定する低未利用土地権利設定等促進事業に関する事項に適合するものであること。
二 低未利用土地権利設定等促進計画において、居住誘導区域にあつては住宅又は住宅の立地の誘導の促進に資する施設等の、都市機能誘導区域にあつては誘導施設又は誘導施設の立地の誘導の促進に資する施設等の整備を図るため行う権利設定等又はこれと併せて行う当該権利設定等を円滑に推進するために必要な権利設定等が記載されていること。
三 前項第二号に規定する土地ごとに、同項第一号に規定する者並びに当該土地について所有権、地上権、質権、賃借権、使用貸借による権利又はその他の使用及び収益を目的とする権利を有する者の全ての同意が得られていること。
四 前項第二号に規定する建物ごとに、同項第一号に規定する者、当該建物について所有権、質権、賃借権、使用貸借による権利又はその他の使用及び収益を目的とする権利を有する者並びに当該建物について先取特権若しくは抵当権の登記、仮登記、買戻しの特約その他権利の消滅に関する事項の定め、登記又は処分制限の登記に係る権利を有する者の全ての同意が得られていること。
五 前項第二号に規定する土地に定着する物件（同号に規定する建物を除く。）ごとに、当該物件について所有権、質権、賃借権、使用貸借による権利又はその他の使用及び収益を目的とする権利を有する者並びに当該物件について先取特権若しくは抵当権の登記、仮登記、買戻しの特約その他権利の消滅に関する事項の定め、登記又は処分制限の登記に係る権利を有する者の全ての同意が得られていること。
六 前項第一号に規定する者が、権利設定等が行われた後において、同項第二号に規定する土地又は建物を同項第四号又は第五号に規定

- 四 中心市街地の活性化に関する法律（平成十一年法律第九十二号）第六十一条第一項の規定により当該市町村の長が指定した中心市街地整備推進機構
- 五 景観法第九十二条第一項の規定により当該市町村の長が指定した景観整備機構
- 六 地域歴史的風致法第三十四条第一項の規定により当該市町村の長が指定した歴史的風致維持向上支援法人
- 七 前各号に掲げる者のほか、第二号から前号までに掲げる者に準ずるものとして国土交通省令で定める特定非営利活動法人等
- 八 前項各号に掲げる者は、必要があると認めるときは、協議して、市町村協議会に、次に掲げる者を構成員として加えることができる。
 - 一 関係都道府県、独立行政法人都市再生機構、地方住宅供給公社又は民間都市機構
 - 二 当該都市再生整備計画の区域内において公共施設等の整備若しくは管理を行い、若しくは都市開発事業を施行する民間事業者又は誘導施設若しくは誘導施設の利用者の利便の増進に寄与する施設の整備に関する事業を施行する民間事業者（次項において「誘導施設等整備民間事業者」という。）
 - 三 関係する公共交通事業者等（地域公共交通の活性化及び再生に関する法律（平成十九年法律第五十九号）第二条第二号に規定する公共交通事業者等をいう。）又は関係する道路管理者、公園管理者その他の公共施設等の管理者若しくは関係する公安委員会
 - 四 その他都市再生整備計画及びその実施、都市再生整備計画に基づく事業により整備された公共施設等の管理又は立地適正化計画及びその実施に関し密接な関係を有する者
 - 五 誘導施設等整備民間事業者であつて市町村協議会の構成員でないものは、第一項の規定により市町村協議会を組織する同項各号に掲げる者に対して、自己を市町村協議会の構成員として加えることを申し出ることができる。
- 九 前項の規定による申出を受けた第一項各号に掲げる者は、正当な理由がある場合を除き、当該申出に応じなければならない。
- 十 市町村協議会は、必要があると認めるときは、関係行政機関、第四十六条第二項第二号イからへまでに掲げる事業（これらの事業と一体となつてその効果を増大させることとなる事業等を含む。）を実施し、又は実施することが見

- 込まれる者、都市再生整備計画に基づく事業により整備された公共施設等の管理者及び第八十一条第二項第四号イからへまでに掲げる事業等を実施し、又は実施することが見込まれる者に対して、資料の提供、意見の開陳、説明その他必要な協力を求めることができる。
 - 十一 市町村協議会は、特に必要があると認めるときは、前項に規定する者以外の者に対しても、必要な協力を依頼することができる。
 - 十二 第一項の協議を行うための会議において協議が調つた事項については、市町村協議会の構成員は、その協議の結果を尊重しなければならない。
 - 十三 前各項に定めるもののほか、市町村協議会の運営に関し必要な事項は、市町村協議会が定める。
- 第八章 都市再生推進法人**
- （都市再生推進法人の指定）**
- 第一百八条** 市町村長は、特定非営利活動促進法第二条第二項の特定非営利活動法人、一般社団法人若しくは一般財団法人又ははまちづくりの推進を図る活動を行うことを目的とする会社であつて、次条に規定する業務を適正かつ確実に行うことができるものと認められるものを、その申請により、都市再生推進法人（以下「推進法人」という。）として指定することができる。
- 一 市町村長は、前項の規定による指定をしたときは、当該推進法人の名称、住所及び事務所のある地を公示しなければならない。
 - 二 推進法人は、その名称、住所又は事務所の所在地を変更しようとするときは、あらかじめ、その旨を市町村長に届け出なければならない。
 - 三 市町村長は、前項の規定による届出があつたときは、当該届出に係る事項を公示しなければならない。
- （推進法人の業務）**
- 第一百九条** 推進法人は、次に掲げる業務を行うものとする。
- 一 次に掲げる事業を施行する民間事業者に対して、当該事業に関する知識を有する者の派遣、情報の提供、相談その他の援助を行うこと。
 - 二 第四十六条第一項の土地の区域における都市開発事業であつて都市再生基本方針に基いて行われるもの
 - 三 立地適正化計画に記載された居住誘導区域に於ける都市開発事業であつて住宅の整備に関するもの

- 四 立地適正化計画に記載された誘導施設又は当該誘導施設の利用者の利便の増進に寄与する施設の整備に関する事業
- 五 立地適正化計画に記載された居住誘導区域又は都市機能誘導区域内における低未利用土地の利用又は管理に関する事業
- 六 立地適正化計画に記載された跡地等管理区域における跡地等の管理に関する事業
- 七 特定非営利活動法人等による前号の事業の施行に対する助成を行うこと
- 八 次に掲げる事業を施行すること又は当該事業に参加すること。
 - イ 第一号の事業
 - ロ 公共施設又は駐車場その他の第四十六条第一項の土地の区域又は立地適正化計画に記載された居住誘導区域における居住者、滞在者その他の者の利便の増進に寄与するものとして国土交通省令で定める施設の整備に関する事業
 - 三 前号の事業に有効に利用できる土地で政令で定めるものの取得、管理及び譲渡を行うこと
 - 四 第四十六条第一項の土地の区域又は立地適正化計画に記載された居住誘導区域における公共施設又は第三号ロの国土交通省令で定める施設の所有者（所有者が二人以上いる場合にあつては、その全員）との契約に基づき、これらの施設の管理を行うこと。
 - 五 公園施設設置管理協定に基づき滞在快適性等向上公園施設等の設置等を行うこと。
 - 六 都市利便増進協定に基づき都市利便増進施設の一體的な整備又は管理を行うこと。
 - 七 低未利用土地利用促進協定に基づき居住者等利用施設の整備及び管理を行うこと。
 - 八 跡地等管理協定に基づき跡地等の管理等を行うこと。
 - 九 第四十六条第一項の土地の区域又は立地適正化計画に記載された居住誘導区域若しくは都市機能誘導区域の魅力及び活力の向上に資する次に掲げる活動を行うこと（第三号から第八号までに該当するものを除く。）
 - イ 滞在快適性等向上施設等その他の滞在者等の快適性の向上又は利便の増進に資する施設の整備又は管理
 - ロ 滞在者等の滞在及び交流の促進を図るための広報又は行事の実施その他の活動

- 十 第六十二条の八第一項の規定による道路若しくは都市公園の占用又は道路の使用の許可に係る申請書の経由に関する事務を行うこと。
 - 十一 第四十六条第一項の土地の区域又は立地適正化計画の区域における都市の再生に関する情報の収集、整理及び提供を行うこと。
 - 十二 第四十六条第一項の土地の区域又は立地適正化計画の区域における都市の再生に関する調査研究を行うこと。
 - 十三 第四十六条第一項の土地の区域又は立地適正化計画の区域における都市の再生に関する普及啓発を行うこと。
 - 十四 前各号に掲げるもののほか、第四十六条第一項の土地の区域又は立地適正化計画の区域における都市の再生のために必要な業務を行うこと。
- （推進法人の業務に係る公有地の拡大の推進に関する法律の特例）**
- 第二百十条** 公有地の拡大の推進に関する法律（昭和四十七年法律第六十六号）第四条第一項の規定は、推進法人に対し、前条第四号に掲げる業務（同条第三号イに掲げる事業のうち都市再生整備計画に記載された公共施設の整備に関する事業及び同号ロに掲げる事業に係るものに限る。）の用に供させるために同項に規定する土地を有償で譲り渡そうとする者については、適用しない。
- （監督等）**
- 第二百十一条** 市町村長は、第一百九条各号に掲げる業務の適正かつ確実な実施を確保するため必要があると認めるときは、推進法人に対し、その業務に関し報告をさせることができる。
- 一 市町村長は、推進法人が第一百九条各号に掲げる業務を適正かつ確実に実施していないと認めるときは、推進法人に対し、その業務の運営の改善に関し必要な措置を講ずべきことを命ずることができる。
 - 二 市町村長は、推進法人が前項の規定による命令に違反したときは、第一百八条第一項の規定による指定を取り消すことができる。
 - 三 市町村長は、前項の規定により指定を取り消したときは、その旨を公示しなければならない。
- （民間都市機構の行う推進法人支援業務）**
- 第二百十二条** 民間都市機構は、第二十九条第一項、第七十一条第一項、第七十八条第一項及び

により都市再生基本方針が定められるまでの間は、この法律の施行の際現にこの法律による改正前の都市再生特別措置法（以下「旧法」という。）第十四条の規定により定められている都市再生基本方針は、新法第十四条の規定により定められた都市再生基本方針とみなす。

第三条 特定都市再生緊急整備地域が指定されている都市再生緊急整備地域について、新法第十五条の規定により地域整備方針が定められるまでの間は、この法律の施行の際現に旧法第十五条の規定により定められている地域整備方針は、新法第十五条の規定により定められた地域整備方針とみなす。

第四条 この法律の施行の際現に旧法第十九条第一項の規定により組織されている都市再生緊急整備協議会は、新法第十九条第一項の規定により組織された都市再生緊急整備協議会とみなす。

（政令への委任）
第五条 前三条に定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

（調整規定）
第六条 附則第一条ただし書に規定する日が地方自治法の一部を改正する法律（平成二十三年法律第三十五号）の施行の日前である場合には、同法附則第四十三条のうち都市再生特別措置法第四十六条第十二項の改正規定中「第十二項」とあるのは、「第十五項」とする。

（検討）
第七条 政府は、この法律の施行後五年を経過した場合において、新法の施行の状況について検討を加え、必要があると認めるときは、その結果に基づいて所要の措置を講ずるものとする。

附則（平成二十三年四月二八日法律第三二号）抄
（施行期日）
第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成二十三年五月二日法律第三五号）抄
（施行期日）
第一条 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成二十三年六月二二日法律第七〇号）抄

（施行期日）
第一条 この法律は、平成二十四年四月一日から施行する。ただし、次条の規定は公布の日から、附則第十七条の規定は地域の自主性及び自立性を高めるための改革の推進を図るための関係法律の整備に関する法律（平成二十三年法律第五号）の公布の日又はこの法律の公布の日いずれか遅い日から施行する。

附則（平成二十三年六月二四日法律第七四号）抄
（施行期日）
第一条 この法律は、公布の日から起算して二十日を経過した日から施行する。

附則（平成二十三年八月三〇日法律第一〇五号）抄
（施行期日）
第一条 この法律は、公布の日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 第十条（構造改革特別区域法第十八条の改正規定を除く。）、第十二条、第十四条（地方自治法別表第一公営住宅法（昭和二十六年法律第九十三号）の項及び道路法（昭和二十七年法律第八十号）の項の改正規定に限る。）、第十六条（地方公共団体の財政の健全化に関する法律第二条及び第十三条の改正規定を除く。）、第五十九条、第六十五条（農地法第五十七条の改正規定に限る。）、第七十六条、第七十九条（特定農山村地域における農業等の活性化のための基盤整備の促進に関する法律第十四条の改正規定に限る。）、第九十八条（公営住宅法第六条、第七条及び附則第二項の改正規定を除く。）、第九十九条（道路法第十七条、第十八条、第二十四条、第二十七條、第四十八條の四から第四十八條の七まで及び第九十七條の改正規定に限る。）、第二百二条（道路整備特別措置法第三条、第四条、第八条、第十条、第十二条、第十四条及び第十七条の改正規定に限る。）、第百四条、第百十条（共同溝の整備等に関する特別措置法第二十六条の改正規定に限る。）、第百四十二条、第百二十一条（都市再開発法第百三十三條の改正規定に限る。）、第百二十五条（公有地の拡大の推進に関する法律第九条の改正規定に限る。）、第百三十一条（大都市地域における住宅及び住宅地の供給の促進に関する特別措置法第百条の改正規定に限る。）、第百三

十三條、第百四十一条、第百四十七條（電線共同溝の整備等に関する特別措置法第二十七條の改正規定に限る。）、第百四十九條（密集市街地における防災街区の整備の促進に関する法律第十三條、第二百七十七條、第二百九十一条、第二百九十三条から第二百九十五条まで及び第二百九十八条の改正規定に限る。）、第百五十三條、第百五十五条（都市再生特別措置法第四十六條、第四十六條の二及び第五十一条第一項の改正規定に限る。）、第百五十六條（マンションの建替えの円滑化等に関する法律第百二條の改正規定に限る。）、第百五十九條、第百六十條（地域における多様な需要に応じた公的賃貸住宅等の整備等に関する特別措置法第六條第二項及び第三項の改正規定、同法第五項の改正規定（第二項第二号イ）を「第二項第一号イ」に改める部分に限る。）並びに同法第六項及び第七項の改正規定に限る。）、第百六十二条（高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律第二十五条の改正規定（同法第七項中「とき」を「場合」において、次条第一項の協議会が組織されていないときは「」に改め、「次条第一項の協議会が組織されている場合には協議会における協議を、同項の協議会が組織されていない場合には」を削る部分を除く。）並びに同法第三十二條、第三十九條及び第五十四條の改正規定に限る。）、第百六十三條、第百六十六條、第百六十七條、第百七十一条（廃棄物の処理及び清掃に関する法律第五條の五第二項第五号の改正規定に限る。）、第百七十五條及び第百八十六條（ポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法第七條第二項第三号の改正規定に限る。）、第七十二条第四項、第七十三条、第五十条、第七十二条第四項、第七十三条、第八十七条（地方税法（昭和二十五年法律第二百二十六号）第五百八十七條の二及び附則第十一條の改正規定に限る。）、第九十一条（租税特別措置法（昭和三十三年法律第二十六号）第三十三條、第三十四條の三第二項第五号及び第六十四條の改正規定に限る。）、第九十二条（高速自動車国道法（昭和三十三年法律第七十九号）第二十五條の改正規定を除く。）、第九十三條、第九十五條、第百十一条、第百十三條、第百十五條及び第百十八條の規定、公布の日から起算して三月を経過した日

二 第二条、第十条（構造改革特別区域法第十八條の改正規定に限る。）、第十四條（地方自治法第二百五十二條の十九、第二百六十條並びに別表第一騒音規制法（昭和四十三年法律第九十八号）の項、都市計画法（昭和四十三年法律第百号）の項、都市再開発法（昭和四十四年法律第三十八号）の項、環境基本法（平成五年法律第九十一号）の項及び密集市街地における防災街区の整備の促進に関する法律（平成九年法律第四十九号）の項並びに別表第二都市再開発法（昭和四十四年法律第三十八号）の項、公有地の拡大の推進に関する法律（昭和四十七年法律第六十六号）の項、大都市地域における住宅及び住宅地の供給の促進に関する特別措置法（昭和五十年法律第六十七号）の項、密集市街地における防災街区の整備の促進に関する法律（平成九年法律第四十九号）の項及びマンションの建替えの円滑化等に関する法律（平成十四年法律第七十八号）の項の改正規定に限る。）、第七十七条から第九十九条まで、第二十二條（児童福祉法第二十一條の五の六、第二十一條の五の十五、第二十一條の五の二十三、第二十四條の九、第二十四條の十七、第二十四條の二十八及び第二十四條の三十六の改正規定に限る。）、第二十三條から第二十七條まで、第二十九條から第三十三條まで、第三十四條（社会福祉法第六十二條、第六十五條及び第七十一条の改正規定に限る。）、第三十五條、第三十七條、第三十八條（水道法第四十六條、第四十八條の二、第五十條及び第五十條の二の改正規定を除く。）、第三十九條、第四十三條（職業能力開発促進法第十九條、第二十三條、第二十八條及び第三十條の二の改正規定に限る。）、第五十一条（感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律第六十四條の改正規定に限る。）、第五十四條（障害者自立支援法第八十八條及び第八十九條の改正規定を除く。）、第六十五條（農地法第三條第一項第九号、第四條、第五條及び第五十七條の改正規定を除く。）、第八十七條から第九十二条まで、第九十九條（道路法第二十四條の三及び第四十八條の三の改正規定に限る。）、第一百一条（土地区画整理法第七十六條の改正規定に限る。）、第二百一条まで、第二十七條、第四十八條及び第五十條の改正規定に限る。)

（職能能力開発促進法第十九條、第二十三條、第二十八條及び第三十條の二の改正規定に限る。）、第五十一条（感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律第六十四條の改正規定に限る。）、第五十四條（障害者自立支援法第八十八條及び第八十九條の改正規定を除く。）、第六十五條（農地法第三條第一項第九号、第四條、第五條及び第五十七條の改正規定を除く。）、第八十七條から第九十二条まで、第九十九條（道路法第二十四條の三及び第四十八條の三の改正規定に限る。）、第一百一条（土地区画整理法第七十六條の改正規定に限る。）、第二百一条まで、第二十七條、第四十八條及び第五十條の改正規定に限る。)

、第百三条、第百五条（駐車場法第四条の改正規定を除く。）、第百七条、第百八条、第百十五号（首都圏近郊緑地保全法第十五条及び第百七条の改正規定に限る。）、第百十六号（流通業務市街地の整備に関する法律第三条の改正規定を除く。）、第百十八号（近畿圏の保全区域の整備に関する法律第十六条及び第百八条の改正規定に限る。）、第百二十号（都市計画法第六條の二、第七條の二、第八條、第十條の二から第十二條の二まで、第十二條の四、第十二條の五、第十二條の十、第十四條、第二十條、第二十三條、第三十三條及び第百五十八條の二の改正規定を除く。）、第百二十一号（都市再開発法第七條の四から第七條の七まで、第六十條から第六十二條まで、第六十六條、第九十八條、第九十九條の八、第百三十九條の三、第百四十一條の二及び第百四十二條の改正規定に限る。）、第百二十五号（公有地の拡大の推進に関する法律第九條の改正規定を除く。）、第百二十八号（都市緑地法第二十條及び第三十九條の改正規定を除く。）、第百三十一條（大都市地域における住宅及び住宅地の供給の促進に関する特別措置法第七條、第二十六條、第六十四條、第六十七條、第百四條及び第百九條の二の改正規定に限る。）、第百四十二條（地方拠点都市地域の整備及び産業業務施設の再配置の促進に関する法律第十八條及び第二十一條から第二十三條までの改正規定に限る。）、第百四十五條、第百四十六條（被災市街地復興特別措置法第五條及び第七條第三項の改正規定を除く。）、第百四十九條（密集市街地における防災街区の整備の促進に関する法律第二十條、第二十一條、第百九十一條、第百九十二條、第百九十七條、第百三十三條、第百四十一條、第百八十三條、第百三十一條及び第百三十八條の改正規定に限る。）、第百五十五條（都市再生特別措置法第五十一條第四項の改正規定に限る。）、第百五十六條（マンションの建替えの円滑化等に関する法律第百二條の改正規定を除く。）、第百五十七條、第百五十八條（景観法第五十七條の改正規定に限る。）、第百六十條（地域における多様な需要に応じた公的賃貸住宅等の整備等に関する特別措置法第六條第五項の改正規定（「第二号」を「第二項第一号」に改める部分を除く。）並びに同法第十一條及び第十三

條の改正規定に限る。）、第百六十二條（高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律第十條、第十二條、第十三條、第三十六條第二項及び第五十六條の改正規定に限る。）、第百六十五條（地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律第二十四條及び第二十九條の改正規定に限る。）、第百六十九條、第百七十一條（廃棄物の処理及び清掃に関する法律第二十一條の改正規定に限る。）、第百七十四條、第百七十八條、第百八十二條（環境基本法第十六條及び第四十條の二の改正規定に限る。）及び第百八十七條（鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律第十五條の改正規定、同法第二十八條第九項の改正規定（「第四條第三項」を「第四條第四項」に改める部分を除く。）、同法第二十九條第四項の改正規定（「第四條第三項」を「第四條第四項」に改める部分を除く。）並びに同法第三十四條及び第三十五條の改正規定に限る。）、の規定並びに附則第十三條、第十五條から第二十四條まで、第二十五條第一項、第二十六條、第二十七條第一項から第三項まで、第三十條から第三十二條まで、第三十八條、第四十條、第四十六條第一項及び第二項、第四十七條から第四十九條まで、第五十一條から第五十三條まで、第五十五條、第五十八條、第五十九條、第六十一條から第六十九條まで、第七十一條、第七十二條第一項から第三項まで、第七十四條から第七十六條まで、第七十八條、第八十條第一項及び第三項、第八十三條、第八十七條（地方税法第五百八十七條の二及び附則第十一條の改正規定を除く。）、第八十九條、第九十條、第九十二條（高速自動車国道法第二十五條の改正規定に限る。）、第百一條、第百二條、第百五條から第百七條まで、第百十二條、第百十五條（地域における多様な主体の連携による生物の多様性の保全のための活動の促進等に関する法律（平成二十二年法律第七十二号）第四條第八項の改正規定に限る。）、第百十九條、第百二十一條の二並びに第百二十三條第二項の規定 平成二十四年四月一日

（都市再生特別措置法の一部改正に伴う調整規定）

第八條 この法律の施行の日が都市再生特別措置法の一部を改正する法律（平成二十三年法律第三十四号）の施行の前日である場合には、同日の前日までの間における都市再生特別措置法第二十九條第一項第一号の規定の適用については、同号中「同条第五項第二号」とあるのは、「同条第五項第一号」とする。

2 附則第一條第一号に掲げる規定の施行の日が都市再生特別措置法の一部を改正する法律附則第一條ただし書に規定する日前である場合には、第百五十五條のうち、都市再生特別措置法第四十六條の改正規定中「第二項第三号イ若しくはハ」を「第二項第二号イ若しくはハ」に、「同項第四号」を「同項第三号」に改め、同条第二項及び第三項中「第二項第五号」を「第二項第四号」に改め、同条中第十四項を削り、第十五項を第十四項とし、第十六項を第十五項とし、第十七項を第十六項」と改め、「第二項第五号」を「第二項第四号」に改め、同条中第十一項とし、第十三項を第十二項とし、第十四項を第十三項」と、同法第五十一條第一項の改正規定中「第四十六條第十六項後段（同条第十七項）を「第四十六條第十五項後段（同条第十六項）とあるのは「第四十六條第十三項後段（同条第十四項）を「第四十六條第十二項後段（同条第十三項）」とする。

3 前項の場合において、都市再生特別措置法の一部を改正する法律のうち、都市再生特別措置法第四十六條の改正規定中「第十四項を第十七項とし、第十一項から第十三項までを三項ずつ繰り下げ」とあるのは、「第十三項を第十六項とし、第十二項を第十五項とし、第十一項を第十四項とし」と、「第二項第五号」とあるのは「第二項第四号」と、「第二項第三号イ若しくはハ」とあるのは「第二項第二号イ若しくはハ」と、「同項第四号」とあるのは「同項第三号」と、同法第五十一條第一項の改正規定中「第四十六條第十三項後段（同条第十四項）を「第四十六條第十二項後段（同条第十三項）とあるのは「第四十六條第十項後段（同条第十一項）とあるのは「第四十六條第九項後段（同条第十項）」とする。

（政令への委任）

第八十二條 この附則に規定するもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置（罰則に関する経過措置を含む。）は、政令で定める。

附則（平成二十三年一月四日法律第二二二号）抄

（施行期日）

第一條 この法律は、公布の日から起算して二月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 附則第六條 第八條、第九條及び第十三條の規定 公布の日

附則（平成二十四年四月六日法律第二六号）抄

（施行期日）

第一條 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

（経過措置）

第二條 この法律による改正後の都市再生特別措置法（以下「新法」という。）第十四條又は第十五條の規定により都市再生基本方針又は地域整備方針が定められるまでの間は、この法律の施行の際現にこの法律による改正前の都市再生特別措置法第十四條又は第十五條の規定により定められている都市再生基本方針又は地域整備方針は、新法第十四條又は第十五條の規定により定められた都市再生基本方針又は地域整備方針とみなす。

（政令への委任）

第三條 前条に定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

（検討）

第四條 政府は、この法律の施行後五年を経過した場合において、新法の施行の状況について検討を加え、必要があると認めるときは、その結果に基づいて所要の措置を講ずるものとする。

附則（平成二十五年五月二九日法律第二〇号）抄

（施行期日）

第一條 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成二六年四月二五日法律第三〇号）抄

(施行期日)
第一条 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成二六年五月二一日法律第三九号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

第二条 第一条の規定による改正後の都市再生特別措置法(以下「新都市再生特別措置法」という。)第十四条の規定により都市再生基本方針が定められるまでの間は、この法律の施行の際現に第一条の規定による改正前の都市再生特別措置法(以下「旧都市再生特別措置法」という。)第十四条の規定により定められている都市再生基本方針は、新都市再生特別措置法第十四条の規定により定められた都市再生基本方針とみなす。

第三条 この法律の施行の際現に旧都市再生特別措置法第四十六条の二第一項の規定により組織されている市町村都市再生整備協議会は、新都市再生特別措置法百七十七条第一項の規定により組織された市町村都市再生協議会とみなす。

第四条 この法律の施行の際現に旧都市再生特別措置法第七十三条第一項の規定により指定されている都市再生整備推進法人は、新都市再生特別措置法百八十一条第一項の規定により指定された都市再生推進法人とみなす。

(政令への委任)
第五条 前三条に定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

(調整規定)
第六条 この法律の施行の日が中心市街地の活性化に関する法律の一部を改正する法律(平成二十六年法律第三十号)の施行の日前である場合には、第一条のうち都市再生特別措置法第七十二条の九を第八十条とし、同条の次に二章及び章名を加える改正規定(同法百七十七条第一項第四号に係る部分に限る。)中「第六十一条第一項」とあるのは、「第五十一条第一項」とする。

2 前項の場合において、中心市街地の活性化に関する法律の一部を改正する法律附則第十五条

のうち都市再生特別措置法第四十六条の二第一項第四号の改正規定中「第四十六条の二第一項第四号」とあるのは、「百七十七条第一項第四号」とする。

(検討)
第七条 政府は、この法律の施行後五年を経過した場合において、第一条から第三条までの規定による改正後の規定の施行の状況について検討を加え、必要があると認めるときは、その結果に基づいて必要な措置を講ずるものとする。

附則 (平成二六年五月三〇日法律第四二号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 略

二 目次の改正規定(「第二節 中核市に関する特例」第三節 特例市に関する特例)を「第二節 中核市に関する特例」に改める部分に限る。、第二百五十二条の二十二第一項の改正規定、第二編第十二章第三節を削る改正規定、第二百六十条の三十八を第二百六十条の四十とする改正規定及び第二百六十条の三十七の次に二条を加える改正規定並びに次条、附則第三条、第三十三条、第三十四条、第四十条、第四十一条、第四十五条から第四十八条まで、第五十一条、第五十二条、第五十四条、第五十五条、第五十八条、第五十九条、第六十三条、第六十四条、第六十六条、第六十九条及び第七十一条から第七十五条までの規定、平成二十七年四月一日(都市再生特別措置法の一部改正に伴う経過措置)

第六十四条 施行時特例市に対する前条の規定による改正後の都市再生特別措置法第九十三条第一項の規定の適用については、同項中「及び同法」とあるのは、「中核市」とあるのは、「中核市及び地方自治法の一部を改正する法律(平成二十六年法律第四十二号) 附則第二条に規定する施行時特例市」とする。

附則 (平成二六年六月四日法律第五一号) 抄

第一条 この法律は、平成二十七年四月一日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 第四十五条の規定並びに附則第六条、第七十条及び第七十一条の規定、公布の日から起算して一年を経過した日

附則 (平成二六年六月四日法律第五三三号) 抄

(施行期日)
第一条 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

(罰則に関する経過措置)
第二条 この法律の施行前にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

(政令への委任)
第三条 前条に定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置(罰則に関する経過措置を含む。)は、政令で定める。

附則 (平成二六年六月二三日法律第六九号) 抄

(施行期日)
第一条 この法律は、行政不服審査法(平成二十六年法律第六十八号)の施行の日から施行する。

(経過措置の原則)
第二条 行政庁の処分その他の行為又は不作為についての不服申立てであつてこの法律の施行前にされた行政庁の処分その他の行為又はこの法律の施行前にされた申請に係る行政庁の不作為に係るものについては、この附則に特別の定めがある場合を除き、なお従前の例による。

(訴訟に関する経過措置)
第三条 この法律による改正前の法律の規定により不服申立てに対する行政庁の裁決、決定その他の行為を経た後でなければ訴えを提起できないこととされる事項であつて、当該不服申立てを提起しないでこの法律の施行前にこれを提起すべき期間を経過したもの(当該不服申立てが他の不服申立てに対する行政庁の裁決、決定その他の行為を経た後でなければ提起できないとされる場合にあつては、当該他の不服申立てを提起しないでこの法律の施行前にこれを提起すべき期間を経過したものを含む。)の訴えの提起については、なお従前の例による。

2 この法律の規定による改正前の法律の規定(前条の規定によりなお従前の例によることとされる場合を含む。)により異議申立てが提起された処分その他の行為であつて、この法律の規定による改正後の法律の規定により審査請求

に対する裁決を経た後でなければ取消しの訴えを提起することができないこととされるものの取消しの訴えの提起については、なお従前の例による。

3 不服申立てに対する行政庁の裁決、決定その他の行為の取消しの訴えであつて、この法律の施行前に提起されたものについては、なお従前の例による。

(罰則に関する経過措置)
第九条 この法律の施行前にした行為並びに附則第五条及び前二条の規定によりなお従前の例によることとされる場合におけるこの法律の施行後にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

(その他の経過措置の政令への委任)
第十条 附則第五条から前条までに定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置(罰則に関する経過措置を含む。)は、政令で定める。

附則 (平成二七年六月二六日法律第四九号) 抄

(施行期日)
第一条 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、附則第六条の規定は、地域の自主性及び自立性を高めるための改革の推進を図るための関係法律の整備に関する法律(平成二十七年法律第五十号)の公布の日又はこの法律の公布の日のいずれか遅い日から施行する。

附則 (平成二七年六月二六日法律第五〇号) 抄

(施行期日)
第一条 この法律は、平成二十八年四月一日から施行する。

附則 (平成二七年九月二一日法律第六六号) 抄

(施行期日)
第一条 この法律は、平成二十八年四月一日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 附則第七条の規定、公布の日

(政令への委任)
第七条 附則第一条から前条までに定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置

は、政令で定める。

附則（平成二八年六月七日法律第七二号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

第三条 前条に定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

第四条 政府は、この法律の施行後五年を経過した場合において、第一条から第三条までの規定による改正後の規定の施行の状況について検討を加え、必要があると認めるときは、その結果に基づいて必要な措置を講ずるものとする。

附則（平成二九年五月二二日法律第二六号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 附則第二十五条の規定 公布の日（政令への委任）

第二十五条 この附則に定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

附則（平成三〇年四月二五日法律第二二号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

2 この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

3 政府は、この法律の施行後五年を経過した場合において、第一条から第三条までの規定による改正後の規定の施行の状況について検討を加え、必要があると認めるときは、その結果に基づいて必要な措置を講ずるものとする。

附則（平成三〇年六月一日法律第三八号）抄

第一条 この法律は、平成三十年四月一日又はこの法律の公布の日いずれか遅い日から施行する。

附則（平成三〇年六月二七日法律第六七号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（令和二年六月一〇日法律第四三三号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、第一条中都市再生特別措置法第八十八条に一項を加える改正規定並びに同法第九十条及び第九十一条の改正規定、第二条中都市計画法第三十三条第一項第八号の改正規定、同法第三十四条第八号の次に一号を加える改正規定並びに同条第十一号及び第十二号の改正規定並びに次条及び附則第三条の規定は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

（都市再生特別措置法の一部改正に伴う経過措置）

第二条 前条ただし書に規定する改正規定（第一条に係る部分に限る。）の施行の日前に都市再生特別措置法第八十八条第一項又は第二項の規定によりされた届出に係る行為については、当該改正規定による改正後の都市再生特別措置法第八十八条第五項の規定は、適用しない。

第四条 前二条に規定するもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

第五条 政府は、この法律の施行後五年を経過した場合において、この法律による改正後の規定の施行の状況について検討を加え、必要があると認めるときは、その結果に基づいて必要な措置を講ずるものとする。

附則（令和三年五月一〇日法律第三一一号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 略

二 第二条の規定、第五条中下水道法第六条第二号の改正規定、同法第七条の二を同法第七

条の三とし、同法第七条の次に一条を加える改正規定、同法第二十五条の十三第二号の改正規定（「第七條の二第五項」を「第七條の第三第二項」に改める部分に限る。）及び同法第三十一条の改正規定、第六条の規定（同条中河川法第五十八条の十に一項を加える改正規定を除く）、第七条の規定（同条中都市計画法第三十三条第一項第八号の改正規定を除く。）並びに第八条、第十条及び第十一条の規定並びに附則第五条（地方自治法（昭和二十二年法律第六十七号）別表第一河川法（昭和二十九年法律第六十七号）の項第一号の改正規定に限る。）、第六条、第九条から第十二条まで、第十四条、第十五条及び第十八条の規定 公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日

附則（令和三年五月一九日法律第三六号）抄

第一条 この法律は、令和三年九月一日から施行する。

（罰則の適用に関する経過措置）

第五十九条 この法律の施行前にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

附則（令和四年五月二七日法律第五五号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（令和五年六月一六日法律第五八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一及び二 略

三 第七条の規定並びに附則第四条、第六条、第八条から第十四条まで、第十六条から第十九条まで及び第二十一条から第二十三条までの規定 公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日